
ジョジョの奇妙な冒険外伝～A New World The Story～

海棠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョジョの奇妙な冒険外伝 A New World The

Story

【ZIPPED】

N1828D

【作者名】

海堂

【あらすじ】

一巡した世界・・・殆どの人がそれに気付かず過ごしていた。ある【青年】も同じように過ごしていたが、【青年】にはある【奇妙な能力】を持っていた。そして、その【能力】に引かれるように様々な体験に【青年】は巻き込まれて行く・・・

プロローグ（前書き）

前に書いていた小説は削除しまして、新しく始めました。
訳ありませんが、これからも宜しくお願いします。

プロローグ

「貴方は【運命】を信じますか？」

もし突然、町中でこんな事を聞かれたら貴方はどうしますか？
大概は、【Yes】か【No】か【無視】をする。【Yes】と【No】を選んだ人は普通の人、うまい事言われて宗教に入らせられるか教材を買わされる。【無視】をする人も普通の人、そして相手がとても美しい女性だったら、何か悪い気がして結局は前者と同じようになる。

これは、人として当然の考え方で中には逆に騙す人もいる。

しかし、この【青年】は違った。【青年】は金髪のウルフカットでジーパンに黒いジャケットを羽織り、耳にはダイヤモンドのピアスを付けていた。【青年】はあの質問に対しこつ答えた。

「【運命？】あらうがなかろうが関係ないね。何故なら【運命】は自分次第で変えられるし、逆に消滅する・・・死ぬって事さ」

【青年】が答えた後、すかさず質問者は答えた。

「なら、貴方は【運命】を信じないのでですか？」

「言つたろ？どちらでもないって、だから俺は神も信じない・・・信じるのは【自分】だけ」

「おお、貴方は哀れな人だ。そんな貴方に言い話しがあるんですよ。今なら無料で我が教団に入れば貴方は運命に縛られることなく・・・」

「

「なら何故、神は俺を救わなかつた？」

「え？」

「はつきり言つて神何てクソくらえなんだ。例えば、餓死寸前の子供を神は救うか？白血病の患者を神は救うか？殺人鬼に殺されそうになる人を神は救うか？・・・神は救わないだろ？？」

【青年】はそう言い残して去つて行つた。

時は、20**年・・・世界の一部の人しか知らないが、世界は【一巡】して新しい世界になつていた。そして、新しい世界にも存在する【能力】と【正義】と【悪】・・・この三つが混ざりあつた世界で今、青年【ジョナス・ジョーズ】の物語が始まろうとしていた。

キング・ダイアモンドその1

オーストラリアは北にインドネシア、パプアニューギニア、東ティモール。南東にニュージーランドがある。アボリジニーや豪州先住民を虐殺、迫害してできた英連邦王国の一国であり、世界で6番目に大きな国である。

西オーストラリア州の外れに青年【ジョナス・ジョーズ】は住んでいた。彼は一人暮らしをしていて、車で1時間かかる西オーストラリア州の都市パースまで行き、小さな工場で働いて暮らしていた。そして今日も彼は、朝4時に起きて朝ご飯を食べ、歯を磨き、作業服に着替えていつもどおり工場に行き生活費を稼ぐため働きに行く。

ジョナスの着るものには、いつも何処かに【星形】のマークのついた服を好んで着ていた。

小さい頃から【星】が好きで、星の模様がついたコップ、皿、帽子、アクセサリーを集めていた。そして、ジョナスは耳に小さな星のピアスを付け、昨日とは色違いの右肩に星の模様が入っているTシャツを着て、その上から灰色の作業服を着た。その作業服のいたるところには星形のワッペンを張り付けていた。

「それじゃ、行って来るよ。」

ジョナスは、テレビにあげてある写真立を手に持つと数秒間眺めていた。その写真には小学生くらいの男の子と女の子が楽しそうな表情を浮かべていた。隣りには両親と思われる一人の男女が笑顔で写っていた。ジョナスは写真立を元の場所に置くと手提げ鞄を手に取

り、家を出た。そして、車に乗ると深い深呼吸をしてエンジンをかけた。

家の扉には何故か鍵穴がなかつた。その代り扉の上と下には半円状の金属がはめ込まれていた。

「今日も快晴だな」

俺はいつもと変わらない道を車で走っていた。現在は、4時30分、空は薄暗くまだ所々星が輝いていたが視覚でハツキリと確認できるようにならなかった。

車は此所まで来るまでに数台しか確認出来なかつたし、住民も殆ど外にいなかつた。

俺はこんな日が好きだ。

所々しか輝いていない星の下に自分一人だけしかいないこの空間が好きだつた。

しかし、今回は違つた。何故なら目の前には【何か】がいた。俺は近くの駐車スペースに車を止めてその【何か】に近付いた。そこには、一匹の白い犬だつた。種類は解らないが、犬なのは確かだつた。その犬の足からはおびただしい量の血が流れていて、犬はグッタリとしていた。俺は急いで手当てをしようとした。

「大丈夫か？今、手当をしてやるからな。」

犬は俺に気付いたのかゆつくりと目を開いた。しかし、俺が犬の近くにあつた小石を右手に取るといきなり俺の左手を噛んだ。

「痛つ！放せ！」

しかし、犬は噛んだ手を放さなかつた。逆に犬は力を加え、骨を砕かんいきよいで噛み、前足で左手を引っ搔いてきた。

「くそ、放せ！」

俺は咄嗟に犬の片方の前足を右手で押えた。

しかし、押えたのは俺ではなく【後ろにいる男】だつた。

男の姿は闘士のような格好をしていて、均等に鍛えられてある筋肉がまるで彫刻のような美しい姿だつた。

しかし、その男はさつきまで【存在していなかつた】。何故ならその男は俺の後ろから吹き出るように出現したからだ。

そして、その男が押えた手を退けると、犬の片方の前足はアスファルトと合体した。

正確に言えばアスファルトから生えてきた半円状の輪を片方の前足に取り付けただけだ。

しかし、犬は驚き俺の左手を放した。

俺は瞬時にもう片方の前足を同じようにした。そして、犬が何も出来なくなつた状況を見て俺はさつきの小石を手に持つた。すると小石は溶けるように姿を変えていった。変わったものは【消毒液】で

ある。そして、もつ一つの小石を手に取り、【包帯】に変えた俺は犬の血が出ている足を応急手当でした。犬はそれをジッと怯えるよう見ていた。

「痛つ！・・・」

俺はある事に気付いた。俺の左手には引っ搔き傷と深くまで開けられた犬の歯形で真っ赤になっていた。そこから血がポタポタと流れていった。俺はさつき使った【消毒液】と【包帯】を使って応急手当をしたが、直ぐに血が滲んできた。

「ちつ、今日は仕事休むか・・・」

俺は犬を繋げている輪を消すと、抱き抱えた。実は抱き抱えるかどうか一瞬だけ悩んだ。また噛まれるのは嫌だったからだ。しかし、俺は直ぐに考えるのを止めると犬を抱き抱えた。俺の後ろにいる【男】が抱き抱えて・・・

「お、噛まないのか?ラッキー・・・」

犬はさつきとは違う静かにして、俺を見ていた。俺は痛む左手をかばいながら携帯を取り出した。そして、工場に電話をかけて事情を話した。

「全く、お前のせいで工場長に怒られたじゃないか……覚えておけよ。」

俺は、電話を切ると犬に向つて愚痴をした。犬はまるで俺の言葉が解るのかすまなそうな表情をした。そして、俺は急いで車の後部座席の扉を開くと犬を寝かせるように乗せた。

「ん・・・」いつ、【バステット】って名前か。」

チラリとだが、首輪には名前が付けてあり、【バステット】と読めた。俺は少しだけ【カッコいい】と思いながら車を走らせた。後ろにいた【男】はいつの間にかいなくなっていた。

キング・ダイアモンドその2

「こんな時刻にやつてつかなあ・・・」

俺は左手をかばいながら車を走らせていた。時刻は5時をまわり空は青くなっていた。俺はまず動物病院を探した。俺の方が一番の重症だと思うが、犬がずっと俺を見ていたのだ。もし動物病院に行かなかつたら何か悪い事が自分の身に起きそうで怖かつた。

「たく・・おい【バステット】ー今から病院に連れて行くからな。
感謝しろー。」

犬にこんな事言つても解らないだらうなと思つていたが、なんと犬は俺の言葉に頷いた。

そして、犬は俺から視線を逸らすと外の景色を見ていた。俺は犬が頷いたのに驚いた。偶然だと思うが、心の中ではこいつ俺の言葉が解るのか?と思っていたが、猿が人間の言葉を理解するようにこの犬も人間の言葉を理解するんだなど決め付けた。犬は賢いからだ。そして、近くに動物病院を見つけた俺は近くに車を止めて、後部座席の扉を開いた。

「どつちも重症か・・・」

最初に飛び込んだのは、犬の後ろ足だった。

包帯は赤く染まり、所々、血が滲んでいた。犬がこちらを向いたので俺は優しく抱き抱えた。犬は何も抵抗せず俺の腕の中にいた。俺は少しホッとした。また噛まれると思ったからだ。俺は車を閉めて鍵をかけて、小走りで動物病院の前行き、少しホッとした。この時刻でやっていたからだ。時刻は5時10分をさしていた。

「最悪だ・・・」

俺は小さくそう呟いた。

何故この時刻に開いていたのか理解した。

覆面をした3人組の男が院長に銃を突き付けて脅していたからだ。よく見ておくべきだつた。病院の扉には無理矢理開けた形跡があつたからだ。俺は犬を抱えて3人の内の1人に銃を突き付けられた上体で座つていた。隣りには看護婦と思われる女性4人が同じく座つて怯えていた。院長に銃を突き付けている男は

「早く金だしな！」と脅して、大きな鞄をカウンターに乗せていた。

「大丈夫ですか？貴方とその犬・・・」

「大丈夫じゃないだろお・・・早く俺も病院行きたいんだ。」

隣りに座っていた看護婦が俺と犬を心配そうに小声で聞いてきた。
俺は早くこの状況を何とかしたかった。この犬を何とかしたいし、
俺も早く病院に行って治療したかったのだ。感染症でも引き起こし
たらたまたもんじやない、俺は嫌だった。問題はなかつた。男達
の武器を銃でしかも機関銃ではなく、単発の片手でも扱える銃だつ
た。俺の【能力】で倒す事は簡単だつた。しかし、もし人質でも取
られたら打つ手がない。俺は考えている時、犬はずつと俺を見てい
た。俺はその視線に気付いて犬に目線を移した。犬の目は黒く輝い
てまるでブラックホールに吸い込まれるような感覚があつた。俺は
犬から目線を外すと一人の赤い覆面（以降、赤覆面）を被つた男に
話しかけた。丁寧に。

「すいません。この犬怪我をしてしまつて、凄く苦しんでいるんで
す。ですから、この犬の治療をさせて欲しいのですがいいですか？」

「ああ？ 何言つてんだてめえぶつ殺すぞ！」

「おい、どうした？」

赤覆面の横にいた黒覆面の男（以降、黒覆面）が赤覆面に話しかけ
てきた。赤覆面は事情を話すと黒覆面が俺に言った。

「悪いな、それは出来ない。我慢してくれ。」

「そんな・・・それじゃこの犬を見殺しにするんですか！」

「黙れ！クソガキが！」

赤覆面は手に持っていた銃で俺の右頬を殴った。

5人の看護婦は短い悲鳴をあげた。しかし、俺はこの瞬間を待っていた。俺は殴られた瞬間その手を掴んだ。そして、その手に持つていた銃を一瞬にして2つ銃が合体した奇妙な銃に変えた。赤覆面と黒覆面の男達と看護婦達は驚いていたが、俺はこの隙を狙い合体した銃の内の1つの銃の引き金を赤覆面の男に向って引いた。

「パンツ！」と短い音を発した銃はまっすぐ赤覆面の左肩に当たった。赤覆面は悲鳴をあげると持つていた銃を放した。黒覆面は俺に銃を向けようとしたが、それよりも早く俺は引き金を引いた。弾丸は黒覆面の持つていた銃に当たり、落ちた。黒覆面は銃を拾おうとしたが、俺はまた引き金を引いた。今度は黒覆面の足に当たった。

黒覆面は

「バタ！」と倒れるのと同時に看護婦達が黒覆面と赤覆面を取り押さえた。プロレスのような技をかけていたので、赤覆面と黒覆面は呻き声をあげていた。

「おい、どうした！」

カウンターから黄色い覆面を被つたリーダーらしき男（以降、黄色覆面）は音に気付きこっちに来た。手にはパンパンに膨れた鞄を持っていた。俺は黄色覆面に対し引き金を引いた。しかし、弾丸は黄色覆面に当たらず、その向こうの壁に当たった。

「くそー！てめえ！」

黄色覆面は通路に隠れた。俺は、そのまま落ちていた銃を手に取ると黄色覆面がいる通路に2丁の銃を構えていた。

「早く！警察に連絡をしてくれ！」

「はい！」

看護婦の1人がポケットの中から携帯電話を取り出し警察に連絡するのと、男が投げた【何か】がこちらに飛んで来きて光を放つのとほぼ同時だった。俺と看護婦達は眩しさのあまり目を閉じてしまった。その時、看護婦の悲鳴とともに俺は首を締められて身動き出来なくなってしまった。

光が消えた後、俺は目を開けた。まだチカチカするが、この光景を理解した。俺と看護婦達は3人組の男に銃を突き付けられていた。俺の首に手を回していたのは、黄色覆面だった。俺のこめかみには銃が突き付けられていた。

「全く、おとなしくしてりやあ怪我せずに済んだのによおー・・・俺は人を殺した事がないが、今此所でお前を殺してやるー！」

黄色覆面は引き金を引こうとした。【能力】を使えば問題ではないが、看護婦達に被害を与えたくなかったので、俺は諦めた。これも

運命だから仕方がない。俺はそう思つて目を閉じた。そして、

「パンツ！」と短い発砲音が【3発】聞えた。看護婦達の悲鳴とともに、俺の体が急に重くなつたので、俺は目を開けた。すると、赤覆面が目の前で頭体血を流して倒れていた。同じように黒覆面と黄色覆面も頭から血を流して倒れていた。俺は何が起きたのか解らなかつた。

「大丈夫ですか？」

俺の後ろから声が聞こえたので、俺は振り返つた。そこには俺と同じ背丈で細身で髪が薄青の男が銃を持って立つていた。服装はジーパンに花の模様が描かれたシャツを着ていた。足には【包帯】が巻かれて血が滲み出していた。そして、俺はこの男を今、始めて知つた。

「あ、ああ・・大丈夫だ。有り難う。」

「私は、貴方に助けられましたからね。当然です。」

男は二コリと笑つた。しかし、俺はこの男を知らないし、助けた覚えがなかつた。そして、俺はある事に気付いた。【犬】が何処にもいないのだ。看護婦達は急いで警察に連絡しているなか、俺はあの【犬】を探したが、何処にもいなくいつの間にかあの男もいなかつた。俺は看護婦達に聞いたが、看護婦達も解らなかつた。

「あの男・・・誰なんだ？」

俺は考えていたが、ある事に気付いた。俺の手はいつの間にか血だらけになっていた。俺は看護婦達に事情を語りついて急いで、病院に行った。

バステットその1

その後、俺は病院に行き左手を医者に見せた。かなりの重症らしく、緊急手術をした。

左手には何重にも包帯が巻かれてうまく指が動かせなかつた。そして、医者からは2週間は包帯が取れないらしくその事を工場長に話したら怒られて、仕事をクビになつた。

俺は【運命】なんてどおでもいい存在だと思つていた。

しかし、もしあの【犬】に会わなければ俺は給料を貰えたのだ。人が生きるためにやらなければならない事を、あの【犬】に会つて、しかも【治療】をしてしまつたからこんな事になつてしまつたのだ。俺にとつてかなりのマイナスだが、貯金が結構ある。

今日から節約をすれば3ヶ月間は過ごせる。この左手を完全に治したら再就職をしよう。それに、あの【犬】にとつて俺との出会いで生き抜く事ができた。俺はあの時、看護婦【マリアン・ファーギー】とメル友になつた。そして、その子から連絡が来て、あの【犬】が見つかつたらしい。女子更衣室の中で蹲つっていた所を見つけて、急いで手術をして助かつた。しかし、その後行方がわからなくなつた。

「『じめんなさい!飼い主の貴方にとつて大切なペットを・・・

「飼い主?あの【犬】は怪我をしている所を俺が助けただけで、俺はペットなんて買つていない。」

「え、そうなの?懷いていたからてつきり貴方のペットかと思ったわ。」

「それよりも、あの【花柄Tシャツ】を着た男はどうなったんだ？」

「わからないわ。助けてもらつたからお礼くらいしようと思つたのに。・・・だけどあの男、【私のTシャツ】を着ていたのよ！何故着ていたかわからないけど全く、おかげで服伸びちゃつたのよ！あり得ないわ！もしかして、助ける前は裸だつたのかしら？変態だわ！・・・まあ、かつこよかつたから別に良いけど、むせい男だつたらぶん殴つてはわ。」

喜怒哀楽が激しい女性だつた。俺は彼女の愚痴や小言を1時間も聞いていた。

おかげで携帯料金が通常より3倍もかかってしまった。
最悪だ・・・節約を決めていたのに、早くも挫折しそうになつた。
それに、疑問が一つ。

何故あの男は彼女の服を着ていたのか。

これは俺の予想なのだが、もしかしたらあの【犬】が【男】に変身したのではないか。

それなら何故【犬】が【女子更衣室】の中で蹲つて居たのか説明がつく。多分、俺と同じ【能力】を生れつき備えているだろう。しかし、俺にはそんな事は関係ない。今、大事な事は3ヶ月間お金を節約して尚且、左手を治し仕事を探す事だ。俺は病院を後にすると家に帰ろうと車に乗つた。ハンドルを握ると手の甲に鈍い痛みが襲つた。俺はその痛みを我慢してエンジンをかけて車を走らせた。

それから一週間、左手の痛みは薄くなつたが未だ包帯は取れないでいた。俺は、リビングでコーヒーを飲みながらニュースを見ていた。内容は殺人事件や政治、経済。

何かの大会。

いつもと変らない、いつもどうりのニュース。
しかし、俺はある内容を真剣に見ていた。

それは最近、動物虐待が増えていて今日の朝、俺がいつも通っている道路で猫の変死体が発見されたと、男性キャスターが説明していた。

他人は、こういう奴は【残虐な人】や【危険な人】と思うが俺は違う。

俺は【臆病な人】と思っている。

本当は殺人要素があるのにもかかわらず、捕まつたらどうしよう、被害者の遺族は悲しむかもしれないと思い、犬や猫などの動物を殺す事で快楽をえる。

しかし、もしその動物が何処かの家で飼われていたら、その人が悲しむ事を【臆病な人】は知らない。

俺はコーヒーを飲みながら今、この時を過ごしていると突然、携帯が鳴つた。

俺はコーヒーをテーブルに置くと、携帯の液晶画面を見た。

液晶画面には、あの看護婦の名前が書かれていた。

俺はスイッチを押すと耳にあてた。

携帯の向こうから聞こえる彼女の声は慌ただしかった。

俺は落ち着くよう説得すると彼女の話を聞いた。内容はあの【犬】が瀕死の状態で運ばれたという。しかし、飼い主が直ぐに引き取ろうとしているから何とかして欲しいと、俺にとつては関係のない話しだつた。しかし、彼女が言うには俺はもう関わってしまったたらし

い。彼女は俺に早く来るよつて言つた、電話をきつた。

「なんだよいつたい・・・しょづがないな。」

俺は、テレビを消すと簡単に着替えて家を出た。そして、車に乗り込むと俺は深い深呼吸をした。

「またあの【犬】に関わるのかよ。」

エンジンをかけると俺は左手をかばいながらハンドルを握り、あの動物病院に向つた。

バステットその2

俺が動物病院に行くと想像以上に状況は深刻だつた。

俺は少しだけ離れた位置で見ていた。野次馬が集まり、警察も立ち入り禁止の冊を設け、いつでも突撃出来るような体制をしていた。

俺は看護婦【ファーギー】に電話をして、どうなつてているのか聞き出そうとした。この状況だ、俺には太刀打ち出来なかつた。数回鳴つて、彼女が出た。俺は有無も言わず、言つた。

「なんだ? この状況は。悪いが、幾ら関係があつても俺には太刀打ち出来ない。帰させてもらつぞ。」

「ちょっと待ちなさいよ! あの男が【ジョナスを出せ!】って言つてんのよ!..」

「なんでだよ? それに何故俺が関係してんだよ。そっちの問題だろ。」

「

「あの男が【誰が助けたんだ!】って言つて、話が進むに連れて貴方の名前が出たのよ。それで、男が【そのジョナスを出せ!】って言つてんのよ!だから何とかしてよ! 私達は今、手術室の中に【犬】と一緒に居るんだけど、院長が人質に取られたのよ!..」

最悪だ。何故、俺の名前が出るのか不思議だがそれよりも今、この

状況の中でもしかして俺が院長を助けなければいけない雰囲気がある院内で吹き出しているのか？ハツキリ言って嫌だった。その時、電話の向こうから弱々しい鳴き声が聞えた。

「あの【犬】生きてるのか？」

「ええ。今、意識を取り戻したみたい。だけど、まだ手術は途中なの。私達じゃ応急処置しかできないから、傷を縫う事が出来ないの。」

「院長しかできないからか・・・」

「そりゃ。だから早くなんとかして？この【犬】を助けたいの。」

「・・・わかった。」

「え！」

「その代り、俺が行くまでその【犬】を死なせるなよ。」

最後の方で【ファー・ギー】は泣いていた。多分、自分の未熟さに悔しいのだろう。俺は電話を切ると、野次馬が集まっている中をすり抜けながら行つた。そして、最前列まで行くと目の前には数十人の警察官が病院を取り囲んでいた。俺は、刑事らしき人に声をかけた。

「俺がジョナス・ジョーズです。中で男が僕の名前を言つてるんでしょ？行かせてください。」

「きみがジョナス君か・・・だが、駄目だ。犯人は武器を持つて立て籠もつている。人質もいるんだ。そんな所に君みたいな民間人を行かせる訳にはいかない。」

ごもつともな意見だ。しかし、俺は決めていた。刑事らしき人は拡張機を使い、立て籠もつている男を説得しようとした。しかし、男は「警察は黙つてろ！ ジョナスを出せ！」と言つていた。多分、警察と男の間ではこのような会話が続いていたのだろう。刑事らしき人は、困り果てていた。俺はもと来た道を戻り、病院の裏側に周った。警察からは野次馬が壁になつていてるので俺の姿は見えなかつた。病院の両隣りには人が2人分入る隙間があり、俺はその隙間を通つて行つた。中は日が当たらずジメジメしていた。俺は進むにつれふと、ある事を思つた。俺は【犬】のために助けに行くのか？

それとも、それ以外の【何か】を守るために助けに行くのか？だが、そんなのわかりっこない。もしかしたら両方かもしれないしどちらも当てはまらないかも知れない。

俺はそんな事を考えながら上を見上げた。俺より高い場所に病院の窓があつた。俺は周囲を確認した。俺の姿に野次馬の人とか通行人は気付いていなかつた。

「どつちでもいいんだ。俺は今、中の人に少なからず期待されてるからな。」

俺はしゃがむと後ろから【闘士のような形をした人】が現われた。
【そいつ】の左手には、俺と同じような傷が付いていた。【そいつ】
は俺が傷付くと同じ所に傷が付くのだ。【そいつ】が傷付くと俺に
も同じように傷が付く。そして、【そいつ】は俺と同じようにしゃ
がむと俺の両隣りの土になつている所から、白い壁が生えるように
現れた。その壁は通行人と野次馬から俺の姿を隠すように立つてい
た。

「何にでも、一樣は大事だ。勘違いされるからな。」

俺は立ち上がると、今度は【そいつ】が畠を浮べようと、俺の手が
届かない窓の出っ張りを掴んだ。

すると、俺の体も浮き始めて、【そいつ】が俺の腕を掴み軽々と持
ち上げた。

そして、俺は易々と病院内部を見る事が出来た。

俺は内部を確認すると軽く窓をノックした。そして、わざと窓の出
っ張りを掴むようにした。【そいつ】が俺を支えてくれたので楽だ
った。数秒後、内側からロックを外す音がした後、窓が開けられた。
その子は俺の姿を見て驚いたが、直ぐに俺に手を延ばした。俺はそ
の手を掴み、病院内部に入る事ができた。

「あ、貴方どうやってあんな高い所を登つて來たのよー。」

その子の目は赤く腫れていた。

「企業秘密だ。」

そこは、手術室だった。その子から数メートル離れた所には、4人の看護婦がいた。その真中には手術台に横たわるようにあの【犬】がいて、看護婦達はなんとかして助けようと皿盛の出来る事をしていた。

「今から、あの男と話をしてくれる。【ファーギー】はあの【犬】を何とかしろよ。」

「ええ、わかってるわ。それよりも・・・」

【ファーギー】は俺の周りを見渡すように見ていた。

「どうした？」

「いや、何でもない。それよりも気をつけたまね。」

「ああ、行つてくる。」

【ファーギー】は俺の後ろにいる【そいつ】が見えてくるのか?し

かし、そんな事は有り得ない。【そいつ】は俺以外、見る事も触る事も出来ないので。俺の勘違いだらう。【そいつ】は俺の後を追うよつこ歩き、【俺達】は男がいる待合室に向つた。

バステットその3

あれは何だったのだろうか。

あの【ジョナス】の後ろにいた、まるで守護霊のように立っていたあの男は何者なのだろうか。それに、【ジョナス】を見た時に【ジョナス】を支えるようにいたあの男には驚いたが、私は【ジョナス】の両隣りにあつたあの壁を私は知らない。私【マリアン・ファーギー】は、先輩方と一緒にあってあの【犬】を治療していた。しかし、それには限界があった。やる事がなくなつたからだ。いや、他にもまだあるが、それは院長が居なければ出来ないので。その時、【犬】が大量の血を吐いた。私は急いで、先輩方と一緒にあってその血を拭き取つた。

一体何をすれば、こんな痣が出来るのか解らなかつた。大きな痣がその【犬】の体に付いていたのだ。とても痛々しかつた。動物には何も罪はないのに、どうしてこんな事をするのだろうか。もう、神に願うしかなかつた。

「【ジョナス】・・・早く来て！」

私は囁くように願つた。もう涙なんて出なかつた。出るのはただただ囁くように祈る事だけだつた。

「誰だ！お前え！」

「俺がジョナスだ。」

手術室から出た俺を威嚇していた男は握っていた包丁を更に力を入れて俺を睨んでいた。カーテンを締めている待合室は昼間というのに暗く、開け放れた手術室の中の光でようやく男と院長の姿を確認出来た。

「なあにい・・お前がジョナスか？よくも俺の【犬】を助けたな！ゆるさねえ・・」

「ちょっと待て。何故、俺がお前に因縁付けられなきゃいけねえんだよ？」

俺は不思議に思った。何故なら男の人相はどうぞそのエリート銀行員だったのだ。先日、俺は銀行に行き今月分の生活費を下ろした時にチラリと見たのだ。その男は老人に丁寧に説明をしていたのだ。

「は！そんなのストレス発散の為に決ってるだろおおが！知つてるか？犬は飼い方次第でご主人様に忠実なんだぜ。その忠誠心を飼い主である俺が殺す・・これがまた俺のストレスを塩酸で溶かしたようにシuwシuwと解消してくれるんだよー」

狂っている。俺は少なからずそう思つた。男は院長の首を完全に口ツクすると、俺に包丁を向けた。

「だが、それもお前のせいで駄目になつたじゃねえか！」

「だから、その辺にいる動物を殺していつたのか？お前が動物虐待の犯人なのか？」

「よく気付いたなあ。」

男はまた院長の首筋に包丁を当てた。院長は「ヒッ…」と小さく呻くと恐怖で震えていた。

「だが、それでも苛々は消えなかつた…………そして、昨日何が起きたかわかるか？」

「……」

「フフフフフッ。全く飼い主に忠誠を誓つなんて……足を切り付けたのによおお。」

「……まあか！」

「【バステット】が俺の家の前にお座りをしてたんだぜ？クク・・・ハハハハハツ！笑えるぜ！俺に殺されるとも知らずによおおー！」

「あんた・・・狂ってるぜ。」

「おつと。こうすれば俺にはそんな銃弾なんか当たらぬいぜ？」

俺の後ろこいた【そいつ】は、手術室のドアノブを拳銃に変えて俺に渡した。どうやらあの男には【そいつ】が見えていなかつたらしい。俺は男に銃を向けたが、男は院長をしてしまった。

「どおするよ？ ジョナス。この院長」と撃つのか？ そうすれば【バステット】は助からないぜ？」

「・・・あんた銀行員だろ？ チラリと見た事があるんだ。銀行つてのはそんなにストレス溜まるのか？」

「ああ？ お前、銀行員の大変さ解つてねえだろ？ 毎日毎日能無しの奴等に説明しなきやいけねえんだぞ？ それに上司の奴等は偉そうに俺に仕事を大量に渡すんだぜ？ そんな低能ザル共のせいでストレス溜まるんだよー！」

男は院長の右肩辺りから顔を半分覗かせていた。俺の腕では、あの顔に銃弾を打ち込む技術なんてない。しかし、銃弾を当てるつもりはなかつた。なにも銃弾を当てる必要は無いのだ。銃弾以外の物で当てれば良いのだ。院長の首を完全にロックしている左腕をどうにかすれば良い。【そいつ】は俺が持っている銃の横に手を添えた。それと同時に俺は撃鉄を起こした。

「おい！お前、撃つのか？撃てねえだろうな。撃つたらこの人質も巻き添え食らうんだぜえええ！」

「院長・・少しだけ被害を受けますが、少しだけなら大丈夫ですか？」

「あ、ああ。少しだけならあの【犬】を治療出来るぞ。」

「てめえらー何話してんだよー俺を無視するんじや」

『パン！』

「うお！危ねえな！だが、当たつてねえんだよー！」

男の左腕の横を銃弾はかすめていった。しかし、【もう済んだのだ】男の後ろの壁から銃弾では無い、何か【重く、鈍い音】が聞えた。

男はその音のした方を向いていた。

（なんだ・・・ありや【斧】か？いつの間に【斧】があんな所にあつたんだ？それに何で【血】が着いてんだ？）

そして、数秒後。男はある違和感を覚えた。左腕に【熱い感覚以外、なにもなかつた】男は恐る恐る【左手】を見た。しかし、そこには左手はなくあるのは【左肩】だけだった。そこから大量に血が流れ出で、男は顔から大量の汗を流し、苦痛の表情を浮かべて、座り込んだ。

「院長、早くあの【犬】を治療して下さい！後は、俺がやります。」

いつの間にか男から離れてへたりこんでいる院長を俺は急かした。院長の服にはベッタリと血が付いていた。院長が行つた後、俺は男に銃を構えて近いた。男は

「ハア・・・ハア・・・・」と苦しそうに俺を見上げた。

「お、俺の負けだ。・・・助けて・・・くれ。」

「俺の負けだと？なに勝負を決めてんだ。」

俺は弱っているの男に間髪を入れず【そいつ】の拳で殴つた。その衝撃で男の口から何本か歯が抜けた。

「痛いだろ。これは俺の怒りだ。だが、あの【犬】に比べたら比較にならないほど優しいだろうな。」

「や、止めて・・くれ。俺が・・悪かったから。」

「そして、これはあの【犬】の分。」

【そいつ】は男の腹を拳で殴った。男はくの字に曲がると、そのまま息を荒くしていた。しかし、俺は男の髪の毛を掴み無理矢理立たせた。

「まだ終わつたちやあいねえんだよ！【これもあの犬の分】！【これも】！【これも】！【これも】！【これも】！【これも】！【これも】！【これも】！【これも】！【これも】全て犬の分】だああ！」

俺は何度も男の体中を【そいつ】の拳で殴った。男は体を有り得ない方に曲げると院内の窓ガラスをぶち破り、外に放り出された。外からは野次馬の悲鳴が聞えた。

「手加減は・・・して無いからな。それくらい、お前は命を奪いすぎたんだ。」

俺は、振り返ると急いで手術室に向つた。

院長のおかげで、【バステット】は助かつた。

1ヶ月、入院して退院したが飼い主がいなく保健所に連れて行かれたらしい。テレビには、あの【男】の写真が出ていて、【誰が殺したのか】【中で何が起きたのか】議論をしていた。看護婦さん達と院長が俺をかばってくれたのだ。俺は今、【一人】でテレビを見ていた。ソファに座り、リラックスしていた。

「それにしても、【ジョナス】様。あれは少々やり過ぎではありますか？」

後ろから突然、声が聞えた。俺は田の前にあつた空のコップを銃に変えて、後ろにいる奴に向けた。

「ちょ！銃を向けないで下さい。襲いませんから。」

「お、お前ー！」

俺は【この男】を知っていた。【この男】はあの時、【花柄のTシャツ】を来ていたが、今は、俺のお気に入りの服を着ていた。俺は銃を構えたままだった。そして、俺の中の【一つの疑問】をその【男】に聞いた。

「……【バステット】だな。」

「よくおわかりで……【ご主人】」

「何なんだ。お前は……どうして此所にいる?」

「それは、【ジョナス様】貴方が【私】の【飼い主】になりますから。」

「何を言つてんだ?」

「そのままの意味ですよ。私は【ジョナス様】に忠誠を誓つ。只、それだけですから。」

男【バステット】は笑顔で、きどったポーズをしていた。俺は構えていた銃を下ろすと、ソファに投げ落とした。ソファに落ちた時、既に銃は空のコップになっていた。

「お前も俺と同じ【能力者】か?」

「【バステット】・・・私に付けられた名前と同じ【スタンド名】です。能力は、【人】になる事が出来る。犬が最初から持っている機能をそのままに・・・」

「【スタンド】？これはスタンンドと書つのか？」

俺の後ろに立っていた【そいつ】を俺は見上げた。

「そうですよ。【主人】。所で【ご主人】のスタンド名は？」

「・・・【キング・ダイアモンド】だ。」

バステットは、俺の【スタンド名】を聞いて

「カッコいいですね。」と言った。しかし、そんな事よりも、俺はある【一つの問題】にぶつかった。この【バステット】を俺の家に住ませるのか。いや、もしかしたらそうしなければ、行けないのではないのか。俺は深くため息を吐くと、【バステット】を家に住ませる事に決めた。何もかも【強制】に事が進んで、俺は心底疲れてしました。

スタンダード紹介

スタンダード名・キング・ダイアモンド

本体・ジョナス・ジョーズ

パラメーター

破壊力：A

持続性：A

スピード：B

射程距離：D

精密動作性：C

成長性：E

能力

生物以外の物から別の物を作り出す。ただし、生物を作る事は出来ないし、一度変形した物体は元の物体には戻らない。

スタンダード名・バステット

本体：バステット【雑種の犬】パラメーター

破壊力：C

持続性：

スピード：C

射程距離：

精密動作性：C

成長性：C

能力

犬から【人間】に姿を変える事が出来る。その時、【嗅覚】は【人間】以上になる。

【破壊力】

純粋なスタンンドの攻撃力を表す。評価が高いほどスタンンドの攻撃力は強く、評価が低いとスタンンドで傷を付ける事も出来ない。

【持続性】

スタンンド能力をどの位、保てるかを表す。評価が高いほど長い時間、能力の効果が続く、評価が低いと効果は数秒間だけ。

【スピード】

スタンドがどれくらい早く動けるか。又は、攻撃の速さを表す。評価が高いほどスタンドのスピード又は、ラッシュ速度が早く、

評価が低いと遅い。

【射程距離】

スタンドの行動範囲を表す。評価が高いほどスタンドの行動範囲は長く、評価が低いとスタンド本体数mしか動けない。

【精密動作性】

スタンドがどれくらい精密に行動できるかを表す。評価が高いほど機械以上に精密に行動できる。評価が低いと、大雑把になる。

【成長性】

スタンド能力の応用力を表す。また、発現してまだ日が浅かつたり、スタンド本体の向上性があるものには評価が高い

この他に、パラメーターの横に付いている評価で【】はスタンドを解除するまで、効果が發揮する。

【ー】は評価が出来ない事を意味する。

そして、【A】は超スゴイ。

- 【B】はスゴイ
- 【C】は普通、人並み
- 【D】は二ガテ
- 【E】は超二ガテ

となっています。スタンドの定義は次の話で書きたいと思います。

午後のティータイムにて・・・

此所で、突然だが【バステット】から聞いた【スタンド】の説明をまとめてみようと思う。

【スタンド】とは、【生命エネルギー】が作りだす、パワーある像で、思いどおりに動かす事ができる【超能力】の一種。そして、それを【心の目】で見る事が出来る人を【スタンド使い】と言つらじい。勿論、スタンドにも【ルール】がある。

- ・【スタンド】は一人につき、一体。
- ・本人の意志で、ある程度その姿を変形できる。
- ・【スタンド】が傷つくと、【スタンド使い】も傷付く。逆も同じ。
- ・【スタンド使い】が死亡すると、【スタンド能力】も消滅する。
- ・【スタンド】は特徴的な一つの特殊能力を持つ。

【スタンド】の定義については、こんなもんだ。【バステット】も自分に【スタンド能力】が発現したのは、2年前だと言う事で、もしかしたらまだ知らない事があるかもしれないと言つていた。そして、【俺】は興味深い一つの話を【バステット】から聞いた。

「いいですか？【ご主人】。【スタンド使い】は、まるで宿命と言うべき【運命的なルール】があります・・・【スタンド使い】とス

・ タンド使いはひかれ会う】。【私】と【「」主人】が出会つたように。
・ 【私達】は同じ【スタンド使い】に出会つでしょ。・・・所で、
この番組面白いですね。」

【バステット】は【俺】に真剣な話をしたにもかかわらず、テレビ番組に興味を移した。こいつは本当に【マイペース】な奴だった。前までは、前の飼い主に殺されかけ、自分も死にそうになつたにもかかわらず、こうして【俺】の【ペット】として、住み着いている。今は、人間の姿になつて、【俺のソファ】に堂々と座り、コーヒーを飲んでいた。【元は犬】なのに、コーヒーなんか飲んで大丈夫なのか?と思ったが、【バステット】はいきよいよく【三杯目】のコーヒーを飲み干し、【俺】におかわりを要求して来た。

「おい、いい加減にしろよ。元々は【犬】なんだろう?体に悪いんじやないのか?」

「大丈夫です【「」主人】。【私】は食べれるものならなんでも食べれますから。」

「そなのか?だが、【バステット】。突然だが、お前は【遠慮】と言つ言葉を知つてゐるか?」

「馬鹿にしないでください【『』主人】。【私】は、その言葉はずつと前から知っています。」

【バステット】はむつとした表情を【俺】に向けていた。

「ならそれを今、使う時じゃないのか？お前は【俺】のお気に入りのコーヒーを【三杯】も飲んだんだ。【俺】でさえ一日一杯だけ、飲むのにお前は【三杯】も飲んだんだ。おりこれせんならわかるよな？」

「・・・わかりました。ええ、わかりましたともー！【私】は【『』主人】の為に今から【遠慮】を使いますとも！」

ふてくされたのか、【バステット】は【ソファ】から降りると、瞬時に【犬】に戻り、リビングから出て行つた。【俺】は置きつ放しのコーヒーカップを洗い、そのカップに新たにコーヒーを注いだ。無論、それは【俺】が今日最初の一杯となる【お気に入り】だ。

「全く、高いんだぞ。このコーヒーは・・・それに、【俺】は現在進行形で【無職】なんだ。【バステット】がいると折角貯めた【金】が無くなるだろ？に・・・【俺】はなんて甘いんだ。」

【俺】はソファに座るとコーヒーをするように飲んだ。やつぱりこつして飲んだ方が、コーヒー独特の香りを楽しめるし、優雅な気

分になる。【俺】はコーヒーカップをテーブルに置いて、ソファに横になつた。

「【スタンド使いとスタンド使いはひかれ会う】か・・・全く、なんて迷惑なルールなんだ。【俺】は只、こんな優雅な昼をのんびりと過ごしたいだけなんだ。後、何処か就職に就いて欲しい物を買う。これが【俺】にとつて一番の幸せなんだ。」

【俺】はそつぼやくと、余りにも気持ちがよい太陽の光にウトウトしたので、昼寝をした。

【俺】は夢を見た。それは、【俺】の幼い頃の夢で忘れる事が出来ない只一つの夢である。

【俺】には、幼い頃血が繋がらない妹がいた。名前は【オリ】【コ】と言つて、まるで日本人っぽい名前だが【俺】と同じよつこ【星】が好きで、よく【俺】と一緒に家の屋上から天体観測用の望遠鏡を担いで、【星】を見ていた。オーストラリアの夜空には、無数に輝く

【星】で殆ど毎日輝いていた。しかし、夜は寒いのだ。【俺】は【オリ】に自分の上着を着せると、【有り難う】と笑顔を【俺】に向けてくれる。

「お兄ちゃん、【星】綺麗だね。」

「ああ、そうだな。」

その時が、一番幸せだった。出来れば、この夢を【俺】に永遠に見せて欲しかった。しかし、【俺】の見る夢は決って【残酷】なのだ。まるで、【俺】を試しているかのように、何度も見せて来る。

場所は変わり、【俺】は自分の部屋のベットから起き上がった。一階から物音が聞こえたのだ。

その時の【俺】は小学生で、こんな真夜中だ。

怯えるのが普通だが何故か【俺】は一階に降りて行った。

一階では、【オリ】と母と父が寝ていたので、多分トイレだと思った。

しかし、【音】は【オリ】の寝ている部屋から聞こえてきたのだ。その音はあの頃はわからなかつたが、あの【音】は確かに【あれ】をしている【音】だつた。

【俺】は恐る恐る扉を開き、覗いた。【オリ】は怖がりなので、寝る時は小さな灯を付けて寝ている。そして、【オリ】のいる辺りから何かが、動いていた。それは一目で人だとわかり【俺】は、急いで母と父が寝ている部屋に向つた。【俺】はその部屋を開けると絶望した。月明りの光でよくわかつた。母は首を切られ、胴体と離れていて父は顔を滅多刺しられて、グシャグシャだつた。

「可哀相に・・・見つからずに自分の部屋で寝ていれば、苦しまず
に済んだのに・・・」

【俺】は驚き、後ろを振り返った。そこには、全身真っ黒の男がいた。体は太くて大きく無精鬚を生やした男は手に血がべつとつと付いた包丁を持っていた。

「本当は、金品だけ盗もうと思つたんだがよお・・・こんな幸せそ
な所だとなんかむかつくんだよなあ。」

男は、飾つてあつた【写真立て】を手に持ち眺めていた。その隙を
付いて【俺】は【オリ】のいる部屋に向つた。【オリ】だけでも
も無事でいて欲しいと心の中で思つていたかもしれない。しかし、
それがいけなかつた。【俺】は絶対見ては行けない物を見てしまつ
たのだ。

【俺】は【オリ】の部屋に行き、【オリ】を起こそうとした。
しかし、【オリ】は起きなかつた。そして、【俺】はある事に気
付いた。自分の手に血がべつとりと付いていたのだ。【俺】は恐る
恐る【オリ】の胸を見た。そこからは、血が溢れんほど流れ出て
いて、その血が【俺】の手に付いていたのだ。

「そのガキ・・・お前の妹か?」

男は、【俺】の後ろに居たが【俺】は自分の手に付いていた血を見ていた。【俺】にとっての幸せは、一つは家族四人で楽しく食事をする事。

「全く、手間取らせやがって・・・だが、【締まり具合】はよかつたんだぜ?ま、お前みたいなガキにはわからねえと思つがなー。」

「一つは、【オリコ】と一緒に見る天体観測。

「さて、そろそろお前にも【逝つてもらおうか】。」

三つ目は、【俺】が幸せだと感じる事。

「大丈夫だぞ。あの世に逝けば、また会えるからよおー!」

男は、【俺】の首に手を回すと包丁を喉仏に当てようとした。その手を【俺】は思いつきり噛んだ。男は痛さの余り包丁を放して、後ろに退いた。

「てめええ、何しやがるー!」

「ハア・・・ハア・・・あんたは・・・許さない。」

「も、もう死ねえええーお前は、もう死ぬんだよー。」

男は顔を真っ赤にして、【俺】に覆いかぶさり首を締め上げた。

【俺】は息が出来なくなり苦しむように喘いだ。男は笑いながら、徐々に力を加えてきた。【俺】はもう黙口だと諦めかけた時、手に冷たい物が触れた。それはズッシリと重く、先が尖っていた。【俺】はそれを持つと、男のむき出しの首に突出した。それは男の落とした【包丁】だった。【包丁】は男の首に刺さると、大量の血を吹き出した。

「ぐええつ！・・て、てめえ、止め・・わおお・・・」

男の両手の力が抜けて、【俺】は今度は両手で【包丁】を掴むと、全体重を込めて、刺した。【包丁】は首を貫通して同時に男は白目を向けて、前のめりに倒れた。

「ハア・・ハア・・ハア・・・」

男は重く、【俺】に乗つかつていて、血がベットを赤く染めていた。【俺】の隣りには、冷たくなっている【オリコ】が眠るようにして死んでいた。【俺】は【オリコ】の頬を撫でた。まるで雪のようだ。白く、冷たかつた。

「「」あんよ【オリコ】・・・だけど兄ちゃん、お前の【プライド】

は守れた氣がするよ・・・だから、こんな兄ちゃんを・・・許してくれ！」

【俺】はわかつていた。男が【オリコ】にした【人権を汚す行為】【死人を犯す行為】を少なからず知っていた。何故ならそんな類いの本を見ていたからだ。【俺】はその頃から、何処か歪んでいたかもしれない。【オリコ】に対する愛情ももしかしたら歪むのではないかと、怖かった。そしてその思いをあの男により、幸せな生活と一緒に消えて行つた。

そこで、【俺】は夢から覚めた。そして、最初に目にしたのは、【バステット】が【俺】のコーヒーをガブガブと飲んでいた所だった。

「おい、お前！それは【俺】のコーヒーだぞ！」

【バステット】は「コーヒーカップから、口を放すと、唇をペロリと舐めた。

「冷めていましたからねえ。飲まないかと思いましたから【私】が飲みました。」

「だからってな・・・普通飲まねえだろ！」

その時、テーブルに置いてあつた携帯電話が鳴つた。【俺】は【バステット】を睨み付けながら携帯を手に取つた。【バステット】はおかまいなくカップの底を舐めていた。

「もしもし。」

「ジョナス・・・助けて・・・」

掠れた声で聞こえてきたのは、【ファーギー】だった。ただならぬ雰囲気を感じた【俺】は【何処にいるか】を聞き出そうとしたが、そこで電話が切れた。

「どうしましたか？【ご主人】」

【バステット】は【一ヒーカップ】をテーブルに置くと【俺】に聞いてきた。

「【ファーギー】に何かあつたらしい・・・行つてくれる。」

「何処にいるかわかるんですか？」

肝心な所を【バステット】は突いてきた。【俺】は【ファーギー】が何処にいるのか、全くわからないのだ。

「わからないなら、【私も行きますよ】。【私】には【嗅覚】がありますから。」

「わかった・・・なら一緒にいくぞ。」

「はい。【主人】」

こうして、【俺】と【一匹】は【ファーギー】を探す為、外に出た。外は夕日が顔を覗かしていた。

ジャミロクワイエー（前書き）

後書きにて、言い訳あり。

ジャミロクワイヤー

【私】には、弟がいる。以前は【ネー弔】と信じ、小学生の頃は明るくて、元気がよく、笑顔が似合つ弟だつた。しかし、今は【ド】がつく程の不良】になつてしまつた。いつも【私達】を育ててくれた母親を齎しては、お金を奪うと、夜遅くまで遊んでいるのだ。【私は【ネー弔】を叱るが、【ネー弔】は何処からかナイフを取り出すと【私】を齎す。【私】は母に相談するが、母はいつも【ネー弔】を庇うのだ。親が子を思うのと同じなのだろうか。しかし、これは行き過ぎだ。やはり、此所は【私】が何とかしなくてはならない。これもやはり、【私】が【ネー弔】を思つ氣持ちと同じだと思ひ。

【ネー弔】は、幼い頃ある【特技】があつた。【鉄ならなんでも体にくつづける特技】だ。その特技を使い、【私】や母を楽しませていた。あの頃が、とても懐かしかつた。あの頃に戻りたいと何度も思つた。それが、あの時【ネー弔】は変わつてしまつた。

【ネー弔】がある【男】に出会つた次の日には、【ネー弔】は【ネー弔】じゃなくなつた。その男は長身でつり上がつた頭をギラギラと輝かせて、【ネー弔】に驕くように耳元で何かを言つと、その瞬間【ネー弔】は喜んで頷いていたのだ。【私】は、その一部始終を物陰で見ていで、家に帰る【ネー弔】に問質してみると、もうその時から【ネー弔】はあの頃の【ネー弔】ではなかつた。これは、【ネー弔】13歳の頃の話である。その頃からまるで地獄のよう【ネー弔】は母を齎すよつになつた。だから、【私】は【ネー弔】を更生させたいし、あの男がなんと言つたのか知りたかったのだ。

その日、【ネー弔】は何も言わずに家を出た。

時刻は午後13時5分。

太陽の光が心地よく照らすなか、ニコースでは今日の夕方から嵐が吹くとか言っていたが、そんなものは微塵も感じられない晴れた日、【私】は携帯電話と財布を持ち、【ネーヨ】に気付かれないように後をつけた。今日【ネーヨ】はシャワーも浴びず家を出たので、髪はボサボサだつたが気にも止めず、黙々と歩いていた。【私は】【ネーヨ】の後ろ10mの所を物陰から移動しながら後を追つて行った。

「今日こそ・・・【ネーヨ】を見つけだして問質すんだ。一体何があつたのか・・・」

此所数週間、【私】は【ネーヨ】を見つけていた。
あの男に何を言われたのか気になるし、もしかしたらその男に出会うかもしれない。

【私は道行く人々に怪しまれないように、片手に持っている金槌を隠しながら後をつけた。もしあの男が【ネーヨ】に近いたら、この金槌で【ネーヨ】を守ろう。もしかしたら相手は銃を持っているかもしれないが、それでも【私】は【ネーヨ】を守ろう。【ネーヨ】が路上を右に曲がるのを見て、【私】も同じように右に曲がった。しかし、そこには【ネーヨ】の姿はなく真っ暗な路地がまっすぐ続いていた。

「そんな・・・また見失うなんて！」

【私は周りを見渡し、急いで戻った。今日の【私】は何処かおかしかった。何時もなら此所で諦めるのだが、今日に限って【私】は路地から顔をだして辺りを“キヨロキヨロ”と見渡すと、あの真つ

暗な路地を急いで進んだ。悪い事が起きようとしていた。【私】は理由もなく、直感でそう思った。そして、【私】は右側の建物から屋上に続く、階段を見つけた。

もしかしたら、屋上に居るかもしないと思い、【私】はその階段を登つて行った。

【ファーギー】から数メートル離れた所、暗い路地に建つてある建物の屋上に【ネー弔】が壁に寄り掛かるようにしてしゃがみこんで【ファーギー】を観察していた。【ファーギー】は、辺りを“キヨロキヨロ”と見渡すとともにときた道を戻っていた。【ネー弔】は安堵の溜め息をついた。

「全く、弟思いのいい姉ではないか。」

【ネー弔】の後ろに重なるようにして、緑色の髪を針のよに所々

立てている男がいた。男は【ネー弔】の耳元に口を近付けて囁いた。

「さて、行こうか。」

「ちょっと待つてくれ・・・まだ行けない。」

男が立ち上がりとした時、【ネー弔】は男を止めた。そして、男は【ネー弔】が見ている路上を見た。そこには帰つて行った【ファーギー】が、あの路地を忙しなく進んでいた。男はそれを見て舌打ちした。

「此所まで弟思いだと、迷惑だな。殺すか？」

「待つてくれ！これは姉ちゃんは関係ないんだ。だから、殺さないでくれ！」

【ネー弔】は、男にしがみついて訴えるようにして男を止めていた。

「なら、何とかして来い。いいか？もし、俺の姿をあの女に見られてしまつたら、俺は問答無用に殺す。」

男が、【ネー弔】を睨み付けるように言つと、奥の階段から足音が聞こえてきた。【ネー弔】その音に“ハツ”とするとすかさず屋上

から路地を見た。そこには【フアーギー】の姿はなかつた。

「わあ、どうする？【ネー三】。」のままでは、君の姉は俺の姿を見る事になるぞ！」

「へえ……」うなづいたり。

【ネー三】は、階段の近くにあつたら本のドラム缶を見た。するとドラム缶は、“ズルズル”と音を発すると、浮き始めた。そのドラム缶はまるで【ネー三】に吸い付くように飛んでもると、【ネー三】と男の周りで止り、“ドトリ”と音を發してその場に置かれるように動かなくなつた。

「考えたな。」の場でよく思い付くとは……

「貴方が俺の【能力】を開花させてくれたお陰です。」

ドラム缶は、【ネー三】と男を隠すようにして、置かれていた。そして、【ネー三】に纏わりついてよじて灰色の覆面を被るような姿をした男がいた。

「【ジヤロクワイ】……」の能力は、貴方が教えてくれた物だ。

「

「そうだな……だが、【ネー三】。頬は一つだけ、失敗しているのだよ。」

【ネー三】は“えつ”と呟いた。男はドラム缶の隙間から外を覗いていた。

「君はドラム缶を動かす時、音を発してしまった。些細な音だが、それがいけなかつた。見てみる。」

男は促すように、【ネー三】に外を見るように言つて、【ネー三】はドラム缶の隙間から覗いた。そこには、【フアーギー】が階段の手摺を掴み、辺りを見渡していた。

「なんだよ……脅かすなよ。それにドラム缶の動く音で姉ちゃんが気付くはずなんて……」

すると、【フアーギー】はわざ今までドラム缶のあった場所を見ると次に今、置かれてあるドラム缶を見た。

「ヤレヤレのね【ネー三】……」

【ネー三】は【フアーギー】の一言で、心臓が飛び出るくらい驚いた。【フアーギー】は“「シロジ”と音を発してこちりに近付いて

来た。

「あの音は、ドリーム缶でかかる音だったのね。チラリとだけ飛び登る時、聞こえたわ。あと屋上を見たけどそんな所にドリーム缶はなかつたわ。短時間でどうやつたか知らないけど、感じるわ・・・そこには【ネー三】がこるのね。」

【ファーギー】は、どんどんこちらに近づいて来て、その距離は短くなっていた。

「どうあるんだ?」のままでは、何も知らない君の姉は俺を見てしめた。

男は【ネー三】に尋問をするように、聞いてきた。【ネー三】は田をキツく閉じると、閃いたのか田をカツと開いた。

「『』のんよ姉ちやん・・・【ジャミロクワイヤ】能力を解除する。」

【ネー三】がそろそろと、ドリーム缶が少しだけ浮き始めた。【ファーギー】は“えつ”と齒ぐとドリーム缶は【ファーギー】田掛けて飛んでいた、【ファーギー】を巻き込んで、元の場所に吹き飛んでいった。【ファーギー】は“あやつ”と齒ぐと、階段を転がるようにして落ちていった。

「そんな…まさか、階段を落ちていくなんて……」

【ネー弔】はすぐに階段に近付き、手摺を持ちながら降りていった。
【ファーギー】は仰向けの状態で倒れていた。頭からは血が流れているが、命に別状はなかった。

「よかつた。氣絶で済んで……」

「ああ、そうだな。それじゃ行くか。」

「ちょっと待つてくれ！姉ちゃんを病院へ・・・」

【ネー弔】は【ファーギー】を抱え込もうとするが、後ろにいた男が【ネー弔】の腕を掴んだ。

「これはお前がまいた種なんだ。だがな、俺にひとつその種はどうでも言い事なんだ。」

「だ、だけど・・・」

男はギラギラした目を窓に窓つて、【ネー弔】に向かって

「それに、お前は姉を巻き込まなこようにな不良を演じていたんだろ

?それが逆効果だつたと今、始めて知つただろ?しかし、今この時から君は生まれ変われるんだ・・・君の姉は大丈夫だ。俺が後で、病院に行かせてやるから君はあの場所に行つてみ。」

「・・・わかつた。」

【ネー三】は、【ファーギー】の肩から手を退かすと、促されるようになに奥に消えて行つた。一人になつた男は、倒れている【ファーギー】を見下りしていた。

「悪いが、君を病院に運ぶ事は出来ない。いや、【しない】。さて、少しだけ時間を潰すか。」

男はゆつくつと、路地の奥に消えて行つた。

ジャミロクワイエー（後書き）

遅いですが、明けましておめでとうございます。いつも小説を見て
くれて有り難うございます。そして、小説更新が遅れてしまつて申
し訳ありません。理由は三つあります。

一つは、此所数か月前に始めたベースの練習です。今は仲間内でオ
リジナルの曲を作るために遅れてしまいました。

二つ目は、一つ目と重なるようにして、冬休みが忙しかったからで
す。やっぱり友達付合いは大切にしたいので遊んでいるうちに、疲
れて家に帰ればそのまま寝る事がありましたので、遅れてしまいま
した。

三つ目は、最近買った【ファイナルファンタジー】を夜遅くまでや
ついていて遅れてしましました。

言い訳としか捉えられないくらいの理由ですが、これからも頑張っ
て更新していきたいので今年も宜しくお願ひします。

ジャミロクワイの2

太陽が徐々に沈み、辺りが黄金色に染まるなか、【ネー三】はある一件の一階建てで、ガレージが備え付けられている空き家の中で、【ネー三】は電気がついている部屋の中で、タンスを退かしたり、テレビの裏を見たり、まるで何かを探すような仕草をしていた。

「へへ、ねえぞ。本棚の家のなかにあんのかよ・・・」

「・・・なきや困のだよ。絶対この家の中にあるはずなんだ。」

半分だけ、開かれていた扉が“ギイイ”と音を発して開かれた。【ネー三】は、廊下の角から顔を出して扉を開けた男を疑うように目を細めて見た。

「・・・騙してるわけじゃねえよな？俺は、【守るべき物】があるからあんたに協力しているんだぞ。」

「俺は嘘はつかないや、誓つてもいい。」

男は、扉を閉めると【ネー三】がいるリビングの中に入つていった。リビングの中は埃が積り、歩くと積つっていた埃が舞い、周りをぼやけさせていた。【ネー三】はせき込みながら、男を睨み付けていた。何故なら男は歩き回りながら染み付いている壁や、本棚を見ていたのだ。

「おー、あまり歩き回るな！埃が舞うだろうが……それにあんたも一緒に探してくれてもいいんじゃないのか？」

「……俺はこの町で五年間も【あれ】を探していたんだ。」

「……はあ？」

「色々な家を探して……しかし、思い出す事ができないんだ。何処になくしたのか全く思い出せなかつた。」

男は、懐かしそうに壁を撫でた。壁に付いていた汚れがとれ、男の人差し指に黒く付いていた。男は、人差し指に付いた汚れを親指に擦り付けながら、【ネーヨ】の方を振り向いた。

「だが、この家を見て、俺は全てを思い出したのだよ。……頭の中のシナプスの電気信号が活発になるのが、よく分かるんだ。・・・此所だ！て言つてゐるのが、わかるんだ。」

男の話を黙つて聞いていた【ネーヨ】は、動きを止めていた手を動かして、テレビの下にあるビデオテープを取り出し始めた。

「マジか？此所にあるんだな。なら、探すのを手伝ってくれよ。」

「ああ、此所にあるのは間違いないんだ。只・・・」

「只?」

「・・・何処に落としたのかわからないんだ。」

男は顎に手をあてて考えていた。その言葉を聞いた【ネーヨ】は、ゆきりと立ち上がると男の方に近付いて行つた。

「・・・ん? どうした。」

【ネーヨ】は、男の胸ぐらを掴むと男の右顎を殴つた。男は殴られた方向に顔を向けたが、目は【ネーヨ】を見据えていた。

「てめえ・・・俺が一体どの位の家を探してきたと思つてんだ! それに、何処の家に行つてもあんたは、此所じゃないとかほざくしよお! それに、此所だとしてもどの辺に落としたのかも知らないなんて、あんた俺を騙してんじゃないのか! ああ?」

「・・・言いたいのはそれだけか?」

「・・・はあ？」

【ネー・ヨ】が“何言つてんだ”と思った瞬間、【ネー・ヨ】の顔面に強い衝撃と痛みが襲い、奥の壁に吹き飛ばされていった。【ネー・ヨ】は呻き声をあげながら立ち上がろうとしたが、足が震え、うまく立てずにいた。

「俺が何のために、君に手伝わせて尚且、君の願いを叶えてやっているのかわからないのか？」

「・・・・」

【ネー・ヨ】は、黙つて男を睨んでいた。男の横には、全身緑色で悪夢とも天使とも言えない【人型】が、鋭い目線を【ネー・ヨ】に向けていた。

「君の能力には価値がある！何故、その能力を使わないのだ！」

「俺の・・・能力？」

男は、口から流れ垂れる血を拭うと横にいた人型は消えていた。そして、男は【ネー・ヨ】に近付いて手を差し伸べた。

「価値のある人間には、俺は協力は惜しまない。・・・それと、さつきは殴つて悪かつた。だが、一発は一発だからな・・・」

「いや・・・こっちも悪かつた。つい、カツとなってしまって・・・

」

そう言つと、【ネー三】は男の手を取り、立ち上がつた。もう足の震えはなかつた。

「・・・・ちょっと失礼。頭に埃が付いてるや。」

男が【ネー三】の頭に手を乗せた瞬間、【ネー三】の目が“グリン”と白目を向き始めた。そして、偶然と立つてゐる【ネー三】の耳元で男は何かを囁いた。囁き終わつた男は【ネー三】の頭を“ポンポン”と優しく叩くと、【ネー三】の耳は正常に戻つた。

「さて、それじゃ俺は二階の方を探して来るから、君は此所を探しなさい。」

「・・・・はい。」

【ネー三】は、まるで操り人形のようにフランフランとコビングを出る

と、隣りの部屋えと消えていった。

暗い路地の中、一人の女性が倒れていた。額から流れる血がゆっくりと少しづつ路地を血で、染めていた。その時、女性の右手が“ピクリ”と動くと呻き声をあげて、女性は目を覚ました。

「・・・あの・・・ドラム缶が・・・吹き飛ぶ・・・時・・・チラリと見えた。」

そう呟くと、上体を起こそうと、腕に力を入れようとしたが、うまく力が入らず、“ドシャ”と音を発して倒れてしまった。

「これは・・・血?・・・誰の?・・・私の?・・・流れ過ぎだわ・・・」

女性は、何とか上半身を起しすと、壁に寄り掛かり、右手で頭を撫

でた。その手には先程流れていった血がべつとりと付いていた。そして、何かに気付いたのか、女性は周りを“キヨロキヨロ”と探して、ない事に気付くとまた力なく壁に寄り掛かった。

「頭が・・・ボーとする・・・もう駄目だわ・・・」

女性は、向かい側の壁を“ジッと”見つめていた。頭の中では、走馬灯のように楽しかった日々を思い出していた。あの頃の【ネーヨ】は優しく、母思いの強い弟だった。母が癌で倒れた時、一番心配したのは弟だった。そんな弟が、病気持ちの母を脅すなんて考えられなかつた。

「・・・絶対、あの男が・・・何かをした・・・だけど、私には・・・もう、力が無い・・・」

その時、彼女は自分の右手に触れる軟らかい物の存在に気付いた。それは、路地の隙間から生えていた雑草だった。雑草は一つの茎から何本も別れていて、先には小さな花が咲いていた。彼女はその小さな花を優しく撫でると、花は“フルフル”と揺れた。

「こんな・・・暗い路地の中でも一生懸命・・・花を咲かせている・・・固い・・・コンクリートの隙間から・・・根をきちんと絡ませている・・・」

そう呟くと、彼女は壁に寄り掛かりながら、足を震わせて立つと一步一歩、路地の奥に続く道をゆっくりと歩いて行った。

「私は・・・雑草でいい・・・どんな事にも屈しない・・・弟を・・守るために・・・私は・・・雑草になる!」

彼女が暗闇の奥に消えると同時に、小さな花を咲かせていた雑草は徐々に縮み、コンクリートの隙間に少しだけ顔を出す草に変わっていた。

【ファーギー】が歩いている場所は、空き家が多く不良達がよくこの辺りでたむろしていた。しかし、今日に限ってその不良達が全く見当たらなかつた。夕日の光がゆっくりと歩いている【ファーギー】を照らしていた。もう血は流れていなかつた。

「不思議だわ・・・今日は不良達が一人もいない。それに・・・この雰囲気・・・なんか怖いわ。」

その時、奥の道。空き家が軒々と続く一番端の家の明かりが付いていた。【ファーギー】はその家に足を運ばせた。

「こ」の家……確か十年前に……殺人事件があつた家だわ。だけど、なんで電気が付いてるのかしら。此所には、人は住んでいないのに……」

その空き家は、大きく見た限りでは【金持ちの家】だとわかるくらい、大きな家だった。家を囲む外壁は【ファーギー】の背よりも高く、庭には等間隔に木が植え付けられていて、草が無造作に生えていた。この十年間、全く手入れがされていなかつたのが、手に取るよつにわかつた。落ち葉が辺り一面に落ちていた。

「手入れもなにもされていないこの家に明かりが付いてるなんて……もしかしたら、此所に【ネーヨ】が居るのかしら……」

【ファーギー】は、一步一歩と足を前に進ませると奥にある玄関に向つた。歩く度に落ち葉を踏む音が“ガシャガシャ”と鳴るので、慎重に一步一歩進んで行つた。

「音は駄目なんだ。こんな静かで、一陣の風も吹かない……そんな場所で落ち葉を踏む音は、不自然……」

【ファーギー】は、小さく息をながら一步一歩慎重に進むと、や
り家の玄関の前に着く事が出来た。【ファーギー】は、小さくため
息を吐くと安堵の表情を見せた。

「これで・・・弟に気付かれずに会える。」

【ファーギー】は、ゆっくりと扉を開けようとのびを握ると回した。
しかし、扉はビクともしなかった。【ファーギー】は鍵が掛かって
いると思い、扉から離れると何処か入れる所を探そうと一步、落ち
葉が落ちていて草の上に足を静かに沈めた。

ジャミロクワイアの3（繪書セ）

気になる事があつますー。後書きとして報告します。

ジャミロクワイヤの巻

【ネー弔】は、リビングの隣りの部屋の床に座り込み、床についている染を指先で、なぞっていた。染は床全体に広がっていて、ドス黒い色をしていた。なぞっていた指先にはその染が粉状になり付いていた。

「・・・・」の染は何だらう・・・・血?・・・・かなあ・・・・

【ネー弔】の顔色は青白く、只、指先に付く染の粉をぼんやりと見ていた。

「俺も・・・・」うなるのかな・・・・だつたら俺は・・自分を守る。

」

おもむろに立ち上がった【ネー弔】は、フラフフラと部屋を出て行くと玄関の方に歩み寄つて行つた。そして、ベタリと膝を付くと玄関の扉に耳をあてた。

「俺を殺そと・・・・近付いて来る奴の存在がわかる・・・・・・ベルトかな・・・・そんな形の物の存在が直ぐそこから・・・・・ゆつくりと少しづつ近付いて来る・・・・後、携帯電話も・・感じじる。あれは・・・・ポケットの中かな?」

今度は、扉に付いている覗き穴から【ネー三】は外を見た。向こう側の門から一人の女性がゆっくりとこちらに近付いて来ていた。【ネー三】の言ったとおり彼女は銀色に輝く装飾を施したベルトを身に付けていた。

「なんだ・・・あの女性がこっちに来るんだ?考えられるしたら、あの女性はこの家の持ち主なのか・・・」

【ネー三】は食い入るように女性を見ていた。女性は、ゆっくりと一步一步こちらに近付いていた。顔面の左側には血のような跡が付いていた。

「・・・不自然だ・・・何故、ゆっくりと来るんだ?まるで、誰かにばれないように近付いてるような・・・誰にだ?それは、俺か・・俺を殺すために来たのか?」

そういうしてこるうちに女性は、玄関の直ぐ手前まで来ていた。もう外の風景は彼女の服装しか見えない。

「何故・・・服が汚れているんだ?あれは、血か・・・何処か怪我をしているのか?なら何故、病院に行かない・・・」

そして、女性は数秒間その場に居たが、向こうを振り向くと歩き始めた。

「・・・また来るかもしない・・もしかしたら俺を殺しに来たかもしねない。いや、そうに決つてこる・・・なら、此所で彼女を殺してやる。」

彼女は、一歩だけ足を進めたまま動かなくなつた。覗き穴から見ていた【ネーヨ】の後ろには同じような体勢で手を扉に張り付けているスタンドが現れていた。

「見えていらないだらうな・・・俺のスタンドを・・・だが、用心に越したことはない。この状況で・・・殺してやるー。」

「え・・・なんで進まないの?」

急に体が動かなくなつた。いや、違う。足も腕も動けるのにこれ以上、進む事が出来ない。まるで何かに後ろから引っ張られている感

じだ。

「ちよっと待つてよ……やがりめうつ事なの？」

何故こうなったのか全く解らない。いや、そんな事はどうでもよいのだ。【私】は此所で踏ん張らなければ行けないのだ。足を一步でも出して前に進まなければ行けない。ベルトが【私】のお腹を圧迫するのを感じる。

「ぐ……どんどん圧力が……強くなつて……うだ……電話を……」

【私はその場で踏ん張るとポケットの中から携帯電話を取り出した。そして、急いで電話番号を押すと携帯電話を耳にあてた。

「……もしもし。」

その声は【ジョナス】だった。【私は無我夢中になつて【ジョナス】に助けを求めた。【ジョナス】なら何とかしてくれと思つていた。しかし、異変が起つた。携帯電話から“ピキピキ”と音が聞こえて来たかと思うと、“バキッ”と携帯の上半分が取れて扉にくつこんだのである。勿論、携帯電話は壊れてしまった。

「そ、そんな……」

そして、足を一步前に出した時、強く引っ張られてしまい【私】は“ズルッ”と滑ってしまった。そこから何も抵抗が出来ないまま玄関の扉に思いつきりぶつかつた。それでもベルトの圧迫力は弱まる事はなく、“ミシミシ”と骨の軋む音が聞こえていた。【私】は顔を歪ませて痛みの余り奇声を叫びながらも何とかしてベルトを外そうとしたが、止め金さえも外す事ができなかつた。

「ああ・・・」、「このままだと・・・か・・・体が・・・もう・・・
駄目え・・・」

上半身と下半身が真っ二つに別れる事を想像した。辺り一面【私の】真っ赤な血で染まるだろう。もう完全に死ぬのだと思った【私は】本日一度目の走馬灯を見た。先程見た光景がそこに広がつていた。笑っている【ネー】の顔、優しく【私達】を此所まで育ててくれた母の姿。そして、先月起きた事件の思い出。あれは怖かつたが、とてもスリリングな体験をして【私】は嬉しかつた。出来ればもう一度だけあんな体験をしてみたい。

「だけど・・・もう駄目・・・私は此所で・・・死ぬ・・・

「マダ・・・アキラメテハイケナイ・・・」

何処からか声が聞こえてきた。多分それは幻聴だろう。人は死ぬ間

際に不思議な体験をすると本で見た記憶がある。それが聞こえたと
いう事は【私】はもう死ぬのが決つたのだ。

「チガウ・・ワタシハ、ゲンチョウナドデハナイ。」

「え・・・・・あなたは・・誰?」

【私】の横には【私】を見上げるようにしゃがんでいる薄緑色の肌を持つ人のような姿をした女性がいた。何故、女性だとわかつたかと言うと胸の膨らみでわかつたし、唇は普ックリしていて、赤かった。その女性は人差し指で、私の足首を撫でるようになぞつっていた。

「ワタシハ、アナタデス。ソシテ、アナタハシヌヒツヨウガナイ。」

「ど・・ゆう」と・・・それに、【私】が貴方だなんて・・

彼女の目は大きく、薄黒い線が縦に引かれている瞳はとても不思議な感じがした。

「モウキヅイテイルハズデス。サア、ハヤクヌケダシテクダサイ。」

そう言えば、【私】の体から圧迫感も痛みも感じる事はなかつた。
【私はおもむろにベルトを見た。周りにある草が通常では有り得

ない位の速さで伸び、その草は【私】のベルトの隙間から入り込み、絡まっていたのだ。どんどん絡まる草の葉がクツシヨンのよう【元】を守ってくれていたのだ。

「ハヤクヌケダシテクダサ。ハヤクシナイトキヅイテシマライマス。

「や、そつと言われてもこんな隙間じゃ抜けられないわ！」

「ソウデスカ。ナラ、コウシマシ。」

突然“ブチッ、ブチッ”と切れる音がして【私】は草が切れる音だと思い周りを見た。しかし、草は切れるどころかどんどん私の方に伸びて来たのだ。そして“バチン！”と大きな音とともに急に【私の体が楽になつた。

「」、「これは・・・」

「サア、コレデアナタハジユウ一ナッタ。」

先程のベルトは扉にめり込むようにくつついでいて、端はノゴギリのような物で切られたような跡を残していた。

「よし・・・少して」ぱつたが完璧だ。」

【ネー三】はまたフラフラと廊下を歩いて行つたが、ピタリと止り、振り向いて玄関を見つめた。

「・・・・・一様・・確かめてみるか・・」

【ネー三】は、またフラフラと歩いて玄関扉に近付くと、覗き穴から外を見た。そして、何かに気付いたのか慌てて扉を開いた。そこに広がるのは【ネー三】の胸辺りまで伸びた雑草が微風で“サワサワ”と波打っている風景だった。そして、玄関付近には携帯の上半分と、切られているベルトだけだった。

「まさか・・・死んでいないのか・・しかし、感じる。」

【ネー三】は、雑草の中に飛び込むと田を閉じて深呼吸をした。

「・・・何処かに隠れている・・・なら、危険だが、俺の手で倒してやる・・・自分を守るために・・・」

そう呟いた【ネーヨ】は、ゆっくりと胸の辺りまで伸びた雑草の中を慎重に進んで行った。太陽は地平線から少しだけ顔を出す程度で、辺りは暗く、部屋からの光だけが【ネーヨ】を照らしていた。しかし、木の上に隠れている【ファーギー】に【ネーヨ】は気付くはずがなかった。【ファーギー】は木の上から悲しそうな表情をして【ネーヨ】を見ていた。

ジャミロクワイの巻（後書き）

小説を読んでいただき有り難うございます。

さて、気になる事とはこの小説の主人【ジョナス】のスタンダード名です。自分は原作と同じようにスタンダード名は洋楽からとっていますが、【ジョナス】のスタンダード【キング・ダイヤモンド】と言う名前が本当にあるのか心配なのです。自分はBOOK・OFFやTSUTAYAや中古ショップから探したり、携帯サイトから探したりしていますが、何処を探しても【キング・ダイヤモンド】と言う名前がなかつたのです。もしかしたら、見間違えたかも知れません。

そこで、この後書きを見ててくれている人にお聞きしたいのですが、【キング・ダイヤモンド】と言う洋楽があるかどうか教えて下さい。嘘を付いていると思うと気が気でないのです！もし間違っていたら主人公のスタンダード名を変えたいと思います。

そして、どんな結果でもよいので教えてくれた人は【貴方が考えたスタンダード名と能力】をこの小説に出したいと思います。勿論、スタンダード名は洋楽からお願いします。

余談ですが、この小説に登場するスタンダード名は現在28個あります。多過ぎですね。構造上、仕方がない事なので皆さんこれからもよろしくお願ひします。

それと、クローバ様。評価有り難うございます。こんな素人の作品に評価して下さいまして、大変嬉しいです！これからも頑張って行きたいので宜しくお願ひします。

ジャミロクワイヤの4

「おー、本当にこの辺にいたのか？」

「ええ、この辺で【ファーギー】の残り香が点々と残っています。」

俺達は商店街の奥に広がる迷路のように入り組んでいる路地を走っていた。【バステット】は“クンクン”と鼻を動かして【ファーギー】の残り香を嗅いで、【ファーギー】が何処を通ったのかがわかるので【俺】は走る【バステット】の後ろを付いて行つた。【バステット】がいなかつたら【俺】がこの路地で迷つていただろう。外は薄暗く、路地にいるのは俺達くらいだった。

「暗いな・・・早く【ファーギー】を見つけないとやばい事になるぞ。」

「・・・もう遅いかも知れません。」

「何？」

突然、【バステット】がスピードを上げた。突然の事だったので【俺】は遅れて走つた。薄暗くしかも迷路のように入り組んでいるこの路地で【バステット】を見失うのは、ものすごく困るのだ。【俺】

は今まで何処を通つて来たのか覚えていないのだ。

「へそ・・・何なんだよーいつたい・・・スピード上げやがつてー。」

【俺】の田の前で“グングン”とスピードを増してゆく【バステット】が急に右側の路地に曲がった。数秒遅れて【俺】も曲がると【バステット】はしゃがんでいた。そして、地べたを指でなぞり、その指を嗅いでいた。【俺】は“ハアハア”と息を切らせながら【バステット】に近付いた。

「どうした・・・何か・・・あるのか?」

「見て下さー・・・」れば血ですよ。」

近付いてわかった。【バステット】の周りに血が地べたに“ベッタリ”と付いていたのだ。

「この匂い・・・【ファーギー】の匂いですよ。」

「まじか・・・ならもう【ファーギー】は・・・」

「いえ・・・死んではいません。奥の方から【ファーギー】の残り香

がします。」

ホツとした。【ファーギー】は死んではいなかつたのだ。しかし、一体【ファーギー】に何があつたのだろう。それに、怪我をしているのに何故路地の奥を進んで行つたのだろう。その時、【バステット】は何かに気付いたのか【俺】の方を向いた。

「この場に・・・【ファーギー】の他に一人の人間がいました。」

「なら、その二人が【ファーギー】を襲つたのか？」

「多分・・・しかし・・・」

「なんだ？」

「・・・一人は違う匂いでした。しかし、もう一人の方からは【ファーギー】と何処か似ていてる匂いがしたのです。有り得ません・・・人の匂い・・・体臭は一人一人違うのに・・・似ているとなると・・・」

「家族・・・か？」

「ええ、それしかない。」

「一体、【ファーギー】の家で何が起きていたのか【俺】はわからないし、知りたくもなかつた。しかし、【俺】にとって【ファーギー】は【知人】以上の存在に近いかもしない。つまり【親友】だ。その【親友】が危険な事に巻き込まれているのだ。助けに行かない訳がなかつた。

「勿論……助けてますよね？」

「ああ、決っているだろう……だが、余りスピードは出すなよ？
お前と違つて、【俺】は人間なんだ。」

「ええ、わかりました。【ご主人】」

地べたの隅に、手のような跡が刻まれていた。先が鋭く尖つていてその跡は常人では付ける事ができないほどえぐられていた。ちらりとその跡に目を向けたが、【俺】は【バステット】を見失わないよう【バステット】の後ろ姿をジッと見つめた。もう頭の中にはその跡がどうでもいい存在になつていた。

「・・風が・・吹いてきた。」

路地の向こう側から、一陣の強い風が吹いてきて【俺】の体を後ろから押した。

「これから・・・どうしようと囁ひの?木の上に登つたのは鹿いねだ
・・何も・・何も出来ないわ・・・」

「ソンナ事ハ、ナイデスヨ【ファーギー】・・・」

また何処からか声が聞えた。【私】は木の上からその声の主を探したが暗闇の中、見つける事が出来なかつた。しかし、その声の主は突然【私】の背後から手を回し、抱き締めると顔を耳元に近付けていた。

「【ファーギー】・・・モウソノ質問ハシナイデ下サイ・・私ハイツモ貴方ノ側ニイマス・・・・私ハ貴方デスカラ。」

「それは・・・わかつたわ。でも、これからどうすればいいの?こんな場所じや・・身動き出来ないわ!」

【ネー三】は、【私】のいる所とは逆の方にいた。しかし、一旦でわかるくらい様子が変だつた。怯えるように、しかし、何処か邪悪な雰囲気を醸し出しながら“フランフラン”と歩いていた。もし、見つかつたら今度こそ【私】は死ぬかもしれない。

「【ファーギー】・・ソンナニ怯エナクテモ大丈夫ブデス。」

「何が・・大丈夫なの？」

また、違う所から声が聞えた。その声は、【私】の上から聞こえたので、【私】は上を見た。いつの間にか、彼女は【私】より高い木の枝に立っていた。

「木ノ上ニイルカラ、アノ明カリハトドカナイカラ見ツカル事ハナイ・・・ソレニ此所カラナラ、現状ガワカル。」

「でも・・・それでも身動き出来ない事には変わりないわ。」

【私】はもう一度、彼女がいる方を見上げると、そこには彼女はいなくなつていた。【私】はまた“キヨロキヨロ”と周りを探すと彼女は既に【私】の隣りでしゃがみながら【私】の茶髪の髪を触つていた。

「貴方ヲ助ケタ私ノ能力は・・・遠クカラテモ使エマス。サア、【ファーギー】・・・私ニ命令ヲシテ下サイ。」

「ど、どんな・・・能力なの?」

「・・・・生物ノ成長促進・・適度ナ温度ガアレバ植物ヲ生ヤス事ガ出来マス・・・・サア、早ク命令ヲ・・」

早い話、彼女は【ネーム】を【倒す】と言う答えを実行したがつていた。そして、【倒す】と言う行動をするには、【私】の命令が無ければ出来ないらしい。

【私は一つだけ、わかつた事がある。】【私はもしかしたら選ばれたのかもしない。】それに【ネーム】の背後にいるあの覆面を付けた人。同じく【ジョナス】の背後に透き通るようにしていたあの男。もしかしたら、二人とも【選ばれた】人間なのかもしない。

【私はこの能力を【神の啓示】として、受け止めよう。もうそう決めたのだ。】【ネーム】を助けるために、【私はどんな事にも耐えよう。】

「・・・それじゃ・・・【ネーム】の動きを止めて!」

その瞬間、風も吹かない中、彼女の能力で成長した雑草が“ザワザワ”と揺れ始めた。そして雑草が【ネーム】に向つて伸びて行った。【ネーム】は既にその異常に気付いて、後ろの人間が雑草を払つていった。払う度、雑草が切られてゆくが、雑草は無限に伸びていき、

【ネー三】の動きを止める事に成功した。【私】は【私】の能力に驚きながらも、彼女にある事を聞いてみた。

「そう言えば、【私】は貴方を何て呼べばいいの？」

彼女は【私】を覗くようにして見ていた。しかし、未だに【私】の髪を撫でていた。

「…………【マテリアル・ガール】……ソレガ私ノ名前デス。

」

「そり…………所で何故、【私】の髪を触るの？」

「私ハコノ髪型ガ好キデスカラ……氣ニシナイデ下サイ。サア、次ノ命令ヲ下サイ。」

【私】は彼女【マテリアル・ガール】に【ネーヨ】ができる限り、【死なせす】に【気絶】を目的とした命令をした。すると、彼女は木から降りると【ネー三】に近付いて行つた。

マテリアル・ガールその1（前書き）

後書きにて説明があります！

マテリアル・ガールその1

彼女【マテリアル・ガール】は、ゆっくりと【ネーヨ】に近付いて行つた。【マテリアル・ガール】の胸元まで伸びていた雑草は【ネーヨ】の体をぐるぐる巻きにして捕らえていた。【ネーヨ】の後ろにいる覆面男、多分【私】と同じような【能力者】も一步も動けずにいた。

「奇妙だと思った・・・何故、こんなに雑草が伸びているのか・・・刃物も持っていないのにベルトが切れていたのか・・・」

自分のおかれている状況を知らないのか【ネーヨ】は近付いて来る【マテリアル・ガール】に問うようにして話しかけていた。部屋の明かりで照らされている【ネーヨ】は青白く“ギラギラ”した瞳を【マテリアル・ガール】に向けていた。

「答へは・・・この雑草・・・草で手を切るように雑草を束にすれば皮のベルトだって切れるのか・・・」

「・・・言イタイ事ハソレダケカシラ?」

既に一人の距離は一メートルもなかつた。そして、一步足を踏み出した【マテリアル・ガール】は腕を振り上げると力一杯握り締めた拳を【ネーヨ】に向けて放つた。その拳はどんどん【ネーヨ】の顔

面に近付いて行つた。

「・・・」

その時、【私】はある異常に気付き、口を押えた。その異常はどんどん大きくなり、一つの痛みに変わっていた。

「・・・君の能力を俺は半分しか知らない。多分、【植物操る能
力】だろ・・・」

【マテリアル・ガール】の拳は、【ネーロ】の顔面から数センチの所で止まっていた。そして、その拳は垂れ下がり【マテリアル・ガ
ール】は【私】と同じように口を押えた。

「・・何ヲ・・・シタ・・私ハオ前一・・触レテイナイノニ・・・

「俺も・・まだ半分しか能力を見せてはいなかつたのだよ!」

【私】の中、数週間前に歯医者に行き【銀歯】を取り付けた辺りからもの凄い痛みが走ると今度は、頬から何かが飛び出した。頬からは血が出て、舌で【銀歯】を探すとそこには【銀歯】はなかつた。鉄のような味の血が口の中に充满していた。

「歯を・・いや【銀歯】だけを根こそぎ持つて行かれた・・・・・【

【ネー三】の能力に距離は関係ないの?」

拳を引っ込めた【マテリアル・ガール】は【ネー三】を睨み付けていた。頬には【私】と同じような傷跡が付いていた。

「飛んで来た方向で場所はわかつた……わかつただろ?俺の能力に・・距離は関係ないんだ。」

雑草の隙間から見える【ネー三】の体には、先程の【銀歯】がくつついていた。

「そして、能力を解除すると・・・この【銀歯】は【物凄い早さ】で俺から離れて行くんだ・・・」

「ソレガ・・ドウシタ? 私ガ・・オ前ヲ倒ス事ニハ変リナイ!」

【マテリアル・ガール】はまた拳を振り上げ、【ネー三】を殴りうとした。しかし、直ぐにその拳は止った。

「・・・もし、この【銀歯】が木の上にいる彼女の口を貫いたら・・・しかもそこが致命傷だったら・・・・」

「・・・何が言いたい。」

「・・・能力を解除すれば・・俺の意識とは無関係に】の【銀歯】は弾丸のような早さで戻るんだ。もし大きな物なら・・・重さの関係で早くはないが、この【銀歯】は弾丸より小さい・・・そして、それはもう【実行】している。」

「・・・マサカ！」

【ネー三】の体にくつついていた【銀歯】はいつの間に無くなっていた。【マテリアル・ガール】は【ネー三】が何をしたのか気付くと、【ファーギー】のいる木の上を振り向いた。“ガキン”と聞えたのと同時に【ファーギー】は後ろにだけ反り、枝から落ちていった。

「【ファーギー】…」

【マテリアル・ガール】は急いで、落ちてゆく【ファーギー】に手を向けた。すると、【ネー三】を絡ませていた雑草を含めた、全ての雑草が【ファーギー】の落ちる地点にどんどん集まり、絡まりながら、一つの大きな草のクッシュョンの姿に変わった。“ドサリ”と音を発して、【ファーギー】はクッシュョンの上に落ちた。

「ピクリとも・・・動かないな・・・それに俺に絡まっていた雑

草も無くなつた。」

【ネー三】はゆっくりと静に【マテリアル・ガール】に近付いていた。後ろにいる覆面男【ジャミロクワイ】は拳をキツく固めていた。

「・・大丈夫。直ぐに終わるから・・・」

【ジャミロクワイ】は固めていた拳を手刀のように細くすると高々と上げた。そして、いきよいよく【マテリアル・ガール】の後頭部に向けて振り落とした。しかし、その手刀を【マテリアル・ガール】は受け止めた。驚いた【ネー三】はもう片方の拳を【マテリアル・ガール】に向けた。しかし、その拳さえも当たる事はなかつた。【ジャミロクワイ】より速く、【マテリアル・ガール】の拳が【ネー三】の顔面を捕らえた。【ネー三】の顔面が“グシャ”と歪むのと同時に【ジャミロクワイ】の顔面も歪み、拳が空振ると同時に【ネー三】共々、後ろに吹き飛んでいった。

「才前ハ、2コダケワカツテナイコトガアル。」

【マテリアル・ガール】の後ろから“ガサガサ”と音を発てて、何かが近付いていた。

「1ツ目ハ、【ルール】ト言ウベキ理由・・・モシ【ファーギー】ガ死ンダラ私モ煙ノヨウニ消エテ無クナル・・・シカシ、私ハ消エ

テイナイ。」

【マテリアル・ガール】の背後から茶髪の髪を伸した女性が口から大量の【葉っぱ】を吐きながら近付いて来た。血も口から流れていった。

「ソシテ、ツツ目ハ……才前ガ今感ジテイルダロ?」

大量に伸びている雑草の中から【ネーヨ】が“ゲホゲホ”と咳き込みながら立ち上がった。まるで【老人】のようだ。ヨタヨタとこちらに近付いて来る【ネーヨ】の体からは小さいが、赤い花を咲かせた植物が生えていた。

「まさか……生きていたとは……しかも体が重い……それに何故、俺の体から花が咲いてるんだ?」

「私は……【ネーヨ】の能力を半分しか知らないけど……貴方も私の能力を半分しか知らない……言つとくけど、花を抜いたりしないでね。抜いてもまた生えて来るし、その栄養は【ネーヨ】の血液から摂取しているの……手加減はしているけどね……」

【ネーヨ】は、花をむしり取ろうとしたが止めた。そして、膝に手を置き、一呼吸おくと【マテリアル・ガール】の後ろにいる【ファーギー】を睨んだ。

「どうやって・・・銀歯の弾丸を回避したのかは知らないが・・・俺はあきらめてはいられない・・・確か【向こう側】には作り掛けの建物があつたよなあ・・・」

すると、【ファーギー】の背後から“メキメキ”と軋む音が聞えたかと思うと、“バゴオバゴオ”と崩れる音が聞えた。【ネーヴ】は膝を着き、崩れていた。

「【ファーギー】・・・何カガコチラー近付イテ来ルワ！」

「わかつてゐるわ！」

【ファーギー】の横で、【マテリアル・ガール】は拳を前に出し構えた。

マテリアル・ガールその1（後書き）

いつも小説を呼んでくれまして有り難うござります。

さて、此所では【どうやって銀歯の弾丸を回避したのか】を説明したいと思つます。

まず、【ファーギー】は木に生えている葉っぱを口の中に大量に含みます。葉っぱをクツショーン変わりにしようとしたようですね。しかし、いざ【銀歯の弾丸】が口の中に入ると、想像以上の力で葉っぱを貫通していきます。それに気が付いた【ファーギー】は舌で押さえようとしました。しかし、その舌も貫通してしまって【ファーギー】はとつさに後ろにのけ反りました。この間の時間が【1秒】です。凄いですね。普通の人間なら無理でしょうが、そこは突っ突かないで下さい。未熟なもので・・・

しかし、それがよかつたのです。【銀歯の弾丸】は元の場所に【まっすぐ】跳んできたのです。体をのけ反つたので、【銀歯の弾丸】の進行方向が変わり、【銀歯の弾丸】は口から出て行きます。これが、【銀歯の弾丸を回避した理由】です。解りづらこと思うので、図にしたいと思います。○ = 【銀歯の弾丸】 = 進行方向
= 口の中 = 壁

○ 【のけ反る】 ○ ○

解りづらいですね。すみませんでした。しかし、感覚だけでも理解してくれれば幸いです。

それでは、此所まで呼んで下さった読者の皆様、本当に有り難うござります！

マテリアル・ガールその2

“バゴオバゴオ”と何かが崩れる音と共に一陣の強風が吹いた。“サワサワ”となびく雑草の奥から“ゴロゴロ”と転がる音が聞えた。【ファーギー】と【マテリアル・ガール】はその音の方向を凝視していた。すると、その【何か】が部屋の明かりで徐々に姿を表した。

「あれは・・・壁の破片・・・中の鉄骨を【ネーミ】が引き寄せたのかしら?」

「・・・カモ知レマセンネ・・・シカシ、触ル必要ガ無イ物二ハ・・・出来ルダケ触サワラナイデ下サイ・・・」

【マテリアル・ガール】の助言どうり、転がつて来る破片を【ファーギー】は片足を上げて破片を避けて、“ゴオーゴオー”と吹いている風の方向を見た。その時、“ビュ”と風切り声が耳元で聞えたあと、耳から熱いものを感じた。

「・・・【ファーギー】・・・離レナイト行ケナイ・・・アイツカラ離レナイト・・・」

【マテリアル・ガール】の耳に小さいながらも凄まじい数の【穴】が開いていた。そして腕や太股、脇腹、胸の上辺りにも同じような【穴】が開いていた。

「ど・・じへ・・・・」

「早ク離レテ！アイツノ正面一立ツテハイケナイ！」

【ファーギー】と【マテリアル・ガール】があ互い【ネーヨ】の正面から離れようとした。その直後“シユババ”と血が吹き出る音と共に【ファーギー】はその場に倒れた。【ファーギー】の体にも【マテリアル・ガール】と同じ傷跡が出来ていた。

「【ファーギー】！」

【マテリアル・ガール】が【ファーギー】に手を伸した瞬間、【マテリアル・ガール】の伸した腕に“ザシユザシユ”と何かが刺さつた。

「シマツタ！・・・コレデハ迂闊一【ファーギー】一近付ケナイ・・・
【ファーギー】！何カ・・・何カ命令ヲ！」
「なら・・・しゃがみなさい・・・出来るだけ低く・・・【しゃが
みなさい】」

「エ・・・・」

呻き声を発しながら、【ファーギー】は【マテリアル・ガール】に命令をした。素早く【マテリアル・ガール】はしゃがむと、頭上を針やら釘やらがかすめていった。

「これで安心でしょ・・・私達が立っていた場所よりも・・・【ネー^二ヨ】のいる場所の方が・・・【高い】・・・あそこだけ、土が盛り上がっている・・・【ネー^二ヨ】を中心として飛んで来るから・・・」

「【ファーギー】・・・貴方ハトテモ賢イ人間ノヨウダ・・・尊敬ニ値スル・・・」

「それよりも・・・早く【ネー^二ヨ】を止めないと・・・」

【ネー^二ヨ】はグッタリとその場に膝を付いていた。体には無数の金属がくっついていて、露出していた手や顔にはびっしりと針と釘がくっついていた。

「俺は・・・諦めない・・・俺は・・・諦めない・・・俺・・・」

呼吸は弱々しかった。しかし、【ネー^二ヨ】はどんどん釘や針を何処か遠くの方から引き寄せて体にくっつけていた。

「ドウスレバ・・・アイツヲ倒セマスカ・・・アレデハ、近付ケバ格好ノ的です。」

【マテリアル・ガール】の言つとおり、【ネー^三】は無差別に鉄を引き寄せていた。【ファーギー】はジッと【ネー^三】を見つめていた。

「【ネー^三】・・・どうして私を殺そうとするの・・・私は貴方に何もしてやれなかつたけど、貴方に殺される・・・理由何てないのよ！だから・・・もう止めて！」

【ファーギー】の言葉が辺りに響くと突然【ネー^三】は【鉄を引き寄せる】のを止めた。そして、顔だつた所から鉄製の物体が吹き飛んでいった。

「俺には・・・守る物があるんだ・・・それを守るために・・・俺は戦わなくちゃいけない・・・」

口と両手を覗かしていた【ネー^三】は【ファーギー】を睨み付けていた。

「何を・・・守るの？」

「俺の・・・母親は・・・病気なんだ・・・治すのには莫大な金が必要だ・・・だから俺は・・・【の人】を守るんだ！」

【ネー三】の体にくつついていた鉄製の物体が一気に放たれた。放たれた物体は【ファーギー】と【マテリアル・ガール】の頭上を通過して行き、凄まじい風切り声を発して行った。【ファーギー】と【マテリアル・ガール】を威嚇するようなその【行動】は【ネー三】の絶対的な【自信】のようだった。しかし、【ファーギー】はゆっくりと立ち上ると【ネー三】を見つめた。

「【ネー三】！貴方が、そんなにも優しい弟だつたなんて【私】はとても嬉しいわ！でも、なんであんな怪しい男に付いて行くの…」

【ネー三】は、弱った体を無理矢理起こすと“ギラギラ”した目を【ファーギー】に向け、人差し指を【ファーギー】の心臓の辺りに重ねた。

「こ】【仕事】が終われば・・・金が手に入るんだ・・・だから【姉ちゃん】！邪魔をするなら幾らあんたでも・・・・・・容赦しない！」

「【ファーギー】！立チ上ガツテハ駄目ダ！」

「もう遅い！もう既に・・・【鋭い鉄】は【姉ちゃん】の心臓に向けて！」

【ネー三】の体から離れて行つた鉄製の物体は急に進行方向を変えると、【ファーギー】の心臓目掛けて飛んできた。そして数秒もしないうちに“シユババ”と【風を切る音】が聞えたと思うと“ドス

ドス”と【ファーギー】の体に【当たった】。

「……何故だ……何故【貫かない】…………お前また何かやつたのか！」

【ネーム】は驚きそして、【マテリアル・ガール】を見た。しかし、【マテリアル・ガール】も【何か】を見ていて、驚いていた。【ファーギー】はその【何か】を既に【わかつて】いた。

「間に合つたのね……」

【ファーギー】の後方、“ザワザワ”と揺れる雑草の中から、二人の男が姿を現した。一人は薄青い髪をなびかせている長身の男と、もう一人は金髪のウルフカットで【両手】から【血】を流している男だった。

「まさか【スタンド使い】だつたとは……」れもまた【運命】ですかね？【ご主人】。」

「どうでもいいが……大丈夫か……て、大丈夫じゃないな……」

「……貴方達ガヤツタノデスカ？」

【フヤーギー】の体に当たつたのは【鉄】ではなく【弾力性】のある色とりどりの【ボール】だった。【ジョナス】は両手を何度も握り締めると【ネーハ】を睨み付けながら、近付いて行つた。

「何者なんだお前らは！・・・お前らが、邪魔をしたのか！」

「正確に言えば【俺】が飛んできた【鉄】を【一生懸命】に【触れて】【ボール】に変えたんだ！あんな【バカ犬】と一緒にするな！・・・全く・・・てめえのせいでなんで【俺】が痛い思いをしなきやなんねえんだよ！しかもなんで【お前ら一人】が・・・

“ベラベラ”と喋っていた【ジョナス】が急に静になつた。【フヤーギー】と【バステット】は疑問に思つたが、直ぐに【ジョナス】は【ゆつくり】と、しかし何処か【殺意】が込められているような感じで【ネーハ】に言つた。

「離れる・・・」

「はあ？」

「いいから離れるー！」

【ネー弐】は【ジョナス】が何を行っているのかまるで理解出来なかつた。しかし、【ネー弐】は【ジョナス】を敵と見做した。

「・・・能力が効かないなら・・・」

【ネー弐】のスタンンド【ジャミロクワイ】の拳が【ジョナス】に放たれた。“バゴォ！”と殴られた音と共に【ネー弐】が倒れた。

「は・・・早い・・・」

「もう一度言つ。その場から・・・その【土】から離れる！」

「黙れ・・・」の下衆野郎

【ネー弐】の言葉は最後まで響かなかつた。【ジョナス】のスタンド【キング・ダイアモンド】の拳が何度も【ネー弐】の体全身を殴りに殴り、最後の一発を顔面に受けた【ネー弐】は後ろに吹き飛び“ドサリ”と音を発して倒れた。

「【マテリアル・ガール】！」

「ワカツティマシタヨー【ファーギー】。」

【マテリアル・ガール】は能力を解除すると、周りに生えていた雑草がどんどん縮んでいき、雑草に隠れていた【ネーヨ】がグツタリと倒れている姿を現した。【ファーギー】は駆け寄り、【ネーヨ】を抱き抱えると名前を呼び掛けていた。

「どうしたのですか？【ご主人】」

“ハアハア”と息を切らせながら、【ジョナス】は盛り上がりつくる【土】を見ていた。

「この家は・・俺が以前・・・住んでいた家なんだ。」

「え？・・・そなんですか？」

「ああ・・・そして、この【中に眠っている】のは・・・」

「ヤツト・・・見ツケタ。」

【ジョナス】と【バステット】が突然、聞えてきた声に気付き振り返った。

「コレデ・・・【開けられる】・・・・」

そこには【悪魔】のような、しかし【天使】のような姿をした【人型】が地面から【鍵】のような形をした物体を拾っている姿だった。

スタンダード紹介

スタンダード名・ジャミロクワイ

スタンダード本体・マリアン・ネーヨ

パラメーター

破壊力：A

スピード：A

精密動作性：B

射程距離：D（B）

成長性：E

能力

鉄製の物体を引き寄せる事が出来る。また、能力を解除すると引き寄せられた物体は一直線に凄いスピードで元の場所に戻る。しかし、ある程度の【形】と【大きさ】がないと引き寄せられないし、【重い物】だとスピードも遅くなる。

スタンダード名・マテリアル・ガール

スタンド本体・マリアン・ファーギー

パラメーター

破壊力：C（A）

スピード：C

精密動作性：C

射程距離：B

成長性：A

能力

生物の成長を促進させて（殆どの場合、植物に限る）自由自在に操る事が出来る。また、ある程度の温度があればその場から植物を生み出す事が出来る。この場合、スタンドの拳に付いている植物の種から生み出されるので、どんな固い所でも、植物を生やす事が出来る。

此所では、スタンドのタイプについて説明をしたいと思います。

【ジョナス】と【ネーヨ】のようなスタンドは【近距離パワー型】と言いまして、狭い範囲しか動けませんが、パワーとラッシュスピード、精密動作が高いスタンドタイプです。

【ネーヨ】の場合、射程距離がEですが、スタンド能力を使う事によりBになる事が出来ます。

【ファーギー】のようなスタンドは【遠隔操作型】と言いまして、パワーとラッシュ速度は低いですが、射程距離が高いスタンドです。また、本体の近くにスタンドがいる場合、パワーが上がります。

【バステット】のようなスタンドは【一体化タイプ】と言いまして、スタンドと本体が一体化してしまったタイプです。

マテリアル・ガールその3

“「オーフォー」と風の吹く中、【天使】のよつな、【悪魔】のような姿をした【そいつ】は拾った【鍵】をまじまじと見ていた。鋭い歯をむき出しにし、つり上がっている目が“ギラギラ”と輝いていた。

「お前は何者だ！」

【ご主人】が【そいつ】を睨み付けてた。しかし、【そいつ】は【ご主人】の言葉を無視するかのように“ブツブツ”と呟いていた。

「てめえ・・聞いてんのか！」

「駄目だ【ご主人】！近付いては行けない！」

【私は】【ご主人】を呼び止めようとした。【犬の勘】と言えば解りやすいだろうか。【そいつ】の雰囲気はただならぬ【殺氣】のよくな【感情】を放っていたのだ。しかし、【ご主人】は【そいつ】に近付くと【ご主人】のスタンド【キング・ダイアモンド】の拳が【そいつ】の横顔に放たれた。すると、【そいつ】は顔だけをクルリと回すと【キング・ダイアモンド】の拳を避け、その拳をまじまじと見ると、優しく触れた。

「マルデ 彫刻ノヨウニ 美シイ形ヲシタ 腕ダナ・・・シカシ

勿体ナイ コンナー=美シイノー 【スタンド使イ】 ガ 未熟デハ・
・

冷静に考えれば、それは軽い【挑発】だつた。しかし、【ご主人】はその【挑発】に乗つてしまつた。

「てめえ・・何言つてんのかさつぱりわからんねえんだよ！」

避けられた拳を引くと、今度は無差別に連打した。一つ一つの拳が風切り声を発して、【そいつ】に迫つていつた。

「…」

「何いい！」

拳が当たる直前、【そいつ】は消えた。拳は空を切り裂き、何もない空間に泳がせていた。

「未熟ダ・・効率ヨク能力ヲ使ワズ 只 殴ルダケ・・・・」

“ドスッ”と音と共に【そいつ】は一瞬にして【ご主人】の横に現われた。そして、【そいつ】の拳が【ご主人】の腹にめり込んでい

た。

「【ヘブン アンド ヘル】……年季ガ違ウノダヨ 年季ガア・
・・」

そして、【「主人】はまえのめりに倒れた。それでも【私】は加戦
しようとはしなかった。【ご主人】の所に行けば絶対【そいつ】に
やられる。勝てる見込みが全くない。そんな予感がしたのだ。【そ
いつ】は悶え苦しんでいる【ご主人】を踏み付けると【私】を“ギ
ラギラ”した目で睨み付けた。

「君ノ判断ハ正シイ 勝テル見込ミガナケレバ 戰ワナイ・・・
ソレハ 負ケ犬デモ 何テモナイ。」

【私は】一歩も動けなかつた。足が震え、意識が吹っ飛びそうな感
覚に陥りそうになつた。そして【そいつ】は向きを変えて、今度は
【ファーギー】がいる方に歩み寄つていた。【ファーギー】も【そ
いつ】に気付いたのか、指先を向けて何かを言つていた。さつきよ
りも強く風が吹き初めていて【ファーギー】がなんと言つて居るの
かわからなかつた。

「【ファーギー】一戦つちや駄目だ！【そいつ】は危険すぎぬー！」

【私は】強風に耐えながら【ファーギー】に逃げるよう促したが、
それすら“「オーフォー”と吹く風で書き消されてしまった。する

と、【ファーギー】は血跡の【スタンダ】で【そいつ】を殴りつけた。

「駄目だ【ファーギー】。攻撃しちゃ……」

【私】の予想通り【そいつ】はまた拳が当たる直前で消えた。

「逃げるんだ！【ファーギー】。」

その時、さっきまで“「オーフォー””と吹いていた風が止んだ。それと同時に“ピキッ”と何かが軋む音が【私】の真上から聞えた。

「へや！何処に行つたのよ……」

「【ファーギー】。屋根の上だ！」

「え……」

【私】が真上にある屋根を見ると【そいつ】は屋根に取り付けられてこる梯子を掴んで「ひりを“ギラギラ”した田で睨んでいた。

「天氣予報テハ 嵐ノハズナノニ・・・・・ 全ク 君達ハ 運ガ

「イイ・・・」

【そいつ】は梯子から降りると、両方の指先を【私】と【ファーギー】に向かた。

「シカシ 強運ハ 続カナイ！」

【そいつ】の言つたとおり、また風が吹き始めた。

「なら、掴まえてやる！【マテリアル・ガール】！」

【ファーギー】の後ろにいたスタンド。確か【マテリアル・ガール】と言つ名の女性のような姿をした【スタンド】が地面を殴つた。すると地面に沢山生えている雑草が伸びて絡まりながら、15本程の太い草の縄に変わつた。そして、15本の縄が【そいつ】に向つて伸びていつた。

「！」の攻撃を避けれらなら避けてみる！』

草の縄は驚く程のスピードで【そいつ】の手足に向けて伸びていつた。

「ダカラ！ 無駄ダト言ツテイルノダヨ！」

しかし、あともう少しある所で、また【そいつ】が消えた。草の繩はそのままのスピードで壁に激突した。そして、現われた所は先程の非常用梯子の隣りの屋根だった。

「無駄！無駄！ 全テガ無駄！ 無駄ナノダヨ！」

【そいつ】は勝ち誇ったように【ファーギー】に指を向けた。

「そうね。貴方にとって無駄かもしれない・・・だけど、私にとってこの行動は無駄ではなかつたみたい。」

「ナニ？」

その時、【そいつ】の右足が一瞬のうちに傷だらけになつた。そして、その横にあつた硝子の影から小さな叫び声が聞えた。

「貴様！ 何ヲヤツタ！」

「わからないの？ だつたら、足元を見てござらん・・・本体の方だけどね。」

「ナ！ ノ、コレハ！」

その瞬間【そいつ】は消えて、叫び声が聞えた部屋から“バタバタ”と走る音が聞えた。

「私は貴方の能力を知らない。だけど、貴方も私の能力を【二分の一】しか知らない・・・私は植物を【自由自在】に操る事も出来る。」

草の縄は壁に【突き刺さつた】まま、どんどん伸びていた。そして、それが合図かのように風がまた強く吹き始めた。

マテリアル・ガールその4（前書き）

後書きにて雑談あり。

マテリアル・ガールその4

男は右足から滴る血を見ていた。窓から見える月の明かりで血は怪しく輝いていたが、直ぐに月は雲の中に隠れてしまった。

「危なかつた。遅れいたら、右足が無くなつていただろう。」

男が出て行つた部屋の中には、大きく崩れた穴が開き、そこから大量の草がなだれ込んでいた。男のいた場所は既に草で覆われていた。

「・・・見くびつていた。発現して間もないのに、自分の能力を理解している。」

男はさつき出て行つた部屋の中を扉越しから覗いていた。

「“うねうね”と・・・何かを探しているように動いている・・・・それは俺か？俺を探しているのか？」

その時、“うねうね”と動いていた草は一斉に男が隠れている扉に物凄いスピードで襲つて來た。男は体を一回転させて反対側の廊下に転がるようにして避けるのと同時に“ズドォン！”と鈍い音と共にさつきまでいた所が草によつて塞がれた。

「見えた！一瞬だけだが、向こう側に・・・彼女のスタンドがい

た！【ヘブンアンドヘル】！

男の後ろから【天使】と【悪魔】が合体したようなスタンド【ヘブンアンドヘル】が現われた。

「あのスタンドから見ていたから俺の居場所がわかつたのだな・・・
・だが所詮、俺の敵ではない！」

男はジャケットの裏ポケットから銀色の小さなボトルを取り出した。
そして、キャップを外すと中身の液体を少しだけ草の壁に付けた。

「ウォッカのアルコール度数を舐めるなよ・・・」

もう片方の手には火の付いたライターを持ち、男はそのライターで
液体が付いた草を炙った。すると、いきよいよくその草は燃え始め、
他に付着していた草にどんどん引火して行つた。

「かなり危険な掛けだが・・・」うでもしないと、こっちが危ない。

【ヘブンアンドヘル】！草を断切れ！」

【ヘブンアンドヘル】は、燃え出した草にたいして、手を広げ、水平に引くと切るように何度も殴つた。すると、草の壁が“パラパラ”と燃えながら崩れていつた。

「何をしようかと無駄なのだよ。」

草の壁の向こう側には、【マテリアル・ガール】がしゃがんでいた。

「ククク・・・諦めたか?まあ、此所までやるとは思えなかつたが。
・・・・」

すると、【マテリアル・ガール】はゆっくりと男の方に顔を向けた。
その手には、【鍵】を握っていた。

「コレハ 貴方ガ落トシタ 鍵テスカ?」

「そ、それは!」

男は急いでジュケットのポケットに手を突っ込み鍵を探した。

「幾ラ曲ゲテモ 直グニ 元ニ戻ルンテスヨ。不思議テタマリマセ
ン。」

「ああま・・・鍵を返せ・・・」

「モシカシテ コノ鍵ハ【スタンド】テ 生ミ出サレタ 鍵デスカ
？」

「返せと言つてるんだ！」

その時、男の首筋近くから太く、鋭い草の繩が“ドスン”と壁に突き刺さつた。男の首筋には一筋の血が少しだけ流れていった。【マテリアル・ガール】は立ち上がり、男を見据えていた。

「残念ナガラ 返スワケニハ イキマセン。コノ鍵ハ 貴方ヲ 境地ニ落トス 恰好ノ物体ニナルカラ・・・」

【マテリアル・ガール】の後ろから“シユルシユル”と何かが這う音が聞こえてきた。

「俺は・・・境地になんか・・・落ちてはいない！」

そう言い残した男は、後ろを振り向くと走り出した。突き刺さつた草の繩も男の方に鋭い先を向けて追つて行つた。

「ユースによると今田は確かに【嵐】が来るはずだった。夕方から猛嵐が吹き付ける筈だったんだ。それが、徐々に弱まり出している。

「ぐそ！鍵を落とすなんて・・・」

あの時、草を避けた時、ポケットから落ちたのだろう。失態。もうその言葉しかない。

「だが、まだなんだ。まだ、終わっちゃいない。」

この家は、広くて暗い。俺の素顔を見たのは【ネーヨ】しかいないのがせめてもう救い。そして、その【ネーヨ】が勝利の鍵となるのだ。

「この家を・・・俺は知っている。だから、今も変わらず俺はこの家の構造を知っている。」

一階からには“ガラガラ”と何かが崩れる音が聞こえてきた。あの【スタンド】は未だに、俺のいない所を探している。

「滑稽だ。此所から見える風景が、馬鹿馬鹿しく感じる・・・誰もこの場所を見つける事はない。」

その時だった。俺のいる場所から“ガダン”と音がして、“カタ、カタ”と音を発して誰かが登って来ていたのだ。俺は驚き、音のした方を向いた。

「まさか・・・幾らなんでもあり得ないし、早すぎる・・・考えられる事は・・・」

もう雲が殆どない空には月がこの場所を薄く照らしていた。そして、見えてきた人影はゆっくりとこちらに近付いてきた。見覚えがある。そして、一つだけ気付いたことがある。

「やう言えば、君はあの時の少年の面影があつたな・・・」

「・・・此所は俺の家だったんだ。だから、俺の部屋から屋上に登る階段があるのも知っている。」

「やうか・・・【懐かしいな】」

「【懐かしい】？？？俺はお前なんて知らない。」

確か【ジョナス】と言つ名前の少年だ。その【ジョナス】の後ろには美しい彫刻のような筋肉を身に付けた【スタンド】が拳を握り締めて、睨んでいた。

「知りたいか・・・」

「・・・」

【ジョナス】は黙つたまま俺を睨んでいた。その目付きはあの時と同じだ。

「・・・別に・・・只..」

「只?」

「純粋に・・・俺はお前を許さない。」

理不尽極まりないその言葉には覚悟が感じられた。だが、負ける気がしない。あのままの【スタンド】使い【なら俺は負ける筈がない。

「無駄だー君は【スタンダード】とじては、未熟すぎる…・・・今度は体を【貫通】させてやるつか?」

「やれるものならやつてみな。」

俺と【ジョナス】はお互い睨み合つた。嵐は既に通り過ぎたのか、一陣も吹かず、只、月の明かりが俺と【ジョナス】を照らしていた。

「【ブランディング】…

「【キング・ダイアモンド】…」

俺のスタンド【ブランディング】と【ジョナス】のスタンド【キング・ダイアモンド】の拳が“ガキンー”と鈍い音と共にぶつかりあつた。

「・・・力だけは凄いんだな。」

俺のスタンドを通して、俺の拳は“ビリビリ”と痺れ出した。そして、【キング・ダイアモンド】はもう片方の拳で殴ってきた。物凄いスピードだが、やはり未熟だ。まるでわかつちゃいない。

「なつー」

俺のスタンドは消えて、【キング・ダイアモンド】の拳は空振った。

「無駄なのだよー。」

俺のスタンド【ヘブンアンドヘル】は、俺の隣りに立っていた。スタンドの特徴を生かせば、俺に傷を付けることはない。俺は無敵なんだ。しかし、【ジョナス】はこちらに近付いて来ていた。

「やはり未熟！ 今度はその心臓に穴を開けてやるー。」

俺のスタンドは手を手刀に変えて、近付いて来る【ジョナス】の前にいる【キング・ダイアモンド】の胸に放った。

マテリアル・ガールその4（後書き）

小説を読んでくれまして有り難うござります。

昨日、PS版のウ”アルキリー”プロファイルをやつて途中で止まってしまい途方にくれた海堂です。

REGRETTER様、感想有り難うございます。お受け取りしました【スタンド】は必ず出したいと思います。【スタンド使い】の名前、性別と性格、戦闘、これからが楽しみです。

さて、雑談と言つことで

突然ですが、私はスタンド名の原曲、バンドの音楽を聞くのが大好きです。チープトリック、ビーチボーイズ、スパイスクガール、アンダーワールド、ローリングストーン etc. . .

その中で一番好きなのは、ディープパープルの「ハイウェイスター」です。この曲が一番スタンドに似やつていていいです。あと、フーファイターズも好きですし、レッチリは大【好物】です。フリ 最高！！

（フリ とは、レッチリのベーシストで私の憧れであり、パフォーマンスのプロ（自称）。）

これからも、頑張って行きたいと思いますので、宜しくお願いします。

月明りの下で・・・その1

「ぐう・・・此所は・・・」

月明りが照らすリビングの中、埃まみれの床の上で氣絶していた【ネー三】が目を覚ました。体中に、殴られたような痣ができており、【ネー三】は鈍い痛みに耐えながら起き上がった。

「確か・・・俺はあの男に・・・何をされたんだ?」

「気付きましたか?」

【ネー三】はびっくりし、後ろを振り返った。そこには、月明り照らされた緑色の髪を伸した男が猫背のまま、【ネー三】をジッと見ていた。

「貴方は、【ファーギー】の弟さんですね?大変でしたよ。動かない人間を運ぶのはとても辛かつた・・・」

「あんたは・・・誰なんだ?」

その時、不意に扉が開いた。月明りに照らされた一つの影は、長い髪をかきあげて何かブツブツと言っていた。

「姉ちゃん!」

「……【ネー弔】……」

それは、まるで感動の再会に思えた。しかし、【フラーギー】は【ネー弔】近く付くと頬を平手打ちした。“バチン！”と乾いた音が部屋に響き、その音に【バステット】は驚いた。

「【ネー弔】！あなたが私達に向をしたのかわかつてこのー！」

「「！」、「ぬさーだけえ・・・・・」

「言こと訳なんて、するんじやなー！」

また一発、【ネー弔】の頬に平手打ちが飛んだ。【ネー弔】はその衝撃で床に倒れて、皿からまつり皿からと涙が滲んでいた。

「わあー早く帰るわよー。おしゃべり謝るのよー。」「ぬさなさいつてー・・・・・」

【フラーギー】は【ネー弔】の左手を掴むと無理やり立たせようとしました。しかし、その手に重なるようにして【バステット】の手が置かれた。

「待つてください。まだ、まだ、終わっちゃいない！」

「……どういう事」

「まだ、あの男はこの家の中にいるんだ。それに……【ジョン】が何処にもいない……何か嫌な予感がするんです。」

「嫌な予感……」

【バステット】はゆっくり立ち上がると、扉の方に歩み寄った。そして上を見て、匂いを嗅ぐ仕草をした。

「わかる……男と【ジョン】は上にいる……匂いが……廊下を伝つて流れてくる。」

「……貴方は何者なの？それに、嫌な予感つて……」

「姉ちゃん……俺も……」

【ネー三】も立ち上がり、【バステット】に歩み寄つていった。
月明りの元、二つの影は重なつていった。

「あの男に用事があるんだ……それは悪い事じゃない……信じてくれないか？もう、姉ちゃんと母さんを傷つける事はしたくないんだ！」

その瞳は、茶色く輝いていた。混じりつゝ氣のない、純粹な瞳を【ファーギー】は睨み付けるように見つめていた。

「全く、あなたは誰に似たのやら……私も付いて行くわよ？【ジヨナス】には、恩がある。それに……あの、男がどうしてこの鍵を探していたのか、聞き出したいしね。」

「あの鍵？」

【ファーギー】は一人に銀色に輝く鍵を散らつかせた。そして、両手に持ち替えると、思い切り力を入れ折り曲げた。

「何やつてんの？姉ちゃん……」

【ネーラ】は【ファーギー】の行動を理解する事が出来なかつた。しかし、【ファーギー】が片手を放した時、折れ曲がった鍵がゴムのようにゅつくつと元に戻つていつた。

「鉄のように堅いのに・・・元に戻るなんて不思議じゃない？」

「そんな、有り得ない！」

「そう、有り得ないわ。だけど・・・」

「二人とも・・・」

【バステット】は呆れていた。頭を“ポリポリ”と搔いて、ため息を吐くと一人に言い放った。

「【ジヨナス】を探してからでいいですか？それに、それはスタンドの能力だと思う・・・絶対に壊れないスタンド、傷を付ける事が出来ないスタンド・・・似てるようで何処か違うんだ。」

「そう・・・なの？」

「これが、スタンド？」

一人は、銀色に輝く鍵を見つめた。鍵はシンプルで、何処にでもある普通の鍵だった。しかし、【曲げても折れない】その鍵は何処か神秘的だった。

「それじゃ行きますよ？」

二人は【バステット】の後ろを付いて行き、鍵は【ファー・ギー】の上着のポケットに入れられた。

私は【ご主人】に出会えて、本当によかつたと思う。毎日が新鮮で楽しかった日々がこれが初めてだった。一生こんな毎日を送りたいと思っているけど、もしも、【ご主人に出会わざ】に一生を【憎しみ】と【後悔】で生きていたらどうなっていたか、今ではもう想像さえ出来ない。

私が自分の能力に目覚めたのは2年前だが、その頃から私にはいつも【不幸】が付きまとっていた。【育児放棄】、【いじめ】、【裏切り】。人間の世界でも、犬としての世界もどれも同じだった。

そして、私は一つの決断をした。

それは自殺だ。

だから私はあの日、私を虐待した男から逃げて、車に自ら轢かれた。

だが、打ち所がよかつたのか、私は呻き声を上げて生きていて、その光景を見た男は笑つて帰つて行つた。私は痛みに苦しみながらも、やつと自分の不幸から逃れられると思っていた。

だが、そんな私に手を差し伸べてくれたのは【ご主人】だった。

多分、車に轢かれた時に、【不幸】が何処かに飛ばされたのだろう。そして、私に舞い降りた【幸福】。私はその【幸福】を手にする事が出来たのだ。

だから、手放されたくない。ずっと【幸福】のままでいたい。【ご主人】を助けなければ、私も【死ぬ】だらう。絶望の中で悶え苦しんで。

「ねえ・・・本当にこの部屋でいいの？」

「ああ・・・間違えないです。匂いがこの辺りで無くなっています。」

「だがよ・・・ここ、何もないぜ？あるのは、埃くらいだ。」

私達がいる部屋は、一階にある埃だらけで、白い壁紙が張られている小さな部屋だった。

「探しようがないわ。何もないんですもの・・・」

【ファーギー】と【ネーロ】は周囲を見渡すと壁を触っていた。押

したりしながら、何もない部屋の中を懸命に探していた。

「2人共、ちょっと待ってください。」

「どうしたの……ええと……」

「【バステット】です。それよりも2人共、これを見てください。」

2人が私がしゃがみ込んでいる方に近付いて来た。そして、2人は私が見ている【ある物】を見て、不思議に思った。

「なんだ? この跡は……此所だけ、埃の積り方が違うぞ。」

「小さい長方形が2つ……まるで梯子みたいね。」

2人はとても感が鋭い人間のようだ。私が何を言いたいのかわかつていた。一人は天井を見上げ、直ぐにある物が目に入つた。すると、【ネーヨ】は腕を思い切り伸して、天井に付いている【取手】を開けようとした。しかし、うまく開かないのか、何度も力を加えて錆び付いている取手を開けようとした。

「……この家には、屋上があるみたいですね。」

「ええ、そうね。所で【バステット】……貴方に一つ聞きたいことがあるんだけど・・」

【ファーギー】は、私を優しい目で見ていた。何を言いたいのかわかるが、女性とはこれほど感が鋭い人間なのだと改めて感じた。

「貴方は、あの【バステット】なの？あの白くて、体に傷をおった犬は貴方なの？」

「・・・はい。今は、【ジ】主人の家で暮らしています。」

「そう、ならないの。今の【飼い主】は優しい？」

【ファーギー】は多分、【飼い主】が誰なのか知っているのだろう。だから、恥ずかしいが私はこう言った。

「優しいです。何故なら、あの人は私の【幸福】だから・・・」

その時、“ガコン”と開けられる音と共に、鉄製の梯子がゆっくりと降りてきた。

「さて、これで上に行けますね。」

「そうね、行きましょう。」

「ああ・・・

【ネー三】は少し疲れきったのか、少しだけ田を虚ろにしていたが、直ぐに梯子を見ると真直ぐ上を向いて登った。その後ろを私、【フーギー】の順番に登つて行った。

月明りの下で・・・その2（前書き）

後書きにて雑談あり。

月明りの下で・・・その2

徐々に近付いてくる【H・A・H】の腕を【ジョナス】はジッと見ていた。月明りに照らされた黒いフォルムと、赤く丸い点が等間隔に付けられているその色が不思議な鮮やかさを醸し出していた。

「何・・・」

【H・A・H】の腕を掴んでいる【ジョナス】のスタンド【キング・D】は力強く握り締めた。“ミシシ”と音を発して、男は苦痛の表情を浮かべた。

「俺の・・・スタンドの速さを舐めるなよ。」

「凄い速さだ・・・だが、無駄なのだよー！」

【H・A・H】はもう片方の拳を【ジョナス】の顔面に放った。しかし、その拳も【キング・D】に手首を掴まれてしまつた。

「おっと・・・油断禁物だ。」

【ジョナス】の目の前に銀色のボトルが飛び込んできた。キャップが外れていて、その中の液体が【ジョナス】の顔にかかり、瞳の中に入つてしまつた。

「つおおおー酒が田」・・田こー・

その液体は無臭だったが、焼けるような痛みが瞳を襲い、【ジョナス】は反射的にスタンドの腕を放してしまった。

「ハハツー無駄だったな！これで終わりだ！」

【H・A・H】のスタンドが田を押さえている【ジョナス】の胸に向けて放たれた。しかし“バゴオ！”と殴られる音と共に口から血を流し、男が後ろにのけ反った。

「何が・・・起こうた？」

「だから言つたんだ・・・俺の速さを舐めるなって・・・

既に【ジョナス】は目から手を退けて、男を睨み付けていた。そして、【キング・D】の拳は【H・A・H】の顔面に放たれ、よろけていた。

「酒を100パーセントの水に変えた・・・もうあなたに勝田はな
い！」

ようれた【エ・ア・ヒ】に【キング・ド】の拳が再び飛んだ。しかし
その拳は空振り、【エ・ア・ヒ】は消えていた。

「無駄！」

【ジョナス】は、左側に現われた【エ・ア・ヒ】の拳に気付き、避け
て【キング・ド】の拳を放った。しかし、その拳も空振りだった。

「此所だ！」

“バゴオ！”と音と共に【キング・ド】が顔面を殴られた。そして、
【ジョナス】も同じように後ろにのけ反り、倒れよつとしていた。

「これで、終わりだ！」

そして、追い討ちをかけるように【キング・ド】の胸に【エ・ア・
ヒ】の手刀が物凄いスピードで迫ってきていた。しかし、倒れなが
らも【ジョナス】はその手刀を見ていた。

「わかつていた。あんたが、心臓を狙つてくるのをー。」

【キング・ド】は迫つてくる手刀を白羽取りをするかのように掴ん

だ。しかし、掴んだはずなのに“ザシュー”と刺さる音と共に、【ジョナス】の右腕に激痛が走った。

「やはり甘い！そして、未熟！」

【キング・D】の右腕からは【H・A・H】の左手の手刀が貫通していた。

「その右腕、見えてないだろ？もしかしたら、震んで見えるのか？どちらにしろもうスタンドの右腕は使えまい！」

「！」

馬乗りの形で【ジョナス】に跨がっている【H・A・H】に【キング・D】はもう片方の拳で殴つた。だが、その拳は【H・A・H】によつて掴まれてしまつた。

「無駄！無駄！無駄！」

男の“無駄！”と掛け声と共に、【H・A・H】の拳が【ジョナス】の顔面を殴つた。

「へつー」

【ジョナス】も力の入らないスタンダードの右腕を盾に、必死に【H・A・H】の拳をガードしていた。

「ハハハハ！いつまで続くのだ？」

「ぐ・・・右腕が痺れてきた・・・」

限界にきていた【ジョナス】に追い討ちをかけるよう、【ジョナス】のスタンダードの右腕を何度も同じ所を殴つていった。その痛みに【ジョナス】は歯を噛み締め、我慢をしていた。

「始めてからこうすればよかつたのだ！あの時お前をあの【オリ】とか言う餓鬼の隣りで殺しておけばよかつたのだ！」

「な・・に？」

【ジョナス】は男の言つた言葉に驚いた。【ジョナス】しか知らないその名前に、怒りが込み上がりそして、悲しみ、涙を浮かべた。

「俺は・・・お前なんて知らない・・・・それこそ、その名前を・・

・」

「俺は、あの時はっきり言つたぜ？【あんな幸せそつな所を見るとなんかむかつく】ってなああー」

そして、男は殴るのを止めると【ジョナス】の顔を掴み、激しく押し付けた。

「そして、お前は俺の顔を見た！だから、今此所で殺す！」

男の横にいた【H・A・H】の左手が手刀に変わり、その標準は【ジョナス】の胸に向けられていた。

「今からあの餓鬼の所に行かせてやるよー！」

大きく振り上げたその手刀は、【ジョナス】の胸に急降下して行った。しかし、その手刀は【ジョナス】の胸に当たらなかつた。その手刀が当たる直前、月明りに照らされた【白い物体】がその手刀に当たり、男と【H・A・H】が横に吹き飛ばされたのだ。

「うおおおーなんだこの犬はー！」

「【バステット】・・・」

【ジョナス】が見たのは、月明りに照らされた白い歯をむき出しに鋭い目付きを男に向かた【バステット】が男の腕を思い切り噛み付いていた。

「【ジョナス】！」

「【ジョナスさん】！大丈夫ですか！」

「【ファーギー】……それに、君は……」

【ジョナス】に駆寄せた【ファーギー】と【ネーミ】は、右腕を押されて倒れている【ジョナス】を起こすと男を見た。

「！」の放しやがれ……【H・A・H】の犬を殺せ！』

しかし、一向に【H・A・H】は男に近寄らなかつた。そして、男は、ある事に気付き啞然とした。

「いつの間に……【ジョナス】！お前は何をした！」

「あんたが……夢中になつて俺を殴つていた。それに、あんたは気付いていなかつた。」

男のスタンド【H・A・H】の右手首はコンクリートに手錠をはめ
るよつに【埋め込まれて】いた。

「『Jのくそ餓鬼が・・・』

すると、男は左手からライターを取り出し、【バステット】に向けて最大火力で頬を炙つた。“キヤウン！”と叫んだ【バステット】は口を放すと同時に、男は【バステット】の腹に蹴りを放つた。

「【バステット】！」

「『Jの犬は、殺すつもりはない・・・だが、お前らは、俺の顔を今
見たな！』

苦しみ悶えている【バステット】を尻目に、男は【ジヨナス】と【
ファーギー】に近付いて行つた。

「【2人】まとめて殺してやるー！」

「2人？・・・」

「ジョ・・ナ・・・ス・・・・

後ろから、掠れるような声がして【ジョナス】は振り返った。そして、驚き目を見開いた。

「まだ・・・能力は解除していないのだよ。」

【ファーギー】とそのスタンド【M・ガール】は首を締められ、苦しんでいた。そして、その首を締めていたのは、虚ろな目を覗かしていた【ネーム】のスタンドが“ギリギリ”と音を発して、【M・ガール】の細い首を力一杯締めていたのだった。

月明りの下で・・・その2（後書き）

今回の話からスタンダードの名前を短縮したのですが、【ヘブンアンドヘル】の短縮が【H・A・H】……。

顔文字に見えて仕方がないですね。どうも、海堂です。

先日、調子に乗つて【ジョナス】と【キング・D】のイラスト依頼をした所、その日に書きたい人が現われ、次の日には完成していました。

ロード14／14様、その節は有り難うございましたm(— —)m
かっこいいイラストに感動しました。

さて、昨日と今日、私は友達と一緒に【感染】と【サイレン】と【サイレン島】を見ました。

【感染】と【サイレン】はホラーであり、サスペンス要素もたっぷりでとても面白かったです。

しかし・・・【サイレン島】は駄作でした。まだ【ブレア・ウィッチ】の方が面白いですね。只、一つだけ爆笑がありましが・・・

明日は、純粋にホラーが見たいので、一回目ですが【呪怨】でもみよつと思います。

それでは、皆さんこれからも【ジョジョ】を最後まで書いていきたいので、これからも応援宜しくお願ひします。海堂でした。

月明りの下で・・・その3（前書き）

後書きにて雑談あり。

月明りの下で・・・その3

既に嵐は止んでいた。神秘的に光る月の明かりの下、段ボールを山積みに積んだ一台のトラックが、音を発して走っていた。

「てめえ・・何をした！」

「何をしたかって？見ればわかるだろ？」

【M・ガール】は、苦しみながらも【ジャミロクワイ】の腹部に肘鉄を食らわしていた。だが、一向に手を放す事もなく、逆に【ジャミロクワイ】は更に力を加えて行つた。

「！」の野郎！」

【ジョナス】は上着を脱ぐと、水平に引き、【ジャミロクワイ】の脇腹に力一杯ぶつけた。“ドゴォ”という音と共に“バキ！”と骨が折れ、【ネー弐】は血を吹き出し、スタンドを放した。

「ハア・・ハア・・ハア・・」

「【ファーギー】…大丈夫か！」

「わ、私の心配よりも…」

【ネー弐】は骨が折れたのにも関わらず、何も感じないのか【ジョナス】に向かい、自身のスタンドで背後から襲いかかった。

しかし、それよりも早く【キング・D】の拳が【ジャミロクワイ】の顔面を捕らえた。

“ミシミシ”と軋む音が聞こえたが、【ジョナス】は何度も【ジャミロクワイ】を殴り、渾身の一撃を放つと【ネー弐】は吹き飛ばされていった。

「さすがだな・・上着を【鉄の棒】に瞬時に変えるとは・・・」

「次は、てめえの番だ！」

【ジョナス】は男の方を振り返ると、スタンンドの拳を振り上げた。しかし、男は笑っていた。同時に投げ捨てた【鉄の棒】が、【ジョナス】の頬をかすめて、屋上から落下していった。

「たが、甘い。まだ終わっちゃいないのだよー。」

【ジョナス】が振り返ると、フラフラとおぼつかない足取りで【ネー王】が【ジョナス】に指を指していた。

「次は・・外さない・・・」

「なんで・・・動けんだよ・・・てめえは・・・」

「今度は・・・はず・・・・・さな・・・い・・・」

「てめえは動いちゃいけねえんだよおー・その体でー！」

その時、一陣も風が吹かないのに、“ビュウ”と【ジョナス】の耳元で吹いた。

「【ジョナス】……あんた・・その耳・・」

【ジョナス】はおもむろに耳を触った。生暖かい感触が【ジョナス】の手に広がり、“ドクドク”と脈打つ振動が伝わった。

【ジョナス】の耳に大きな穴が開き、血が“ボタボタ”と落ちていた。その穴から、男の澄した顔が覗かしていた。

「お前は、まだ【ネー^三】の能力を理解していない・・・それが愚かで・・・未熟・・・」

【ジョナス】は男の歎きなど、どうでもよかつた。今、やらなければいけない事。

それは、【ネー^三】を倒す事。

【キング・D】は拳を振り上げると、コンクリートを殴り、掬い上げた。ひび割れ、破片が【ネー^三】に飛んでいった。

「無駄だ…お前の【能力】では倒す事など出来ない…」

【コンクリート】の破片は形を変えて、鋭いナイフに姿を変えた。そして、そのナイフは【ネー三】の肩に【当たつた】

「…の…糞が！」

ナイフは刺さるどころか、鋭い刃が【ネー三】の体に吸い付くように固定されていた。

「お前は…【熱くなると何も見えなくなる】タイプなんだな。どんな音さえも、お前は全て無視するんだな…」

「…の…外野は黙つて…」

【ジョナス】は振り返り、男を睨み付けた。

「おや?…どうしたかね…」

男は既に、手首にはめられた【コンクリート】の手錠】を壊して、立ち上がっていた。

そして、その傍らには【ファーギー】が男に寄り掛かるように、体

を預けていた。

「【ファーギー】……お前、何やつて……」

【ファーギー】は“ズルズル”と音を発して、座り込むと、そのまま何も動かなくなつた。

変わりに、男の隣りには【H・A・H】がたたずんでいた。

「【ファーギー】……まさか……嘘だろ？」

【ファーギー】の口と腹部からは“ドロドロ”とした血が流れ、瞳は輝きを失っていた。“ピクリ”とも動かないな【ファーギー】のポケットから、男は鍵を取ると月にあてた。

「人の死とは……夢ぐ、美しいものだ。それに、こんな美しい月の元……死ねるなんて……」

「てめえは……」

【ジョナス】は歯を食いしばり、俯いていた。拳をキツく固め、男を睨付けると、男は鍵を胸ポケットに入れると【ジョナス】を見つめた。

「よみ見をしている暇なんてあるのか？」

「え・・」

【ネー弔】は既に【ジョナス】の後ろにいた。【ジョナス】が振り返ると同時に、【ジャミロクワイ】の手刀が、首めがけて振り落とされていた。

【ジョナス】は反射的にその手刀を、【キング・ロ】の拳で殴った。

「ああ・・・ああ・・・」

軋む音と共に、爆音がなった。大量の血が【ジョナス】にふりかかり、【ジャミロクワイ】の手刀は既になかった。

「俺は・・・俺は・・・」

【ネー弔】はどんどん血が垂れ流れる腕を見つめた。そして、そのまま前のめりに倒れた。

「【ネーツ】はもつあくべ出血多量で死ぬ……これで、私を知るものは西なくなる……」

【ジョナス】の頭を【H・A・H】の手が触れていた。【ジョナス】の瞳は輝きを変え、絶望のように濁んでいた。

「俺は……なんて事を……じつすれば……」

「そんなの簡単だ……お前も【償うんだ】。例えば、此所から飛び下りてはどうかね？」

【H・A・H】が手を離すと、【ジョナス】は踵を返して四四四口と歩き始めた。

目の前に広がるのは、暗闇のみの世界。地上には固いアスファルトが敷き詰められているその上。【ジョナス】は屋上から飛び下りようとしていた。

男は【ジョナス】の背後で立ちながら、妖しく笑った。

「……これで……終わる。私の愛くるしこ【弟】を助けるため……」

その時、男の体に物凄い衝撃がはしり、横に吹き飛ばされた。男は

何が起きたのかわからず、男にしがみつく影を見た。

それは、長い髪を揺らしている全裸姿の男だった。

男は疑問に思いながらも、今のこの状態に驚いていた。

「お前は何をやっているんだああー。」

一人の男は、空中に投げだされたように浮かんでいた。とつせに男と【H・A・H】の右手が屋上の端を掴んでいたので、屋上から落ちる事はなかった。

「やばい・・・限界だ!」

「これで・・・貴方も【一緒】に死ねますね。」

「止めくなー!」

【H・A・H】は左手で、【バステット】の顎を押した。力を加え

て、しがみつく【バステット】は徐々に男から離れていった。

「ハハハハハツ！やはり無駄だったな！」

「私は・・・私の【幸福】を邪魔する奴は・・許さない！」

「なら・・・その幸福という欲望に溺れていけ！」

【H・A・H】の左手は【バステット】の頭を掴むと、【バステット】は白田を向いて苦しみだし、【H・A・H】の左手首を掴み、暴れ出した。

「つかつかー止めるかー私の・・・私の【心を覗くなあ】・・・

」

「わあ早くお前の【心の中】を見せてみるー。」

そして、【バステット】はピタリと止った。白田だった瞳は正常に戻り、一点を見つめた。

「私の・・・幸福は・・・」

【バステット】は、両手を放すのと同時に【H・A・H】は掴んでいた【バステット】の頭を放した。

しかし、【バステット】は落ちずに、逆に上へと浮かんで行つた。それを見た男は驚き、そして自分の過ちに呆れてしまつた。

「そりか・・・私はまた【能力】を使つてしまつた・・・なんて事だ！」

【バステット】の隣りには、血だらけの【ジョナス】が男を見下ろしていた。その瞳は、既に濁まざに輝いていた。

「逆転か・・・もし此所でお前を攻撃するのと、お前がこの【掴んでいる手】を潰すのとでは・・・どっちが速いのかな？」

男は絶望の中にいるのにもかかわらず、【ジョナス】を見上げて、スタンンドの拳を見せていた。

そんな男を【ジョナス】と【バステット】は睨み付けていた。

「さあな・・・やつてみるか？」

「【ぐブンアンドヘル】！」

男のスタンド【H・A・H】の拳が【ジョナス】に向かい飛んで行った。

「【キング・ダイアモンド】ー。」

同時に【キング・D】の拳が、男の手に向けて放たれた。

しかし、そこには既に男の手はなく、【キング・D】の拳はコンクリートを碎いた。

「フハハハハ！俺はもはやお前になんて興味はないー既に一つの事柄は達成したからな！」

男は【段ボールを山積みに積んだトラック】に飛び乗ると、そのまま【ジョナス】から遠ざかっていった。

月は全てを見ていた。その光の下、【ファーギー】と【ネーヨ】が手を繋ぐような姿で寝ていた。そして、【ジョナス】は【ファーギー】の半開きの瞳を手で押さえると、降ろした。冷たい顔は、安らかに眠るような表情をしていた。

「すまん・・・全では俺のせいだ。」

「【ジ】主人・・・貴方のせいではありません。貴方は、精一杯戦つた・・・」

「違う・・・俺なんだ・・・俺が未熟だから・・・だが・・・」

【ジョナス】は後ろにいる【バステット】の方を振り返った。悲しむような表情は、既になく、その瞳には決意が感じられた。

「俺はあの男を許さない。それが、二人への償いにならなくともいい・・・俺はあの男を追う！」

「なら、私も行きますよ？私はあの男の匂いを覚えていますからね。」

・

「駄目だ・・お前が、死んだら・・・

「私の居場所は・・【『』主人】の隣りだけですから・・・それに私は死にませんよ?まだ生きたいですかね。」

「・・・わかった・・なら、俺から離れるなよ・・・」

【バステット】は微笑むように笑うと形を変えて、犬になり、【ジヨナス】の足に頬をあてた。

次の日、警察庁に一本の電話が入った。その声は、若い男の声で【人を一人殺した】と淡々と喋っていた。

そして、その日の内に【ジヨナス】と【バステット】は姿を消した。

月明りの下で・・・やの3（後書き）

昨日、髪型を変えた所、皆に怖がれました。【若頭】【ヤクザ】【ヤツさん】。色々な罵声の中、ある事に気付きました。

サングラスを付けたらどうなるかと・・・

明日はサングラスを付けて友達と【ハーライブ】を見に行きます！
どうも、海堂です m(—_—)m

さて、今回の話で既に一人死にました。

これでいいのか？と思いましたが、これで行きます。行かせてください！

後、最後の方・・・何かBしつぽくなりましたが、別に私はBし好きではないので安心してください。むしろ、Bしは嫌いです。

なら、何故そうしたかと言つと、私にもわかりません。

今は、志村動物園を見ながら和んでいます。カピバラガ可愛かった

です。

評価、感想を送つまると私【海棠】は物凄く嬉しいので、宜しくお願ひします m(—_—)m

ト&ロボット・ードウーデールのー（前書き）

後書きにて報告あつ。

ウ&ガボット・ードウードールその一

本日は晴天、温かい太陽の光は【シドニー】を照らし、オペラハウスを銀色に輝かせていた。

「わからない‥私は【ご主人】の考え方がわからない‥」

その近くを通る道路を、一台の車が走っていた。黒い車体には、黄色の星模様が付けられ、どの走る車よりも目立っていた。

そして、その中には一人の人間がいた。

一人は運転席に座り、何やらふてくされた表情をしている青年。

もう一人は、助手席に座り、頭を抱え込んでいる長髪の青年。

「別にいいだろ? いつかは、バレるんだし‥‥」

「【ご主人】は警察を舐めているんですか? 【アイツら】は、どんな手を使つても、私達を見つけて逮捕するんですよ!」

「その時は、何とかなるだろ?」

「甘いー甘いですよ、【元主人】ーどんな小さな証拠でも、警察は【私達】を見つける事が出来るんですよ!」

【バステット】は、険悪な表情を【ジョナス】に向けた。しかし、興味なさげに【ジョナス】は溜め息を吐いた。

「テレビの見過ぎだ。大体、警察の関与する事件の半数位は未解決だろ?が?」

【ジヨナス】の発言に、【バステット】は溜め息を吐いた。

「【元主人】は【新聞】を読んでいますか?」

「・・・テレビ欄位は・・・」

「・・・テレビ欄だけ?他には・・・」

「・・・興味ねええなあ・・・」

「馬鹿ですか?」

その瞬間、【ジョナス】は【バステット】の胸ぐらを掴み、引き寄せた。

睨み付けるように、【バステット】を見下ろしていた。

「【犬】に馬鹿とは言われたくないなあ・・・大体、【犬】が新聞を読むなんてスゲエヨな・・・いや、テレビを見るくらいだからなあ・・・売り飛ばすか？」

「いや、それは勘弁して・・・」

【バステット】は苦笑いを浮かべ、両手を前に出し、降参の合図を出した。

しかし、【バステット】はある事に気付いた。今、【ジョナス】は【バステット】の胸ぐらを掴み、睨んでいた。

「【♪】主人！あんた何やつてんだ！」

「え？」

田の前には、仁王立ちをするように立つ男がいた。【ジョナス】は急いでブレーキをかけたが、その瞬間、鈍い音と共にフロントガラスが割れた。

【ジョナス】は、ハンドルを両手で驚掴みし、荒く呼吸をし、【バステット】は、のけ反るよろよろシートに倒れ、青ざめていた。

「何が・・・起きた。」

「見ればわかるでしょ・・・人を跳ねてしまつた・・・

「お前のせいだからな！見る、フロントガラスを！髪の毛やら皮膚やらがくつついでるだらうが！」

【ジョナス】は、まるで【鬼の形相】のように【バスケット】に詰め寄つた。

「違うー！【僕】主人が【よそ見】をしていたからこんな事になつたじゃないですかー！」

「クソーなら、このまま逃げて別の車を探してやるー！」

【ジョナス】はいきよいよくアクセルを踏もつとした。

「ま、待ってください！死体は……轢かれた人間が見当たらないですが……」

「知るか！今は逃げなきやいけねえんだよー俺達はもう【殺人者】なんだぞ！」

「もう一つ……」

「今度はなんだ！」

【ジョナス】は焦りと怒りの中、【バステット】を睨み付けた。

しかし、【バステット】は冷静だった。焦りはなく、外をジッと凝視していた。

「静かすぎる……車が……人も行き交わっていないんですー今日は祝日でしかも、午後！……」

「……」

【バステット】の発言に、我に帰った【ジョナス】は辺りを見渡した。市街地に位置する場所で、誰一人として【いなかつた】。

不意に【ジョナス】は、バックミラーに目を向けた。そこには、【警察官】の制服に身を包み込んだ一人の人間が、徐々に車に近付いて来ていた。

「気付きましたか【ご主人】？」

「ああ・・・嫌な予感がする。」

「私もです・・・」れば【アレ】ですよね？」

「多分【アレ】だろう・・・だが、もし【アレ】だとしても・・・少な過ぎる。」

「【アレ】は間違いないでしょ・・・そして、二人の【警察官】・・・もしかしたら二人は・・・」

ずっとサイドミラを見ていた【バステット】は、【ジョナス】を見た。【ジョナス】は、ジッと前を見据えていたが、何処か【興奮】

しているのか、息を荒くしていた。

「・・・【△主人】？」

「間違いない・・・一人は【スタンド使い】だ。それにこれは・・・」

【ジョナス】は、ハンドルを見ていた。【バステット】も覗くように、ハンドルを見て、驚いた。

ハンドルのクラクションボタンには、大きな【星模様のシール】のような物が貼られていた。

「いつ・・・仕掛けられたかなんてどうでもいい・・・イカすぜ、この【スタンド】は・・」

本日は晴天、【ジョナス】と【バステット】の周り数百m先には、囲むようにして、パトカーが道を塞ぎ、逃げられないようになっていた。

一人の警察官の右腕には茶色く、手の平サイズの人形が握られていた。金髪で長髪の警察官は、何かを噛んでいるのか“クチャクチャ”と口の中で、音を放っていた。

「いやああ、まさかこんなにも早く捕まるなんてねえ・・・楽勝だぜ・・・」

「口を慎め、【アスワド】・・・まだ逮捕した訳ではない。」

【アスワド】に注意をする男は、すつきりした顔立で、紫色の瞳に同じ色の髪を伸した【警察官】で、左手の甲には【星模様のシール】が貼られていた。

「はいはい、【ロウ】先輩・・・口は慎めますよ。だけど・・・」

“ニヤニヤ”とふやけるようにして笑う【アスワド】は、制服のポケットから【赤い液体の入ったビン】を取り出し、蓋を開けた。

そして、右手に持っていた【人形】に赤い液体を大量に塗った。“ドロドロ”と流れ落ちるその液体は、まるで血のよつよどす黒かつた。

「二人の内、【誰が殺ったのか】は、知らないといけませんからね
え・・・・・【ウードウードール】！」

【アスワド】の背後から、【木材のよつなスタンド】が現れ、持つ
ていた【ドス黒い人形】の中に、吸込まれるように入つて行つた。

「現場に付着していた被害者とは違う【別の血】は、誰なんだあ
？」

【アスワド】はスタンドが入つた【人形】の右腕を【手を上げる】
ように持ち上げた。

すると、車の中、【ジョナス】の右腕が上がつた。血が滲んでいる
包帯が、袖からチラリと見え、【アスワド】は妖しく笑つた。

「ビンゴオオ！あの男が犯人だな！」

「そりか・・・出来したぞ【アスワド】。しかし、勝ち誇るなよ？」

「なんでだよ、先輩？アイツはもう【ウードウードール】の術中
にハマつてんだぜ！」

「あの男・・・気付いている。俺の【スタンド】が見えてる・・・

「

警察官【スキッド・ロウ】は、【ジョナス】が【スタンド使い】と見破っていた。数十m先で、冷静に一人を見ていたが、警察官【アスワード】は、【ロウ】を睨み付けて、噛んでいた【ガム】をいきよいよく捨てた。

ト&ロコモ・ードカーボールのー（後書き）

明後日から、自転校に行きますので更新遅れます。本当にすみません

ん三（— —）三

しかし、卒業したらまた【周一】のペースで書いていきますので安心して下さご。

と詰つよつ、自転校中でも、更新するかもしません（・—＊）￥

【ネタ切れで書けない】や【やる気がでない】とか、中途半端に終わらせる事はないので、これからも応援宜しくお願ひします三（— —）三

ウ&ガボット・ードウードールその2

【アスワド】は【スキッド・ロウ】が気に食わなかつた。自分だけがこの能力が使えると思っていたのに、所属する警察庁で先輩にあたる【ロウ】も自分と同じ能力者で、偉そうに【アスワド】に命令する【ロウ】に敵意を隠しながらもむきだしていた。

「ワカツ テイルト 思ウガ、君達ハ完全ニ 包囲サレテイル…」

車の方から、【ロウ】の声が聞えてきた。その声はカセットテープに録音されていた【声】で、そのカセットに【星模様のシール】を貼り付けたのだ。今、そのシールは車の警報器に貼り付けてある。

「出来レバ 抵抗ハシナイデ欲シイ。君モ スタンド使イ ナラ
コノ状況ガ・・・考エレバ ワカル ハズダ。」

【ロウ】は腕組みをして車内を睨み付けていた。【バステット】が【ジョナス】に近付き何か言つてゐるようだが、【ロウ】は只黙つて車内を睨み、【アスワド】は人形の左腕を掴んでいた。

その時、突然【バステット】が【ロウ】と【アスワド】の方を振り向き、何かのポーズを出した。

右腕と左腕を交差させて左の中指を上に向けるそのポーズに【ロウ】は無言に見ていたが、【アスワド】の表情は変わっていた。

その瞬間、車内から大きな叫び声が聞えた。【ジョナス】の左肩が奇妙な方向に曲り、しかし、微動だにせず無我夢中に叫んでいた。

「【アスワード】…何をやつた！」

「先輩…あのポーズに怒らない先輩もどうかと思いますが？」

【アスワード】は不敵に笑っていた。【ロウ】は車内から【アスワード】に視線を向け、睨んだ。

「仕事中に私情を出すな！逮捕する事に専念すればいいんだ！」

この時、初めて喜怒哀楽の【怒】を表した【ロウ】は顔を真っ赤にし、眉を歪ませた。

「人をなんだと思っているんだ！」

「…すみません…」

【ロウ】は【アスワード】の胸ぐらを掴み詰め寄った。【アスワード】は謝ったが、その言葉には何も感じられず、逆に【ロウ】を見くびつているようだった。

「・・・」

【ロウ】は【怒】の表情を隠し、いつもの表情に戻ると【アスワード】から離れた。そして、再び車内に目を移した時、【バステット】の姿がなかった。車内には上下に荒く呼吸をする【ジョナス】以外にいない事に【ロウ】は驚いた。

「いなー・・まさか逃げやがったのかー！」

「手分けして探すんだ！【アスワード】は逃げた方を探せ！」

【アスワード】は無線を取り出すと他の仲間に連絡をし、ベルトから拳銃を出すとその場から離れていった。

「・・・」

【ロウ】は無言のまま【アスワード】の背中を見た後、【ジョナス】の車に近付いていった。

【バステット】は街の路地裏を【犬】の姿になり走り回っていた。路地裏には、徘徊する野良犬が【バステット】を威嚇し、唸つていた。

「よし・・・」んなもんでいいかな。」

「何が・・・いいんだって?」

【バステット】が【人間】に戻ろうとした時、背後から【アスワード】が荒く呼吸をしながら拳銃を突き付けていた。その近くには、数人の警察官が驚いたように目を見開き、同じく拳銃を突き付けていた。

「まさか・・お前もスタンド使いとは・・・思わなかつた・・・」

「【アスワード】先輩・・・わ、私は幻でも見ているのでしょうか・・・」

一人の警察官が【アスワード】に怯えるように震わせた。

「な、何故人間に尻尾が生えているのですか…しかも、犬のような耳も…‥」

「知らねえよ！自分で考えな！」

【バステット】は【アスワード】と警察官達を睨み付けた。【アスワード】は睨み付け返したが、他の警察官達は【怪物】を見つけてしまったように震え、怯えていた。

「貴方が、【ご主人】に攻撃した奴ですか？」

「ああ、そうだ。さて此所で問題だ‥‥」

【アスワード】は胸ポケットから、【血だらけの人形】を取り出した。

「この人形を地面に叩き付けたらどうなるでしょお？‥‥‥‥‥‥
答えは、【全身打撲】‥‥」

「止めやー！」

【アスワード】は高々と腕を上げると、思い切り振り落とした。【バステット】は止めようとして、大声で叫んだ。

その時、“バン！”と弾ける音がして【バステット】の右腕が跳ね上がった。【アスワード】の拳銃の銃口からは硝煙が立ち上ぼり、撃鉄が降ろされていた。

「ハハハッ！嘘に決まつてんだろうがーだがな・・・」

そして、再び撃鉄を起こすと右腕を押さえている【バステット】の頭部に狙いを定めた。

「お前はどうなるかわからないぜえ・・・【素っ裸の罪】に【犯罪に荷担した罪】に【俺を馬鹿にした罪】があるからなあー」

「ー」のクソ野郎・・・

【バステット】は後ろを振り返ると、路地裏の曲がり角に向けて走つた。一発の発砲音がした後、【バステット】の耳元で“ヒュン！ヒュン！”と風切り音が聞えて、壁にあたつた。

「待ちやがれー！」

再び撃鉄を起こした【アスワード】と警察官は、路地裏の曲がり角を曲がった【バステット】を追いかけた。

「逃げても無駄だ！そこは、行き止まりだからな！」

曲がり角を曲がった瞬間、【アスワード】は引き金を引き、撃鉄をたき落とした。発砲音と共に弾は真直ぐに行き止まりの壁にあたつた。

「何！何処に行きやがった！」

そこには、既に【バステット】はいなかつた。黒く汚れている野良犬が発砲音に怯え、壁と壁の人間では通れない隙間から逃げて行つた。

ウ&ガボット・ードウードールの3（前書き）

後書きにて雑談あり。

ウ&ガボット・ードウードールその3

壁は黒く汚れていた。日があたらない路地は湿気が漂いジメジメしていた。銃を降ろし、行き止まりの路地を見渡した【アスワード】は溜め息を吐くと、建物と建物の間にあいた隙間に歩み寄った。

「何処に行つたんだ？」

「知るか・・・それよりも何だつたんだあの男は？」

「人間じゃ・・・なかつたよな？犬人間か？」

二人の警察官は先程の男の話をしていた。全裸だつた男の頭には犬のような耳が生え、真っ白く“フワフワ”と毛並みが逆立っていた尻尾が生えていた。二人の警察官にとつてその男は不思議で、奇妙で恐ろしかつた。

「ちつ・・・こんなんじや操れねえ・・・」

二人の警察官を尻目に【アスワード】は隙間がある路上にしゃがみ込むと隙間の奥に手を突っ込んだ。

そして、手を戻すと指先には泥やカビが付着して、その中に【奇妙

な液体】が泥とカビに混ざるよつた形で【アスワード】の指先に付着していた。

「あの男はこの隙間を抜けて行つたんだな・・・だが、どうやって・
・」

隙間の奥は暗黒が続き、豆粒大の白い光が遠くに輝いていた。

「くそ・・・仕方ねえな・・・」

いつの間にか【アスワード】の右手には【真つ赤な人形】が握られていた。左肩が不自然に曲がったその人形に先程、指先についた【汚れた液体】を人形の頭部に塗り付けた。

すると人形の左肩が徐々に元の形に戻り、赤かつた人形は頭部以外、色が抜け落ち元の茶色に戻った。

「さあ、あの【全裸男】を・・・追え。」

【アスワード】は人形を隙間の奥に放り投げた。

「よしー【ロウ警部】の所に戻るぞ。」

「え・・・しかしまだ・・・」

「・・・お前ら俺の命令が聞こえなかつたのか?」

「いえ!・・・ですが・・・」

「上司の命令は絶対だらあが?」

【アスワド】は二人の警察官に詰め寄り、二人の肩を“ポンポン”と優しく叩いた。警察官達は不安そうに表情を曇らせた。

「大丈夫だ!奴は必ず戻つて来る。これは確信だ!間違いない。」

【アスワド】は妖しく笑つた。そして、二人の警察官の間を抜けて行き止まりの路地から出て行つた。その後ろを疑問を感じながらも、二人の警察官もついて行つた。

二人の警察官は気付かなかつた。【アスワド】のいた隙間から“ピチャピチャ”と何かが動く音が発していた。

【ジョナス】は苦しんでいた。左肩は不自然に曲り、激しく刺されるような痛みが容赦なく【ジョナス】を攻撃していた。

「うう・・ぐ・・い、痛え・・・しかも・・動けねえ・・」

【ジョナス】は一步も動く事が出来なかつた。右手で左肩に触れる事も出来ず、首も動かない為、左肩がどうなつているのかさえ【ジョナス】は知る事が出来なかつた。

その時、助手席の扉が開いた。【ジョナス】は只一つだけ動く事が出来る目を左側に向けた。

そこに居たのは一人の警察官だつた。紫色の瞳に警察帽からはみ出した紫色の髪を生やした警察官はいきなり助手席に座ると、扉を閉めた。

「何なんだあんたは・・・」

警察官は無言で【ジョナス】の体をまんべんなく触れた。【ジョナス】は一瞬、体中の毛穴が絞まつたような感覚にとらわれた。

「車に乗つて何時間たつ?」

「はあ?・?・?3時間前だ・?それがどうした?」

警察官は【ジョナス】の体から手を放すと前を見つめた。フロントガラスはヒビが入り、眼鏡がめり込み、皮膚が付着していた。

その警察官を【ジョナス】は警戒していた。突然触れられた体のあちこちには、先程の【星模様のシール】が張られていた。直感的に【やられた!】と【ジョナス】は思った。

「不思議だと思わないか?眼鏡がめり込む程の衝撃なのに・?・皮膚も付着しているのに【血】がないなんて・?・お前達が轢いた男は生きてる。死刑囚でな・?・今は警察車に乗つて刑務所に運ばれる頃だろ・?・何故生きてるかわかるか?」

長々と話した警察官の問いに【ジョナス】は答える事が出来なかつた。田だけを警察官に向けて、睨み付けていた。

「人間は罪を少なからず背負つて生きているんだ。それが、殺人鬼でも誘拐犯でも罪を償つ為に生きて行かなければならぬ……死刑囚でも執行されるまで【生きる権利】があるんだ。今回の作戦は俺自身あまり好ましくないが……」

「何故……そんな事を……」

「長時間の運転は血流を悪くし、血栓を作りやすくするんだ……エコノミー症候群って聞いた事があるかい？もう気付いている筈だ。」

【ジョナス】は気付いていた。長時間の運転で自身でもわかるように体は悲鳴をあげていた。しかし、今はその悲鳴は聞こえず体から無駄な力が抜けたような感覚がしていた。

しかし、それでも左肩から痛みは消えなかつた。

「どうなつているんだ？・・あんたもスタンド使いなのか？体が動かないのも、あんたのスタンド能力なのか？・・」

警察官はおもむろに【ジョナス】の左肩に触れた。ほんの少しだけ指先が触れただけなのに、【ジョナス】は短い悲鳴をあげ苦しみ出した。

「君が動けないのも、左肩が骨折しているのも俺のスタンド能力じゃない……【アスワード】だ。俺の隣りにいた奴だ。」

「くそ……俺は此所で終わりなのか？ だつたら【バステット】は関係ない……俺のせいなんだ、俺だけを逮捕すればいい……」

【ジョナス】は既に逃げるのを諦めていた。体の自由が効かず、隣にはどんな能力なのかわからないスタンド使いが座っているこの状況……

「……悪いが、俺は君達を逮捕する為に来たのではない。君が言つてているのは……君が作った偽りだろ？」

警察官の言葉に【ジョナス】の考えが180度変わった。正直に言つても信用されない事を十分にわかつていたのに、この警察官は【ジョナス】の真実を少なからず理解していた。

「現場に二人の死体の血と君の血……もう一つ別の血があつたんだ。それから数時間後、現場から数キロ離れた空港近くで【段ボールを山積みに積んだトラック】が見つかったんだ……」

「それが……何か関係もあるのか？」

警察官は大きく息を吐くと続けて答えた。

「誰も乗つていなかつた。それだけだと何も不自然じやない、だが・
・・そのトラックの前方には大量の血が付着していたんだ。これは
間違いなく殺人事件・・・」

【ジョナス】はある事を思い出した。あの時、男は屋上から飛び下
りて段ボールをクッシュション替わりにして去つて行つたのだ。

「もしかして・・男が運転手を殺したのか?」

すると警察官の表情が変わつた。一瞬にして雰囲気が変り、【ジョ
ナス】はハッと息を飲んだ。余計な事を言つてしまつたに違わない
……そう【ジョナス】は悟つた。

「やはり・・我々警察は君達が犯人だと思っていた。俺以外だが
な・・しかしこれで俺が君達への疑問点の少しあは解消されたよ・・

「え・・・なんで・・」

その時、遠くから一発の発砲音が聞えた。その音に逸早く反応した
警察官は扉を開けた。

「まあか・・【アスワード】か?何故発砲した?誰に発砲したのだ・・・」

「なんだよ・・今の発砲音は?」

続け様に2発の発砲音が聞こえた時、警察官は【ジョナス】の乗る車の前方を走つて行つた。

「おい待てよ!まだ聞きたい事が・・・」

警察官は既に街の路地の中に入つて行つた。【ジョナス】の叫び声だけが、空しく車内に広がつた。

ウ&カボシ・ードウードールの3（後書き）

先日、仮免合格しました！やた（^〇^）

次の日には、路上運転があらました。怖かった……

皆ビュンビュンと通過するし、年寄がいきなり車道に侵入して来る
し、右左折がとてもシビヤだし……

怖かった……（トロト）

話は変わって今回からスタンド募集、締め切らせていただきます。
募集数一個…………

まあ、別に良いです。既に何個か考えていましたし、今の数だけで
十分です。有り難うござりますm（ーー）m

今回の話で悪い点、誤字や何かがありましたら連絡お願いします。
感想を送ると作者【海堂】は物凄く嬉しくなり更新が早くなる
かもしれません（^〇^）／＼

はあ・・・ガツキ 可愛いな。環境番組に出でましたけど、何か神
々しい……もつ映像とマッチしててよかったです！

話がずれましたね（ーーーー）

それではこれからも応援宜しくお願ひしますー海堂でした（^〇^）

/

わ& サ ニ お · · デ カ ー デ ー ル の 4 (前書き)

やっと試験が終わりました!これからも頑張って更新していきたい
ので応援宜しくお願いします=(_ _)=

ウ&ガボット・ドゥードールその4

警察車のランプが回転し光っていた。三車線道路を封鎖し、車の影から警察官が銃を構えて数百メートル先の一台の車を睨み付けていた。

その警察車の一台で一人の男が後部座席に座り目を閉じていた。長い年月を重ねた皺が顔に走り、年季の入ったコートを来ていて。運転席には若い警察官が座り、無線機を持ち今か今かと仲間からの連絡を待っていた。

「・・・奴からの連絡はまだなのか?」

「いえ、まだです。貴方様が来る数分前には【作戦を開始する】と連絡がありましたが・・・それつきりです。」

「そうか・・・」

再び男は目を閉じた。運転席に座る若い警察官は緊張し、手の平に汗を滲ませていた。

「君、そんなに手の平に汗を滲ませてどうしたのだ?」

「え・・・どうして・・・」

「私にはわかるのだよ・・・無線機の影でわからないが、私にはわかるのだよ。」

「はあ・・・」

若い警察官は疑問に思いながらも滲み出る汗をズボンで拭いた。

「君が疑問に思うのもわかる・・・【君達】には【アレ】を見る事も触れる事も出来ないのだからな・・・」

何故、男は若い警察官が緊張しているのか、疑問に思つてゐる事がわかるのか、今集まつてゐる警察官は誰もわからない。しかし、一つの事は皆わかつっていた。容疑者の車に近付いていつた二人の警察官と今この車に乗る男は違うようで同じだった。

私は今、境地に立たされていた。此所から約百メートル先には何台ものパートカーが車道を塞ぎ私達を完全に包囲していた。私は選択しなければならない。【降伏】か【戦う】か……

しかし、今は別の事を考えなければならない。【降伏】か【戦う】かの前にこの【状態】を開けなければならない。

「なあ？お前ら・・俺の言つた通りだろ？」

何が起こつたのかわからない。私は私なりの作戦でこの警察官を倒そうとしたのに、私の体が急に自由が効かなくなり私の意識とは関係なく勝手にあの路地に戻つて行つたのだ。

今、目の前にはあの警察官と一人の警察官が私に銃を突き付けている。自由が効かないのは体全てだった。声を出し【合図】さえも出来ずに、私は警察官達を這い付くばかりのように伏せて睨み付けていた。

「此所で一つお前らに問題だ。この犬に【罪】はあるか？」

警察官は私に銃を突き付けたまま後ろにいる一人の警察官に質問をした。二人はお互いを見て【言つてはいる意味がわからない】と言いつた。その表情を浮かべた。

「答えは【Y e s】。誰であれこの【アスワード】を侮辱した生き物は罰せなければならぬ」・・・

警察官【アスワード】はもう一度私を見下ろすと、撃鉄を降ろした。“カチッ”とロックされた音を聞いた私は嫌な考えを過ぎらせた。後方にいる一人の警察官も気付いたのか【アスワード】を止めようとした寧な言葉を発していた。

しかし、この【アスワード】は犬の姿をしている私を撃つだろう。この男は恐ろしくプライドの高い傲慢な性格の持ち主なのだと思った。「やめて下さい先輩！イカれてます！」

「イカれてるだと？俺は・・・本気だ！」

大きな音がした。その直後、私の右後ろ足から激痛が走った。どうやら私は撃たれたらしい。後ろで【アスワード】の【異常な行動】を止めようとした警察官が、【アスワード】の左肩に触れたお陰で致命傷にならなくて済んだが、この状況はどうも【ヤバかった】。このままでは、私は何も出来ずに死んでしまう……

「お前ら何故邪魔をした？」いつは殺人者だぞ！

「何を言つてゐるのですか先輩！」

「貴方はいつもそうだ！貴方の我儘な行動のせいで何人の仲間が死んだのかわかつてゐるのですか！」

「なんだと？お前ら一人は俺の【コネ】で夢だつた警察官になれたんだろうが！恩を仇で返す氣か！」

「あんた何かに着いて行かなれば良かつたんだ！【ロウ 先輩】の方が冷静で優しく正義感に溢れる人が俺達の中で【憧れる警察官】だつたんだ！」

三人の警察官は言い争つていた。もしかしたらこれが最後のチャンスなのかもしれない。私は体を左右に振つた。

しかし、微動だにしなかつた。力は入るのに一步も動けないのだ。
だが、一つはわかつた。

【アスワード】の右足首から人形が顔を出していた。頭が赤く、覗き込むように私を見ていたのだ。

アレが【スタンド】だと確信した。その人形が右側に向きを変えると私の頭も同じように右を向いたのだ。そして、能力の謎も大体わかつた。人形の頭部に着いていたのは私の血だ。あの時、車の中から見た【アスワード】の行動もこれで理解出来た。あの赤い液体は【主人の血】、主人の血をあの建物からかき集めたのだろう。

能力は【人形で他人を操る。】

ならもう一人の警察官も【スタンド使い】なのだろうか。それなら危ない！主人は怪我をしているし、何よりその警察官が【スタンド使い】なのか【どんな能力】なのか、もしかしたら既に【逮捕】されているかもしれない……

「おつと、忘れてたぜ。」

再び撃鉄を起こす音が私の上から聞えた。その音に私は一瞬体を震わせて焦った。

「あんたはああ！何をしているんだああ！」

一人の警察官の声が聞こえたのと同時に“ドオオ！”と銃撃音が辺りに響いた。私の体から痛みが走らなかつた。

その代わり上から何かが私に覆い被さり、辺りが真っ暗になつた。

「先輩……あんた……な、何をしたんだ。なんで……撃つたんだ！」

理解した。【アスワード】は私を撃とうとした時、私を庇った一人の警察官を撃つたのだ。誤つてなのか、わざとなのか知らないが【アスワード】は撃つたのだ。私の上に倒れた警察官はピクリともしなかつた。

「【アスワード】…お前何をしていいの…」

今度は別の人間の声が聞えた。誰なのかはわからない。私の目の前は暗く完全に口と鼻を押さえ込まれて私は【別な死に方】で苦しんでいた。

まるでスロー映像を見ているかのように奴は胸から血しづきを出しながら後ろから倒れていった。後ろにいたもう一人の後輩は、俺に何かを言っていたがそれさえも俺の耳には聞えてこなかつた。

全てがスローに、無音の世界だつた。

そして俺の心の中で崩れた。今まで気付いてきた【信頼】と【地位】が脆くも心の中で塵に化した。

しかし、同時に【解放感】と【達成感】が心の中で、何故か満ちていつた。

そして、俺は気付いた。

「【アスワード】ーお前何をしていいー。」

それは聞き覚えがある声だつた。振り向くと【ロウ先輩】が息を荒くして【アスワード先輩】を睨み付けていた。

「もう一度言つ。【アスワード】ーーお前は誰を撃つたんだー！」

皮肉なものだつた。【アスワード先輩】の警察官としてやつてはいけない事をしてしまい、【ロウ先輩】が報告しなければならないなんて……

「気付いたんだーーー【ロウ先輩】。俺ーーこの仕事が向いていかつたらしいーーー！」

【アスワード先輩】は銃を下ろしポケットの中に入れると遠くを見つめていた。【ロウ先輩】は意氣消沈の【アスワード先輩】に近付くと肩に手を置いた。多分、励ましの言葉か何かを【アスワード先輩】に言つと私は思つた。

しかし【ロウ先輩】が肩に触れようとした瞬間、【アスワード先輩】が【ロウ先輩】の方を振り返つた。そして笑つっていたのだ。

「だけど心配しないで下さいよ先輩！俺やつとわかったんですー！」

私も【ロウ先輩】も何を言つてゐるのかわからなかつた。

その瞬間、“ドオオン”と音が響いた。

「俺はこいつらと同じなんだ・・・俺は【殺人者】としての才能があつたんだ。」

何が起きたのかわからなかつた。しかし、【アスワード先輩】はやつてしまつたのだ。その場に膝を着いた【ロウ先輩】の前には、ポケットの中から引き金を引いた【アスワード先輩】が私を見て笑つていたのだ。

「人を殺すのがこんなにも良いものだなんて気付かなかつた・・・。」

「あんたは・・・何をしゃがつたんだああ！」

私は何も考えずに持つていた銃を構えて撃つた。しかし、弾かれた弾は【アスワード】をかすめるだけで当たらない。

「・・・オイードウシタ！ 何力 起キタノカ？」

「いいええ何も・・・只の【威嚇射撃】ですよ。今、ちょっとした問題が起きまして・・・はい・・・」

私は全ての弾を撃ち尽くしてしまった。【アスワード】は無線機から来る連絡に答えながら、私に近付いてきた。そして、死んだ【ロウ先輩】の懷から銃を奪い取った。

「私の部下が【奴等】の【仲間】だつたんです……はい、【ロウ先輩】は……あの人は【偉大】でした。応援ですか？大丈夫です……後は俺が……俺がやります……」

「あんたが……裏切つたんだろうが！」

「いやー…違つね！」

【アスワード】は私の額に標準を合せた。私は震える手で引き金を【アスワード】に向けて引いたが、既に弾はなかった。

「手に汗を滲ませて、しかも動搖したお前では銃は只のガラクタ。そしてこれで終わりだ！」

私は一步も動けなかつた。警察官として情けない位、恐怖は私を襲つていた。私は死ぬ。そう悟つた。

しかし、一向に【アスワド】は引き金を引こうとしなかった。只一点を見つめて、しかも急に額から汗を流し始めた。

「心臓に・・・一発で当たったんだ・・あの距離で死んでいないのがおかしいんだ！これは幻覚！幻覚なんだ！」

【アスワド】は思い切り引き金を引いた。“バーン！”と破裂音と共に、銃が破裂した。

何が起きたのかわからなかつた。【アスワド】の右手は数本の指が吹き飛び血が大量に飛び散り、【アスワド】は泣きわめいていた。

これは、【アスワド】を取り押さえるチャンスだつた。しかし、私は動けなかつた。何故ならとても信じがたい事が目の前に起きていたのだ。

「ハア・・ハア・・な、なんで生きてんだよー」

「知りたいか？そんなに知りたいならお前自身に叩き込んでやるよ。

」

【ロウ先輩】は生きていた。胸には撃たれた跡が残っていたが、血が殆ど残つていなかつた。そして、先輩は怒つていた。

「【アスワード】……お前を逮捕するー。」

「ハアー…やれるものならやつてみるよー。」

「わうか・・・なら仕方がない・・・」

そこで【ロウ先輩】は止った。私は未だに信じられない現実を無理矢理理解すると、負傷している【アスワード】を取り押さえようと一步踏み出した。

「君はそれ以上近付くな!」

しかし先輩は、私を怒鳴った。何故そんな事を言つのか私はわからなかつた。

「いいかそれ以上近付くんじゃない。君には太刀打ち出来ない・・・

「

「いや、もう遅いねー!」

その瞬間、私の意識は遠のいた。そして真っ暗な世界に落ちて行った。

ウ&ガボット・ードウードールその6

後輩がゆっくりと倒れる姿を、俺は只見る事しかできなかつた。

後輩の脳天を貫いたのは、アスワドが持つていた人形【ウードール】。

そして、後輩を踏み台にし【ウードール】が飛び上がると、手のような橢円形の手を俺に向けてきた。俺は反射的に左手の甲から一枚のシールを【ウードール】に向けて投げた。

その瞬間、星模様のシールから筋肉質の黄色い人型が現れた。

その人型【ルースター】は急降下し、俺を攻撃するであろう【ウードール】に、固く握り締めた拳を放つた。“メキメキ”と軋む音と共に、アスワド諸共後ろに吹き飛んでいった。体を地面に擦る音が痛々しく俺の耳に響いたが、それすら俺にはこれから始まる【裁き】の開始音にしか聞こえなかつた。

「いつ・・つ・・先輩本気で殴りましたね！腕が痛・・ヒビが入つたかもあ・・・」

“どうやら【ウードール】は腕で【ルースター】の拳を防御

したようだ。フラフラと立ち上がったアスワードの口元からは血が滲み出でていて、指を動かす度に顔を歪ませていた。

「アスワード……俺はお前を許せない！」

「やめと」アスワードは一ヤコと座じて笑つた。

「やう」なくちゅー先輩……俺にもう一度あの【気持ち】を感じれさせてくださいよー！」

痛みを堪え、アスワードは俺を指差した。その指先には【ウ”ドウ”ードール】が爪先立ちて立ち、俺も一枚のシールを剥し構えた。

その時、不意に周りが犬の遠吠えで騒がしくなつた。

「野良犬共もこの戦いを歓迎していますよ、先輩……」

「違うな。これはこれから始まる……【裁きの歓迎】だ……お前の裁ぐためのな。」

「おや？ 先輩にしては意外な言葉ですね……【誰】が【誰】を裁くんですか？ ……もしかして【先輩】が【俺】を……ですか？」

「何・・・

アスワードの言葉が俺の中で何かを止めた。俺は一体、【誰】を裁こうとしているのだ。もし、それが【俺】だったら……執行者が【俺】だったら、俺は出来ない。

何故なら、俺は警察官。悪を裁くのは【神】しかいないので。人間ではなく、裁判長でもない。裁きが行われるのは、罪人が死んだ後なのだ。

その瞬間、【ウ”ドゥードール】がアスワードの指先から飛び、俺に向かって来た。俺はほんの少しだけ反応が遅れたが……

「つ・・・う・・・

俺はシールを投げることが出来なかつた。シールを持つ右手が震え、汗がシールを伝い流れ落ちる。既に【ウ”ドゥードール】は俺の頭めがけて、腕を振り落とそうとしていた。

「精神的に弱いんだよ先輩！【ウ”ドゥードール】・・・その堅物の頭をかち割れええ！」

俺は【ウ” ドゥードール】の攻撃を左手で防御した。田の前で【ウ” ドゥードール】の全体像が完全に消えた瞬間、星模様のシールが盛り上がり血が流れ落ちた。左手の甲から激痛が走る中、アスワードの笑い声が聞えた。

「先輩の血に触れた！先輩にはもう自由はない！」

アスワードの言つ通り、俺の体は一步も動くことができなかつた。そして、【ウ” ドゥードール】の姿が甲から現れると、俺に橢円の手を向けた。

「最初からこれが狙いたかったのですよ先輩。偶然だと言つならそれでも良いですが・・・今のこの状況、既に偶然とはいえない【危機】、【最悪】の状況だと思えませんか？」

アスワードの声が、口がない【ウ” ドゥードール】から聞こえてきた。この状況、誰もが【最悪】と思える状況の中、俺はそんな気持ちになれなかつた。

「アスワード・・お前の言つ通り、俺は間違つていたかもしれない・・・」

「そうでしょうね。先輩が他人を裁く行為をするなんてね・・・だ

けど大丈夫。すぐに終わりますよ、一刺しで全てが終わりますよ。

「いや・・・それもそうだが、違うことなんだ。現在進行中でな？」

多分、アスワードは俺の言葉に眉を細めただろう。【まだ戦うのか?】などと思つて居るだろ?……

残念ながら、俺はもう戦えない。【ウ”ドウードール】の能力解除をしない限り、俺は一步も動けないのだ。

その瞬間、アスワードの悲鳴が聞えた。泣き叫ぶ声と動物の唸り声、左手で隠された目ではアスワードの姿を見る事は出来ないが、用意に想像がついた。アスワードに犬が、しかも数十体の犬がアスワードに噛み付き攻撃をしている。

「アスワードー能力を解除するんだ！出来なければ、お前は死ぬぞー！」

アスワードを死なせる訳にはいかなかつた。裁きは死後、決められると信じてきた俺にとつてなんとも【不自然】な事だが、何処かで俺は【人による裁き】を受けなければならないと思つてゐるようだつた。しかし、俺の言葉はアスワードの悲鳴にかき消されていった。

そして、田の前にいる【ウ”ドウードール】が消えるのと同時に、俺の体は自由になつた。血が滴る左手を退けて、アスワードを見ると

茶色く汚れた何十体もの犬が、俯せで倒れているアスワードに噛み付いていた。

俺は駆け寄り、犬を蹴りあげて追い払うと体中、無数の噛み跡が残るアスワードを抱き抱えた。顔には牙跡の穴が開き、血が路上に広がった。俺はアスワードの口に頬を近付けて吐息を感じようとしたが、既に息はなく脈もなかつた。

「アスワード・・・」

「いひしなければ貴方が死んでいました・・・」

不意に、背後から声が聞こえてきた。車に乗っていた青年とは違う声に、俺は後ろを振り返った。

「貴方はいい人・・・だから私は貴方を助けた。」

警察官の死体から、見覚えのある裸体の男が顔を覗かせていた。何故【裸体】なのは不明だが、この男もあの青年の仲間なのだろう

……

「アスワードにも・・・生きる権利があるんだ。そして・・・裁きは・・・

・

それ以上の言葉が見つからない。【裁きが何なのか】【誰が裁くのか】なんて今となつては、答えさえ見つからない。裸体の男は俺を見つめていたが、直ぐに視点を前方に戻すと苦笑をし俯いた。

「影から見ていました・・・貴方が車の中で俺に言つた言葉とか【裁き】とか・・・俺には全くわからないし、考えたことがなかつた。」

【裸体の男】の前方に、あの青年がいた。左肩を押さえ苦痛の表情を浮かべていたが、その瞳には何かを感じた。

「君達は・・・これからどうするんだ?俺は警察官だ・・・此所で君達を逮捕する事だつて出来る。だが、君達は・・・殺人をしてはいいない。」

「逮捕したければすればいい・・・それでも俺達は追わなくちゃいけないんだ。」

「せうか・・・興味で聞くが何故追うんだ?その男が何者なのか、何処に行つたのか、君達はわからないじゃないか・・・」

俺の言葉に、青年は深く深呼吸をすると俺にこいつ言った。

「がむしゃらに・・探しますよ。」

そう言つと青年は警察官の死体から服をはぎ取ると瞬く間に【別の服】に変えて、【裸体の男】に渡した。

「死体が着ていた服を着うと・・・」

「文句言つな。我慢して着る、スタンドを使つ度に【裸】になるお前が悪い・・」

この場に相応しくない雰囲気があの一人の中で漂っていた。俺も、この一人が殺人者ではない事はわかつていた。しかし、【がむしゃら】に探しても二人は本当の犯人を見つける事は出来ないだろう……

「さて、どうやって此所を突破しますか?」主人・・

「そうだな、どうするか・・・」

「君達・・・俺に考えがある。」

俺の言葉に一人は振り返った。そこで二人の名前が【ジョナス】【バステット】と知る事ができた。そして、俺も二人に俺の名前を教えた。実は男が何処に行つたのか、俺は【知っている】。一人だけでは犯人は見つからないだろうし、【殺人者】として一人が逮捕されるのが許せなかつた。

それに、俺は知りたい。車の中で言った言葉とアスワードと戦つて言った言葉が、俺は知つていたようで【知らなかつた】のだ。

二人に付いて行つてわかるのか、それもわからないが俺は知りたいのだ。

メモルの1（前書き）

regretter様、メッセージ有り難うござります！小説を読んでくれまして大変嬉しいです(*^__^*)

スタンダード募集の件なのですが、残念ながら終了しました。どうもすいません！m(—_—)m
しかし、どうしても使って欲しいスタンダードがありましたら考え方をさせていただきます……なにわともあれ、感想を下さいまして有り難うございます！m(—_—)m

さて、話は変わりますが作者は只今、密かに【ある計画】を進行中です。ですが、期待しないで下さい(○・・)

この小説が【三十話】に達したら【公開】してみようと考えています。ですが、作者は【アレ】に関しての【システム】は既無に近いです……

続きは後書きへ

警察官達は慌ただしく動いていた。あれから三十分が経過し、全く連絡がなく皆【アスワドに何かが起きた!】と思い、强行突入を試みたところそこにあつたのは、一人の警察官の死体と無残な姿のアスワドの死体だった。

「どうなっているんだ! これはあ!」

一人の刑事の怒りが込められた叫びが響いた。

「何故アスワドが死んでいる・・・何があつた! 三十分前に何がつた・・・」

刑事はシートを被せた三つの死体が見下ろせる所で、腕を組み爪をかじつた。

「クソ・・・しかも逃げられたのか? これは失態以上の何者でもないじゃないか・・・」

「なあ・・・君、そんなに苛々したら眞実には到底近付けないぞ? もつと冷静になりなさい。」

不意に聞えた声に刑事の心に一瞬の苛つきが過ぎつた。まだ民間人

を解放していないのにもかかわらず、まだ危険な現場に無断で入つて来て更に口答えをした民間人に、刑事は爆発してしまいそうな感情を必死に押さえ、後ろを振り返つた。

しかし、直ぐにその感情は消え去り変わりに、極度の緊張が体を支配した。【何故この方が此所に来ているのか?】その疑問が刑事だけではなく、その【男】に気付いた全ての警察官が無意識の内に綺麗な敬礼をしていた。

「そんなに緊張したら最大限の能力を發揮できないではないか・・・必要なのは【心地よい緊張感】と【冷徹な程の冷静】だよ君・・・」

「はい!申し訳ございません!」

その男は敬礼したまま微動だにしない刑事の肩に手を置くと、笑みを浮かべ優しく【頑張りなさい。】と一言言つと、白い手袋を両手にはめた。

「皆聞いてくれ・・・今回の事件は警察の維新を懸けた大事件だ。マスコミに注意を払い、尚且慎重に捜査しなければならない・・・この【奇妙な事件】のな・・」

そつ言つと全員から返事が聞え、各々の現場捜査をし出した。そして、男は歩み寄り二つのシートを剥し、二人の警察官の死体を見た。

一人は制服の胸元に穴が開き、周辺には彼の物と思われる血が飛び散っていた。もう一人の警察官は銃弾の物ではない【何か】に頭に穴を開けられていた。

「彼は銃で死んだ・・だが彼は違う。銃弾ではない【何か】で頭に穴が開き、脳を搔き乱している・・そして、何故下着一枚しか着ていないので？」

次に男は少し離れた所にあるシートに歩み寄ると、剥した。

「アスワードは任務に失敗したか・・・だが【死に方】が奇妙だ。死因は【ショック死】・・銳い歯形が無数にあって牙を持つ動物、例えは【犬】とか・・・どうやら拳銃は破壊されているらしい・・・破片が飛び散り、まるで爆発したかのように・・」

【男】はアスワードの死体を見ただけで、【何で殺されたのか】を知る事が出来た。しかし、【男】の言葉には何處か不自然な点があった。まるで【知っている】かのようなその言葉には……

「【スキッド】がいない。犯人に連れ去られたのか・・・」

男は顎に生える髭を整えるように考えた。後ろでは、警察官達が【アスワードの死因は外部からによるショック死だ。】や【拳銃が破壊されている！】など、数々の情報が集まっていた。

「・・・いくらなんでも【なさすぎる】。最初の事件で犯人は、数々の証拠を空き家に残していった・・・だが、今回は全くと言つていい程、証拠がなさすぎる。あるとすれば車の中にある犬の毛ぐらいか・・・」

「【ミコミコール警視総監】・・・」

刑事は男【ミコミコール】に近寄ると緊張しながらも、【ミコミコール】に話し掛けた。

「車の中に・・・この様なものが・・・何か動物の毛のよつな・・・

「わかった。後は君達に任せよう・・・頑張るんだぞ。」

後の事を刑事に任せた【ミコミコール】は、足早に現場から出いでつた。【ミコミコール】が去った後、現場には安堵の溜め息と疑問が混じる声が飛び交った。

「警察庁に戻られますか？」

若い警察官は後部座席に座った【ミコモゴール】の方を振り返った。腕組みをし口を開じていたが、直ぐに開くと薄く笑った。

「戻つても真実は闇の中なのだよ・・・【キャンベラ国際空港】に行つてくれ。」

「え・・でも・・・」

「お願いだ・・じつしても確かめなければならなことがあるんだ。」

「

「・・・わかりました。【警視総監】のお願い事を断るのは・・出来ませんから。」

キーを回し、エンジンをかけると車は走り出した。車の中は一度よい温度を保ち、【ミコモール】は警察官に【有り難う】と一言言つと、窓から流れる景色を眺めた。

「【真実を見つけるため】か・・・だが、許さない。この私を侮辱し、警察のプライドを傷付ける行為だけは止めなくてはならない。」

【ミコニコール】は眉を細めた。しかし、そこには悲しそうに流れる風景を見つめる瞳があった。

暗くジメジメしたそこには、悪臭を放つ水が流れていった。懐中電灯を持つ【スキッド】を先頭に俺とバステットは口と鼻を押さえて歩いていた。

「まだなのか？」

「もう少しの辛抱だ。我慢しろジョナス・・・」

「いや、俺は我慢出来るが・・・」

この悪臭の中、俺は我慢することが出来た。しかし、バステットはそろそろ限界のようだった。スキッドが懐中電灯をバステットに向けると、青ざめた顔に眉間に皺を寄せて只一点のみ見ながら、ゆつ

くり付いて来ていた。

「だからか・・あいつだけ反対した理由がわかつたよ。だが、大丈夫・・今、着いた。」

スキッドが反対側の暗闇に懐中電灯を向けると、そこには壁に取り付けられた梯子があり、辿るとマンホールのような丸い形の蓋が取り付けられていた。

「昔・・この辺りに強盗集団が現れてな・・もう逮捕されたが、その集団は警察から【十年間】も見つかることもなく、盗み続けたんだ。何故か分るか?」

スキッドは懐中電灯を俺に託すと梯子を登り始めた。

「さあ・・・」

「その集団はこの下水道を拠点に活動していたんだ・・・複雑に入り組んだ下水道だが、覚えてしまえば何処でも出入りが出来る・・・」

「

スキッドは左手の甲からシールを三枚剥すと、マンホールの蓋に張り出した。

「なら、俺達がいる此所がその道なのか?」

「興味があつて調べてみてね・・・そしたら覚えてしまった。あ、それじゃやるか・・・」

すると、三枚の内の一枚から【口の字型】の突起物が現われた。その真ん中のシールからは【ルースタ】が現れ、突起物を掴むと外側に体ごと力を込めた。

“ガゴン”とマンホールが外れ、器用に体を逸らすと【ルースタ】はシールごと消えた。光がマンホールの隙間から漏れていた。

「もう四十年も前の話だ・・・風化し、忘れられた事件なんだ。」

「誰も覚えていないから・・・【侵入】出来るんだな?」

「やうやう事・・・」

光が漏れていたので、俺は懐中電灯の光を消した。梯子は冷たく錆びていたが俺は登り、全く喋らないバステットを見ると弱々しく片手で鼻を塞ぎ、登つて来ていた。

【鼻が良すぎるのも良い事じゃない】と思いながらも、既に登りきったスキッドを追うために俺も、最後の梯子に手を伸した。

「何故父さんが此所にいる！」

突然の叫び声はスキッドの声だった。俺は最後の梯子を掴んだまま
マンホールから顔を出した。

そこにいたのは、スキッドと対峙する皺が走る男性だった。そして、
その後ろには【アレ】がいた。

メモルのー（後書き）

ですから、皆様にお願いがあります。もし【公開】しましたら、【いつした方が見やすい】【アレがあればもっと良い】などの指摘を下さご。作者は少し知恵で頑張ります（^ ^）

感想、評価をどうぞお聞かせください。今後とも宜しくお願ひいたします。海棠でした（――）

メルカリの2（前編）

更新遅れました！

えりかみせんせー（ーー）m

突然現われた父に俺は動搖した。何故此所に父さんがいるのか、全くわからない。【警視総監】である父さんが、理由が合つて此所にいるわけ……

幾ら考えても理由がわからない。だが、此所で俺は初めて知った事がある。父の周りを回る銀色の浮遊物、プロペラが回り十字の凹に目のような丸が浮かぶその物体、二十数年も一緒に暮らしてきたのに全く存在すら知らなかつた。

「驚いたか？私がスタンンド使いだと言つ事に。」

「父さん・・何故此所に？」

時間は、待つてはくれない。早急に空港……【キャンベラ国際空港】に向かわなくてはならない。しかし、父さんの周りを回っていた銀色の【スタンド】が俺に突っ込んできた。

俺はシールの星模様から【ルースター】を発現させると拳を固め、激しい連打を浴びせた。

だが、その全てのパンチを銀色のスタンドは糸も簡単に避けると、俺の体を一周し頭上に上がつた。俺は見上げ、驚いた。ルースター

の連打は速い訳ではないが、あの数を全て避けるなんて……

「時間がないようだな、焦っているぞ？飛行機か・・・飛行機に乗るつもりだな？」

「なーなんで・・・」

俺は一言も喋つてはいない。【心】の中で思つていただけなのに、何故父は知つているのか、まるで【心】を読まれている【ゆうな感覚】がした。

「それだけじゃない・・・マンホールの中に後一人いるな？」

「・・・」

「スキッド、話をしよう。お前達と争つつもりはない。私のスタン

【トリー＝ティー】は戦闘タイプではないのではな・・・」

「・・・それを信じる・・・保証は何処にもないー！」

「だが、信じなければ時間だけが過ぎて行くぞ？・・・空港に行きたいのだろう？いや・・・もう遅いようだ。」

「

父は後ろを見るよう俺に催促した。俺はゆっくり振り向くと、既にジョナスとバステットが地上に出ていた。

「スキッド・・・助太刀する！」

そう言いジョナスの後ろに拳を固めたキング・ダイアモンドが現れ、父さんに向かって行った。

「止めるジョナス！父さんに攻撃しては行けない！」

「悪いが！スキッドの父親でも容赦はしない！【キング・ダイアモンド】」

「違ひ、そう言つ意味じゃ・・・」

その時、父さんのスタンド【トリー・ティー】がジョナスに目のような丸を向けた。その瞬間、キング・ダイアモンドの激しい連打が父さんの体に放たれたが、俺の予想どおり全ての攻撃を父さんは避け切った。

「単純な思考だな・・・誰よりも読めやすいぞジョナス君！」

「黙れ！俺達は行かなくちゃならないんだよー！」

俺の考えていた通りだった。父さんは最小限の体の動きで、キング・ダイアモンドの拳を避けていた。そして、横顔に放たれた拳を体制を低くし避けると、父さんの拳がジョナスを捕らえた。

「がはっ！・・・」

ジョナスはよろけ、後ろに後退った。

父さんの横顔を捕らえた拳が避けられた時、キング・ダイアモンドは父さんの腹部目掛けて拳を放つたが、父さんは体制を低くしたおかげで避ける事が出来た。【運がよかつた】、ヒジョナスは思っていたかもしれない。

「ちつ・・・次は外さない！」

「聞けジョナス！父さんに攻撃するな・・・

「言つてるだろー！お前の親父でも邪魔する奴は・・・

「無駄なんだ！【読み取られぞ】！」

そこでジョナスの動きは止つた。父は意外そうにジョナスから俺へと目線を移すと、頬を搔いた。

「隠し通す事は出来ん物だなスキッド・・・気付いたんだな、トリニティーの能力に？」

「ああ・・・だから父さんは【警視総監】にまで登り詰めたんだな。ジョナス・・・下がれ、これ以上は無駄だ。」

「つ・・・わかった。」

「大丈夫だジョナス君・・・君達には危害は加えない。」

父さんには余裕があつた。只、俺達を足止めすればいいだけなのだから・・・だが、俺達は一刻も早く空港に向かわなければならない。数百メートル先には【キャンベラ国際空港】が見える。後、少しなのだ。

「スキッド・・・どうゆう事なんだ？」

「ジョナス、父さんのスタンド能力は・・・【思考解読】だ。どんな行動でも俺達、人は無意識の内に【考えて】行動するんだ・・・

先程、俺は言葉に出してこないのに父さん【空港に行く事】を読まれた・・・「

「それじゃ・・・攻撃なんて効かないじゃないか！」

「・・・」

この後、何をすればいいのかわからなかつた。今、この間にも父さんのスタンド【トヨーニティイー】は俺を直視し情報を父さんに流している。

初心に戻ろつ・・・

何故、此所に父さんがいるのか聞き出すしかない。

「何故・・・此所にいるんだ父さん。もつ答えはあるんだろう？俺の心を読めば・・・」

「ああ・・・私はお前を【アメリカ】に行かせない為に此所に来た。私を侮辱するのは許さない・・・」

侮辱・・・

俺が何時父さんを侮辱したのかわからない。俺は、正しい事をしている。ジョナスとバステットは無罪なのに【殺人者】とするのが、【侮辱】と言つんじゃないのか？

その瞬間、父さんは眉を顰めた。

「オーストラリアの人々の信頼を侮辱し、信頼を失うのは何としても避けたい・・・ジョナス君とバステット君には危害は加えない。空港に行きこのまま【アメリカ】に行つても構わない・・・だが、スキッド・・・お前は行つてはいけない！お前は間違つている！」

「この二人は【無実】なんだ！俺は俺自身の意識で行くから、父さんには関係ない！」

「何度も言わせるんじゃない！馬鹿息子が・・・一人の男を追う為にお前が行く必要が何処にある！」

駄目だ・・・時間の無駄だ。この間にも時間が過ぎて行く。

「さあ、選ぶのだスキッド！オーストラリアに残るか・・・だが、もし行くと言つならば・・・」「

おもむろに、父さんは懐をまさぐると携帯電話を取り、耳にあてた。

「現場にいる刑事に通報して三人を逮捕する…嘘ではない…本気だ！」

状況は先程よりも悪化してしまった。二つの選択……

今にもスイッチを押しそうな父さんの表情は既に父さんではない。仕事の顔をしていた。

何処からか、飛行機の爆音が聞こえてきた。此所からそう遠くない所に【キャンベラ国際空港】があり、俺達の頭上を飛行機がいつもより低く飛んで行った。その飛行機を、父さんは見上げ呟いた。

「そりそり・・か・・

父さんも、もしかしたら同じ事を考へていたかもしれない。あと四十分後には次の便、【アトランタ行き】の飛行機が離陸する。

急がないといけない。しかし、目の前には、人の心を読み取るスタンダード【トリニティ】を持つ俺の父さん。

俺は一人に目線を移した。

「俺は・・・此所までのようだ。一人だけでも空港に行くんだ

「な、何を言つてゐんですか！此所まで来たのに・・・

俺の言葉に、逸早く反応したのはバストケットだった。驚愕といつて言葉がよく似合つのように瞳を覗かせて、俺を見つめていた。

「話し合いなさい、スキッズ・・お前の気持ちをきりこと伝えなくては、一向に前に進まないぞ?」

俺は父さんに目線を移すと睨み付けた。俺は心の中で父さんを罵倒するとい、父さんは表情を変えず、耳元から携帯を放し腕を組んだ。

「そんなこと言つなよスキッズ・・俺達、仲間だろ?」

「ジョナス・・わかつてくれ。はつきり言つてこの状況で、父さんに勝てる筈ないんだ。時間が・・・なさすぎる!お前達だけでも・・空港に行くんだ!俺は・・とても短いが此所でお別れだ・・」

「罷です!絶対にこれは罷です、スキッズさん・・・貴方の父さんは既に連絡しているかもしねー!」

「なら既に俺達は囮まれている・・・やつ至上空戦シールを投げたが、この周りに警察官はないなかつた」

「なり・・・お前の親父を倒して早く空港こ・・・」

「何度言えばわかる!俺はお前達の為に言つているんだ、俺がいくつも・・お前達でならやれるだろ?」

しかし、ジョナスは諦めていなかつた。両手で俺の襟を掴むと俺に【一緒にこう!】と言つた。まるで駄々をこねる子供のように、大声を出して揺らした。

そこで、俺の中で何かが【切れた】。俺は右手でジョナスの頬を平手打ちし、その衝撃で耳に付けた【ダイヤのピアス】が弾け飛んだ。同時にピアスの穴が裂け、微量の血が飛び散つた。倒れるようにして後ろに座り込んだジョナスは、頬を押さえ目を丸くした。

「『主人・・行きましょつ。此所でお別れです』

バステットは、ジョナスの【親】のように語りかけた。ジョナスは只、呆然と俺を見上げて來たが、顔を歪ませ、悔しそうに立ち上がつた。

「わかつたよ・・・此所でお別れだスキッド・・・

「早く行くんだ。時間がない・・・

本当は、俺も行つてやりたかった。もし男の背後に何らかの【悪】があつたら、一人で乗り越える事が出来るのか?

そんな不安が俺の中で、波紋になり広がつた。走り出した二人の遠

のいて行く姿を見つめながら、今まで黙っていた父さんが口を開いた。

「お前さえ戻ればいいんだ。ジョナス君とバステット君が【アトラント】に行こうが、我々警察は一人を追わないと約束しよう・・・

俺は足早に父さんの元に近付くと胸元を掴んだ。

「俺の・・・心を読むんじゃない！」

俺は父さんを睨みつけた。俺の思いを父さんは、どうとらえたかはわからない。眉を細め、見下ろすその態度に俺は行き場のない怒りを唯々、噛み締めるだけだった。

「帰るぞスキッド・・・

「・・・」

俺は無言のまま、父さんを突き放した。数歩下がり父さんは溜め息を吐くと、崩れた襟を直した。その行動に、俺の怒りは更に煮えたぎった。

「最低だ！一人の人間を守りうとしないなんて・・・それでも警察

官か！

「私は【警視総監】だ。市民を守ること同時で、警察官同士にも田
を向けなくてはならない、警察の信頼を失つては、守る者も守れな
いだろうが・・・」の話はもう忘れる

俺は歯を噛み締めた。未だに眉間に皺を寄せ、父さんを睨み付ける。

それしか俺には出来なかつた。

「直ぐそこ元車を止めてある。私の前を歩くんだスキッド・・・

そう言い、父さんは茂みに隠れてある道を指差した。右手には携帯
電話を持ち、【もし逃げたら空港に連絡する】と暗示させるよつ
てひやの手紙をせんじらついた。

どう足搔いても、俺は一人に付いて行く事が出来ない。出来ればこ
の先、一人に危険が振りかかるないように願うしかなかった。スタ
ンド使いとスタンド使いは惹かれ合うから……

「お急ぎください。間もなく、アトランタ行の飛行機が離陸体制に入られます。」

受付の女性にチケットを渡したジョナスとバステットは、足早に搭乗口に向かい、指定された席に一人は座った。

周りには子供連れの親子が、楽しそうに思い出を語り、笑顔がこぼれていた。黒いスーツ姿の男性はイヤホンを耳に付け、目を閉じていた。乗客は少く、その中にいるジョナスは窓から見える滑走路を眺めていた。

「（）主人は飛行機に乗るのは初めてですか？」

隣りに座るバステットがジョナスに話し掛けた。瞳だけをバステットに向けたジョナスは、また外を眺めた。

「・・・初めてだ」

「私もですよ。何かワクワクしますねえ・・・物凄くドキドキして

ますよ」

「そうだな」

バステットは妙にテンションが高かつた。周りをキヨロキヨロと見るバステットの好奇心とは裏腹に、ジョナスは黙つていた。

「あ、ご主人見てくださいよ・・・前に座つてるあの女性。大きいサングラス付けてるけど、あの人テレビで見たことある・・・スゲー・・・女優も飛行機に乗るんですね！」

「バステット・・・一ついいか？」

「はい？」

興奮気味のバステットはジョナスの方を振り向くと、ジョナスは自分の目の前に右手を翳していた。軽く指を動かし、角度を変えながら動かし、気分でも悪いのか顔を青ざめながらバステットに呴いた。

「変なんだ・・・体調が悪い訳でもないけど、何かが変なんだ。まるで自分が自分じゃないような・・・そんな感じ」

「『主人・・・多分、疲れているんですよ。この所、眠れないとか言つてしまたし・・・それに、あんな事があつたから・・・』

バステットも急にテンションを下げた。仲間は多い方がいい。しかし、その人には個人で動く事が出来なかつた。只、それだけなのだと強く心の中で思つてゐた。

思わないと、私達は先へと進めない。進まないといけなかつたのだ。

「・・・悪いけど少し眠るよ」

そう言い、ジョナスはバステットに背を向けた。

バステットは知らなかつた。ジョナスの体に起きた【異変】に。片方だけになつてしまつたダイヤのピアスは、寂しそうに太陽に反射し輝いていた。

父と子の3（後書き）

オーストラリア編が終わりました！次からは、いよいよ新天地の【アメリカ合衆国】！！

ジョナスとバステットの旅の行方！

ジョナスの体に起きた異変とは！

謎の男の正体とは！

そして！気付いてる人は気付いてるけど、キーワードにかかれていた【オーパーツ】とは！

次回をお楽しみ期待！！！

と、いきたいけど・・・

作者である海棠せとんでもない事をしていた！

此所までの話、私は一切【設定】を考えてこませんでした（一）

所々、矛盾した事が起きているかも知れない・・・

読者の皆さん、本当に申し訳ございません。次回はきちんと設定を考えます！

スタンド紹介

スタンド名：ルースター

スタンド本体：スキッド・ロウ

パラメーター

破壊力：B

スピード：A

持続性：A

精密動作性：C

射程距離：C

成長性：D

能力

三時間前の【過去】エネルギーを吸収する。例えば、ナイフ等で切られた傷にシールを張ると傷は消えて、そのシールを別の物に張り

付けると、その場所に同じ傷を与える事が出来る。これを利用し、傷を癒したり、三時間前に起きたエネルギーを相手に与える事も出来る。

また、吸収したエネルギーは無くならず、何時でも使う事が出来る。

スタンダード・ウードウードール

スタンダード本体・アスワード

パラメーター

破壊力：C

スピード：B

持続性：A

精密動作性：C

射程距離：A

成長性：E

能力

相手を意のままに操る事が出来る。それには、他者の血液が必要で
ウードウードール人形のどの部位に塗ったかで、操れる所が違う。

スタンダード名：ヘブン・アンド・ヘル

スタンダード本体：？？？

パラメーター

破壊力：A

スピード：A

持続性：C

精密動作性：C

射程距離：E

成長性：A

能力

人の感情を操る能力。元から思っている気持ちはもちろんの事、奥深く存在する、無意識の内に押さえている欲望さえ操る。しかし、一能力に一人しか操れないし、本体も他者に集中しなければ直ぐに能力は解除してしまう。

とても扱いにくいスタンドである。

交差するアトランタ

アトランタはアメリカ合衆国ジョージア州の州都であり、北米南部を代表する世界都市である。CNNや「カ・コーラ」といった大企業が多く本社を置いており、世界でもっとも利用客が多い空港【ハーツフィールド・ジャーンクソン・アトランタ国際空港】がある。しかし、アトランタはデトロイトやセントルイスと並ぶ全米でも有数の【犯罪都市】である。

今現在、アトランタは【全米ワースト七位】だ。

バステットは気掛かりだった。

アトランタに着き、難なくホテルを見つけチェックインし拠点としたが、そこからどの様に動けばいいのかまるでわかつてはいなかつた。何故なら、スキッドが教えてくれた手掛けりは【男がアトランタに向つた】、たつたこれだけなのだ。男があの時間帯に空港にい

たのを、スキッドが空港の管理者に聞いて確かめた。その時間、飛行機は【アトランタ行き】しかなかつた。

しかし、バステットはもう一つ気掛かりな事があつた。

ホテルに着いてから、ジョナスは毎日を部屋に置かれている椅子に腰掛け、アトランタの町並みを眺めていた。何をする訳でもなく、放心したように虚ろな表情を浮かべていた。その中でも、バステットは一人で男に関する情報を集めていた。男の姿など曖昧で誰に聞いても知る人がいないのにもかかわらず、バステットは懸命に情報を得ようとした。

だが、幾ら努力しても結果は得られないまま、ホテルに帰る日々だけが、バステットの日常になつていた。そして、ジョナスもまた毎日を、部屋の中で椅子に座り外を眺めるだけだつた。

だから、この状況は【当たり前】なのだ。当たり前すぎて、日頃ジョナスとは【喧嘩】をしないバステットにとって心中には【罪悪感】で満たされていた。

その日、バステットは今まで溜まりに溜まつていたストレスをジョナスにぶつけてしまつた。

悪いのは誰でもない、ジョナスの体調が悪いのは目に見えてわかっていた事なのに、何故、一方的に喧嘩をしたのか。バステットはわからなかつた。買って来た昼食をジョナスに投げ付けてそのままホテルを出て来たはいいが、情報収集をする気も起きなく、今現在、

既に見慣れたアトランタの町並みを眺めていた。

「そう言えば・・・昼食、取つてないや

あれから數十分経過し、バステットの腹の虫が唸りをあげた。辺りを見ると、近くにカフェテリアがあつた。

「たまには・・・一人で食べるのも悪くないか

バステットは小走りにカフェテリアに立寄ると、注文を済ませて、一番端のテラス席に座つた。ほぼ満員で周りには同じように昼食を取り初めている人々がいるが、どれもバステットとは楽しそうだった。

その風景を横目に、バステットは物思いにふけつていった。色々な思ひが、頭の中で渦を巻き、その中で最も大きな渦は【ジョナスの異変】だった。

今思えば、飛行機に乗つてからジョナスはとても静かだつた。子供のようにはしゃいでいたバステットとは正反対に静か過ぎていた。病気か何かだろうか、それとも肉体的ではなく【精神的】に病んでしまつたのか、様々な目測が巡つては消えていった。

そして、何故体調が悪い事を【私に言わない】のか、それも気掛か

りでもあった。

「私は・・信用されていないのか・・・それとも話してもしょうがないとも思つていいのか?」

バステットは戸惑つていた。短い付き合いだが、これまでずっとジヨナスの隣りに立つっていたのだ。未だに背中さえ見えない男を探すために、今日まで頑張つて来たのにもかかわらず……

バステットは溜め息を吐いた。空を眺めると薄暗い雲に、とぎれときれの青空が点々としていた。

「相席・・・いいですか?」

不意に隣りから女性の声が聞えた。そこには、茶色のツイードにプリーツスカーフ、灰色のブーツを履いた女性がバステットを見下ろしていた。かなりの美人で大きな瞳は青く潤み、ツクリと膨らんだ唇からは色氣さえ感じられた。目付きは鋭く、怒っているかのように見えるが、そこさえも女性の魅力を引き出していた。

「・・・いいですよ」

しかし、バステットは無関心なのか、女性を一瞬だけ見て直ぐに空を見つめた。女性は一言御礼を言つと、バステットと向かい合ひ位

置に座り、黒く、大きなバックを地面に降ろした。重く、鈍い音が振動となりバステットの足裏に伝わると同時に、バステットが頬んだクロワッサンとブリオッシュが運ばれた。

「ついでに私もいいかしら？・・・カプチーノを二つ

「二つ？」

「御礼よ。クロワッサンとブリオッシュには、カプチーノがよく合うのよ」

そう言い、女性は軽くワインクをした。

「・・・有り難うござります」

「いいのよ。私はライザ、貴方は？」

「・・・バステットです」

バステットは自分の名を叫うと、クロワッサンを一口齧った。程よい甘さが口の中に広がり、暖かみのある味に今度はカプチーノを飲んだ。

ライザの言つとおり、クロワッサンとの相性は抜群だつた。バステットは驚き、今度はブリオッシュとカプチーノを交互に食した。

「どう？ 貴方の口に合つかしら？」

「はい・・・とってもおいしいです。此所まで合つなんて驚きです」

「よかつた・・・食事くらい楽しくしないとね？」

ライザは嬉しそうに笑みを浮かべ、カプチーノを一口飲んだ。水滴がカップを伝い、テーブルに落ちた。

「何故そんなに落ち込んでいるの？」

それは突然だつた。先程とは打つて変わり真撃なまなざしが、バステットを捕らえた。

「相談ならのるわよ？」

「そんな・・・見ず知らずの貴方に・・」

「そんなの関係ない。困っている人がいれば助ける・・・当たり前でしょ」

そう言い、ライザはカップを置いた。バステットは顔を歪ませ、俯いた。

「言えません・・・ライザさんの」好意は嬉しいです。ですが、これは【私達】の問題ですから・・・」

「そう・・・貴方がそうしたいのなら、無理にとは言わない。只、一つだけ言っておきたいの・・・【出会い】を大切に・・・」

「出会いを?」

すると、ライザはカップの中のカプチーノを一気に飲み干した。そしてポケットをまさぐると一枚のドル札をテーブルの上に置いた。

「貴方の分、食事代も含めて奢るわ。それじゃ、頑張ってね」

そう言い、ライザはバックを持ち、立ち上がった。

「待つてください！何故・・・私にそんな事を？」

立ち上がったライザに、バステットは既に食事をする事を忘れていた。カップの外側に付着する水滴はテーブルに溜まっていき、ゆっくりと広がつていった。

「何故・・・そんな事を聞いたのですか？出会いを大切にして・・・
その続きは？」

「そのままの意味よ。貴方がどんな悩みを抱いているかなんてわからぬ・・・だけど、貴方は一人じゃない」

そう言い、ライザは立ち去った。バステットが幾ら呼び止めても、ライザの後ろ姿だけが遠のいて行くだけだった。

交差点アーチランダ（後書き）

遅れた・・・

どうも・・・すみません（――）

言い訳はしません。ダメ！格好悪い！

これからも、頑張って行きますので宜しくお願ひします（――）

m

交差するアトランタその2

目の前には、空になつたカップが一つ。

「今日・・・変な人に合つたんですよ」

バステットは独り言のようにホテルの一室の中で呟いた。右手首を掴み、窓際にある椅子に座り、夜になつた町並みを眺めるジヨナス。既にその空間はジヨナスの特等席になつてしまつた。

先刻まで、あんなに入り難い部屋だつたのにも関わらず、入つてしまえば何ともなかつた。今はソファに座り、真つ白い壁を眺めていた。

「【出会い】を大切に】って言つてそのまま行つちゃつたんですよ・・具体的な事も言わずに・・でも、今思い返してみると那人、すごく綺麗な人でしたよ? あれが【高嶺の花】って言つんでしょうね!」

バステットは若干ニヤけていた。バステット自身、異性に対して心配されたのも、あれほど綺麗な女性を生まれて初めて見る事が出来たのだ。

「それにですね、あの人に教えてもらったんですよ。クロワッサンにはカプチーノがよく合うんです！後、ブリオッシュも・・・これが・・・【出会い】なんでしょうね・・・あの人人が教えたかったのは、この事なんじやないかな・・・」

そこでバステットは一呼吸置いた。これから、自分の言いたい事を伝えるためにジョナスの方を見た。窓ガラスに写る表情が伺われた。

「！」主人・・・私達の出会いってなんでしょう？」

不意に、ジョナスの表情が変わったようにも見えたが、バステットは続けて言った。

「私達がこれまでに出会った人々は・・・今、この時のための出会いなんですか？明日からも進んで、傷ついて、悲しんで・・・あの男を倒すための【布石】なんですか？」

ガラスの写るジョナスは、瞳を閉じた。俯き、微動だにしないジョナスに、バステットは近付き、しゃがんだ。

前後に動く胸は、心なしか震えているようにも見えた。

「あの男を見つけるために、私達はこれからも進まなくちゃ行けないのはわかっています・・・只、わからないんです。【出会い】を

犠牲にしてまで、あの男を見つけて……倒すんですか？」

「…………俺は……」

此所で初めて、バステットはジョナスが泣いている事に気付いた。小刻みに震える声に、開けられた瞳からは大粒の涙が流れた。

「もう……無理なんだ」

「え……」

「なんだ願つても……集中しても……【傷】付けても……出ないんだ。もう……戦えない」

「う、ご主人……貴方は……」

そこで、バステットはある事に気付いた。左手で押された右手首にある違和感を感じ、いきよいよぐジョナスの右手首を掴んだ。そして、袖を上げた。

手首には、何十にも包帯が巻かれていた。包帯は赤く滲み、赤く粘り氣のある液体が一滴、床に落ちた。

バステットは、何も喋る事が出来なかつた。ジョナスを見ると痛みからだらうか、顔を歪ませていた。

「それでも・・・出なかつたんだ。ごめんよ、バステット・・・もう俺達は・・・前に・・・進めない」

その瞬間ゆつくりと、ジョナスは力無く倒れた。鈍い音が響き、バステットは慌てた。

【先ずは病院へ！】

その事だけが、バステットがジョナスに出来る事だった。

今この場所に立ち、思ひ事は疑問しかない。

何故手首を切るといつ奇行に走つたのか。

そこまで追い込まれた理由は？

どうして私に相談しないのか！

あの時、手術を終えたご主人は青ざめていて、右手には真新しい包帯が巻かれていた。眠っているのか、【死んで】いるのかわからぬ表情に私は身震いをした。こんな弱々しいご主人を私は、一度も見たことがない。

だからだろうか、私は病院から逃げ出すように出て行き、今はホテルまでの道のりを歩いている。既に空は、徐々にではあるが青みがかっていて、朝がまじかに迫っていた。昼とは違う世界が広がり、誰一人としていない空間には、目覚めたばかりの小鳥のさえずりが聞こえた。

何故、私は此所にいるのだ？

『ご主人に付き添わないで、何が【飼い犬】だ！』

そんな事を考えながらも、私は一步一步踏み締めるように歩いていた。【飼い犬】失格だ、もしかしたら【仲間】としても失格なのかもしれない。ご主人の悩み事も聞いてもらえる資格さえない。

私は歩みを止めた。建物と建物の間、微かにだが遠く海が見え太陽の、儂い光が見えていた。

「私は・・・どうしたらしいのだろう」

幾ら考へても、答えが見つからない。何のために此所まで来たのか、それさえ理由が曖昧になりそうだった。

「・・・戻ろう。病院へ」

しかし、病院に行つたとしてもやれる事は殆どない。情報収集しても、有力な物は何一つなかつた。だが、動かなくては何も得られない。

私は溜め息を吐き、歩いた。不思議なくらい足が重く、泥沼を歩いているようだつた。

不意に、男女の話し声が聞こえた。聞き逃してしまいそうなその声は、直ぐそばの路地裏から聞こえる。

「いんな早くから・・・テート？」

本当は見てはいけなかつた。しかし、私は気になり建物の角に隠れて様子を伺つた。傍から見れば、とても怪しい行動だが、私は気にしないでほんの少し顔を出した。

路地裏は意外と広く、向こう側にも道が続いていた。そこに立つ二人の人物は、恋人同士の関係ではなく、女性の方が深刻な顔で男性を見つめていた。

「探したよ・・・まさかこんな所で会つなんて・・・」

「私は会いたくなかったわ。父を裏切つたクズ共の顔を・・・また見るなんて・・・」

「俺は会いたかったぞ・・・」

男はゆっくりと、女性の周りを歩いた。一つ一つの動きが滑らかで、嫌らしく感じた。

そこで、私は気付いた。あの女性・・・私は一度見た事がある。カフェテリアでカプチーノを奢つてもらった女性【ライザ】に限り無く似ていた。

「单刀直入に言う・・・何処に隠した?俺達の【オーパーツ】を・・・

・「

聞いた事がない言葉が、聞こえた。彼女【ライザ】は腕組みをし、鼻で笑つた。

「俺達の？笑わせないで、あれは全人類の宝よ？何時から貴方達の物になつたの？」

「ライザ・・・俺は君のために言つてるのだよ？・・・

そして、男の右手がライザの横顔に触れた。

「知つてゐるはずだぞ？ライザ・・・君では、俺の【スタンド】には勝てない」

聞き逃す事が出来ない言葉が、私の耳の中に入つた。よく見ると男の体から、生えるように緑色のチューブが伸び、男の右肩に寄り添う感じでもう一つの頭部があつた。

そして、その頭部は昆虫のような骨格をし、男の右手を覆つように人差し指が異常に長く、刃物のように鋭い【手】が繋がられていた。

「見せつけてる訳じやないぞライザ・・・警告だよ。君の人生に関

しての警告だ・・・君はまだ若いんだ、こんな事で人生を台無しにしたくはないだろ?」

そう言い、男はライザの頬を撫でた。優しく、艶やかに。しかし、ライザはその男に唾を吐いた。微笑んだその姿に、私は少なからず衝撃を受けた。男は短い悲鳴を叫び、後退りした。そして、ハンカチを取り出すと丁寧に付着した唾液を吹いた。

「やつてみれば?人生なんて未来と同じ・・・どうなるなんて誰にもわからない」

ライザは、勝ち誇るように見下した。

「貴方のような【ゲス】に私は負けない!」

男は苦虫を噛んだような表情を浮かべ、ライザを睨み付けた。

「女・・・知ってるはずだ!俺がどんな奴か!」

そして、男は右手で隣接する建物の側面を、スタンドの鋭い爪で切り付けた。まるで、熊が丸太を引っ搔いたような生々しい切り口が、丸太よりも堅い壁に傷を付けた所を見ると、あのスタンドの破壊力は凄まじいものと感じた。

しかし、それだけでは終わらなかつた。

その瞬間、私の背後にあつた建物が無くなつた。変わりに、路上に一枚の【紙】が置かれていた。微風で捲れそうな紙には、先程の建物の絵が描かれており中央に動き回る【一つの膨らみ】があつた。

「なんだこの能力は・・・」

私は呆気に囚われた。一瞬にして建物は【絵】になり、あの膨らみには、男とライザがいる。

「全てはカッティングから始まる・・・」

心臓が跳ねそうな程の衝撃が起きた。いつの間に私の後ろに、男が回り込んだのかわからなかつた。

「君が誰かだなんて知らないていい・・・だが、利用出来るものは何でも利用する・・・」

私は、後ろを振り向くことをした。しかし、それよりも早く男は私の手足を押さえ完全に【ロック】されてしまつた。私は、死に物狂いで暴れた。が、関節という関節を完全に押さえられしかも、口を覆

われ声さえも出なかつた。

「悲しいねえ・・・これから君の生き方は全て【彼女】が握つて
いる・・・」

男は不敵に笑い、私にスタンドの爪を当てた。

交差するアトランタその3

埃臭く、薄暗い部屋の中で一人の男が窓際から隠れるようにして外を覗いていた。薄緑色のニット帽を被り、眼鏡の奥から放たれる眼光は此所数分間、全く微動だにせず見下ろしていた。

そこから見えるのは、静かで鳥のさえずりしか聞えない、薄暗い町並みで物音を發してしまったと住民を起こしてしまいそうな程、澄み切つた空気が漂っていた。

「苛立つてゐるな……久々の仕事なんだ。冷静に……」

男は呟いた。目線の先には、建物の壁をまるで紙のように切り裂く、中年の男性がいた。正面にいる女性は男性を睨み付け、今にも怒り狂いそうだった。

そして、建物の曲がり角。そこにも男性がいて、その光景を見ていた。

「冷静に……だけど執拗に……僕がいる限り、君は大丈夫だよ【クライイン】……」

男の背後から、蠢く黒い物体が泳ぐように部屋から出ていった。不快感を撒き散らす音を奏でて、一匹づつ空え舞つて行つた。

紙と紙の間からライザの右手が這い上がってきた。幼い雛のように手探りで紙を退し、よろめきながら立ち上がったライザは左手で額を押さえていた。左手は血で赤くなり、額は斜めにぱっくりと割れ、流血している。

右手を膝に置き、体を支えた。右目は血で汚れ、充血しているかのようだつた。

「正直に言えばよかつたのに・・・君の美しい顔に、一生に残る傷が付くなんてね」

男は含み笑いを浮かべ、バステットを自身の体に引き寄せた。がつちりと固められ、口を封じられたバステットの胸には、緑色の鋭い爪が当たっていた。

男の声に反応し、ライザは顔を上げた。

「左目はどうした？右目は・・・見えていないだろ？左手で隠された左目にも、血が入ったのかな？」

面白がるような男の声に、ライザは歯を噛み締めた。右目は殆ど見えない。背景は赤黒く、血の海だった。左目がどうなっているのか、彼女自身解らなかつた。ライザは左手の指と指の間から恐る恐る覗いて見た。

男は既に、自身のスタンドを戻していた。上着をずらし、ズボンのポケットからは黒光りする銃のグリップ部分が見えた。視界は良好で、鮮明に風景が左目に写る。

「早く見たらどうだ？現実から田を背くほど・・・君は馬鹿じやないだろ？」

「・・・見てるわよ」

ライザは、体を支えていた右手を男に素早く向けた。発砲音がこだまし、反射的に男はバステットの口を押えたまま盾にした。

ライザの右手には、いつの間にか銃が握られていた。黒光りするグリップは男が見せていたのと酷似し、回転式弾倉の中には弾丸が六発。ライザは再び撃鉄を起した。

「人質を取るなんて・・・卑怯な・・・」

「何でもするさ！オーパーツの為ならな！」

ライザの眼光は、バステットの背後に隠れる男に向けられた。人質にされているのがあのバステットだと知り、気が気でなかった。その事に男は気付いていないのが、最大の【救い】だった。もしバレてしまつたらそれは【弱み】になつてしまつ。

男は再びスタンドを発現させると、爪をバステットの胸に押し当てた。恐怖が感じられる程、バステットの呼吸は荒く、横目で男を見ていた。

ライザにとって、この状況は最悪だつた。最も悪い点はこの場に何故バステットがいるのか、この時ばかりライザ自身、自分の運命を呪つた事はなかつた。

このまま、バステットを見放して逃げ出す事だつて出来た。しかし、ライザは悩んでいた。それも全てライザの【性格】のせいであり、それをライザ自身も知つていた。だが、そんな事よりも今の現状を打破しなければならない。ライザは男を睨み、考えた。

そして、男は溜め息を吐いた。

「そんなに悩む事なのか？君が場所を言えば済む事なんだぞ？」

「煩い！お前なんかに渡すわけない！」

「やうか・・・ならもひとつわかりやすくしよう。此なり、【君は決められる】だろ？」

男の言葉にライザは耳を疑つた。スタンダードの爪を体から離し、男はバステットの首を掴み前に出した。突然の事にバステットとライザは言葉を失つた。

「もし場所を言わなければ、こいつをこの場で・・・一分後に殺す！逃げたら直ぐに殺す！」

男の一言にバステットとライザに衝撃が走つた。

「だが・・・正直に話せば解放してやろう」

追加の一言に、ライザは怒りで我を忘れそうになつた。当然と言わんばかりの表情に、激高しそうになり、ためらうことなく男に向け引き金を引いた。

しかし、弾丸は発射するとはなかつた。撃鉄で叩かれた音だけが広がり、バステットは啞然とした。ライザはもう一度撃鉄を降ろすと、再び引き金を引いた。しかし、弾丸が発射する事はなかつた。ライザは絶望し、思考が止まってしまった。

「〇二（ゴートウ）……！」そといつ時に、つかえないスタンド……残り四十五秒！」

男の大声に、ライザは驚き慌てた。もつ銃での射撃が出来ない事に戸惑い、手の震えが止らない。

バステットの命が自分の手にかかっているのが、最大の弱みであり【プレッシャー】として、ライザの心に深く沈み込む。だが、そんな事を考える暇がなかつた。もしバステットを置き去りにして逃げても、男は地球の果てまで追つて来る。

どんなに意地を張つても、それくらい男に出会つてしまつたのは最悪だった。

ライザは震える手を押さえ、撃鉄をゆっくりと起しすと、引き金に指をかけた。今にも泣きそうな程、顔は歪み、冷や汗が止らない。いくら指に力を入れても動かず、時間だけが過ぎていく。

「ライザさん……」

バステットは、先程まで見ていた彼女の姿とは、全くの別人を見ているようだつた。自分が考えていたより、彼女は弱々しく、まるで數十分前までの自分を見ているようだつた。

そして、バステットははつきりと理解した。自身が思つていた事が、どれ程【愚か】だつたか。ライザは諦めずに何度も引き金を引こう

とするが、引けない。嘔吐してしまいそうな表情をしながら、指に力を入れるライザは弱々しくない。

とても強かった。

「残り十秒！」

男はバステットを引き寄せると、スタンドを発現した。爪は怪しく光、バステットの胸に突き立てた。

「ライザさん！自分を信じて！」

バステットは、自分のよつな【愚か】な考えをライザに持たせたくなかつた。ジョナスに信頼されていないと疑心暗鬼に陥つた自分を決別したく、バステットはライザに言葉を発した。

しかし、男はバステットの口を塞いだ。

「一分だ！こいつは殺す！」

ライザの目の前で、男は腕を上げた。スタンドの爪は一瞬だけ太陽の光に反射し、輝いた。

「止めるー。」

ライザは渾身の力で、引き金を引いた。既に重くのしかかるプレッシャーはなく、先走るように【熱い】感情がライザの指を動かした。先程とは打つて変わり、糸も簡単に引き金を引く事が出来たが、弾丸は発射しなかつた。呼吸が荒くなり、もう一度撃鉄を降ろし、引き金を引いた。それでも弾丸は出なかつた。

残り一発しかない銃は頼もしいとは言えなかつた。それ以前に、もう弾丸は不発で終わるかもしれない。その事をライザは知つていたし、頼れるのはこの銃しかなかつた。ライザは最後の弾丸を撃つ為、撃鉄を起した。

それを見て、男はほくそ笑んだ。

「運に任せたなんて惨めだぞライザ？既にこいつの死は決まっているんだ！」

男はライザの惨めさを見せ知る為に、狙いであるバステットの顔色を伺つた。全くの他人の人生を変える瞬間、どんな奴なのか、表情、特長、体型。興味本意で男の目線はバステットに向けられた。

しかし、男は顔色を伺う事が出来なかつた。その顔は既に人間ではなく、口と鼻は伸びそこから白い毛が生えている。人間が元々ある所に耳はなく、少しづつ頭部えと移動するのが、まじか見れた。目付きも獣のように鋭く、男は何が起きたのかわからず、【彼】が別の物体に変る衝撃に呆気に捕らわれてしまった。

ライザもバステットの異変に気付く、驚いた。

「ライザ・・自信を持つて。信じるんだ」

口を開き、歯が見えた。顔だけではなく、手足も縮みふさふさの毛が生えている。

「貴方も・・・スタンド使い・・・」

ライザは呟いた。

「ソノ弾丸ハ・・・必ズ当タル・・迷ワナイデ・・・」

バステットの声は、人間の声とは思えないくらい、掠れ苦しそうだつた。外見は真っ白い犬になりつつあり、人間の面影は全くない。バステットは爪を起て、男の腕にしがみつく。皮膚に食い込み、血が流れた。

「ゴ主人ヲ・・・助ケテ・・・出会イデ・・・変レルナラ」

「貴様！スタンド使い！？」

我に帰つた男は、一目散にスタンドの爪をバステットに向け、突き刺した。しかし、それよりも早く男の片方の手が潰れた。

バステットの牙が男の手を激しく食いちぎる。男は叫び声を上げながらも、血肉が飛び散る衝撃を忘れ、突き刺した爪を横に切り裂いた。

切り裂き跡だけが胸に残り、後ろ足から一瞬にしてバステットの体は一枚の紙になり、地面に折り畳むように落ちた。微動だにせず、口を開けたまま動かないバステットの上に、男の流血が滴り落ちた。ズタズタに傷ついた手を押さえ、ライザを睨み付ける。銃を突き付けらるているが、竦む様子を見せず苦しそうな顔も見せない。男のプライドが溢れんばかりに感じられた。

「予期せぬ出来事が起こった・・・だが、現状は何も変つていない！俺が死なない限り、こいつは一生額縁に飾れる駄作なのだ！・・・信じろだと？なら撃つてみろ！仕事なんて関係ない、お前を紙屑にしてやる！」

男はライザに突進し、襲いかかった。自分の成すべき事を捨て、憤慨する姿を目の当たりし、ライザはすかさず引き金を引いた。

バステットの言葉を信じたわけではなかつた。男の【悪のオーラ】に圧倒され短い悲鳴をあげ、無意識の内にライザは撃つた。そして、驚いた。

発砲音が耳に響くと、首を断たれる寸前で腕の動きが止つた。男は

後退りをし、自身の首を押えた。驚きに満ち、口を動かすが、声は聞こえず苦しそうに息をしていた。指の間からは血が流れ、銃弾が何処に当たったのか見て取れた。

「撃てた・・・本当に・・・」

何故弾丸が発射されたのか、その疑問よりも【何故バストイドが信じたのか】が、わからなかつた。ほぼ不発の可能性が高いのに、まるで不発ではない事をわかっているかのようだつた。

ライザは腕を降ろした。白目をむき出しにする男はもうすぐ死ぬ。だが、ほっとしたのも束の間、ライザは自分の目を疑つた。

男の右目が、突然窪み穴が開いたのだ。

「まさか！ スタンド攻撃・・・」

ライザは周りを警戒した。そして気付いた。既に、黒く小さな物体が大量に飛び交っていた。いつの間に現れたのかは知らず、目線を物体に移し不愉快な音を発する物体を手で払つた。

物体は【蚊】だつた。それが、大量に飛ぶ姿は異常だつた。

「新手のスタンド使い！逃げなくては・・・そうだ！彼は！」

ライザは一目散にバステットの所に向った。男は完全に消え、地面上にはバステットの服が無造作に落ちているだけだった。バステットは何処にもいなく、蚊は大きな黒い固りになり消えていった。

ズボンのポケットから鍵が飛び出し、ライザは拾いあげた。鍵には透明な長方形が取り付けられていて、そこには三桁の数字とホテル名が書かれてあつた。ライザは鍵を強く握り締めると天を仰いだ。朝日は完全に顔を出し、空は青かつた。

「誰を助けるの？」主人つて誰・・この鍵は・・此所に行けばわかるかもしれない・・必ず助けるから待つて、バステット・・

バステットは何処にもいなかつた。しかし、生きている事をライザは信じた。バステットが銃弾が男に当たる事を信じたように、ライザ自身もバステットを必ず助ける事を決意した。

交差するアトラシタセの3（後書き）

いつも読んでくれまして有り難うござります。そして、更新が遅れてしまい申し訳ありません。海棠です m(—_—)m

”書きたくない病”にかかりてしまはずっとボーッとしていたり、別の作品を構成してみたり、楽器弾いたり、遊んだりしていました。今週から復活です！ご迷惑をおかけしてすみませんでした。此からも頑張って学び、更新していくたいので宜しくお願いします！m(—_—)m

交差するアトラシタセの4（前書き）

御礼をするのを忘れてしまいますみません！

REGRETER様の紹介したスタンドを使わせていただきました。お気に召してもらえたかはわかりませんが、御意見がありまして報告ください。
お願いします！

交差するアトランタその4

その部屋には窓がなかった。天井からぶら下がるペンドントライトが光を灯し、無造作に置かれた書物や家具、古びた工具箱には埃が積もっていた。窓がないせいで空気は冷たく澁み、埃臭い。しかし、僕にとっては、何故か懐しく居心地のよい匂だつた。

僕の目の前には、初老で白い無精髭を生やした男が椅子に座つていた。両手には、飛行機のような形をした黄金色の彫刻を眼鏡越ししから、まじまじと見つめている。

椅子が軋む音だけしか聞えない部屋の中、僕はその人の言葉を待つていた。数時間前に起きた出来事を細部にわたり説明し、その人は軽く唸つた。それから数十秒間の沈黙。

たかが数十秒間、いつも感じるより長く感じたが、僕は姿勢を正し待つていた。

「・・・ライザは元気だったかね?」

怒られると思い、内心怯えていた。しかし、その人は僕の【不甲斐なさ】よりも別の事を問質そうとしていた。

「はい・・・勇ましかつたですよ。あのクライインに重症を与えましたから・・・奇跡的にも生きていますが、もう【声】は出ないと思います」

「そりか・・・」

その人は、彫刻を机の上に置くと、僕の方を向いた。

「医学には詳しくないが、首を貫通したら普通は死ぬだろうな・・・
だが、クラインは生きている。何故かわかるか【ミュグレー】」

「・・・奇跡・・ですか?」

僕の答えに、その人は優しく笑った。

「それも正解だね。だが、まだあると私は思つんだ・・・此所から
は私の考えだが・・クラインは【信念】で生きているかもしれない」

そう言い、その人は僕に黄金色の彫刻を翳した。金色に輝く飛行機
にも似た彫刻には、少からず思い入れがある。この彫刻を盗むのが、
僕の初仕事だったのだ。

名は【黄金ジエット】。南米コロンビアの古代遺跡から見つかった
ペンドントだ。最初は鳥等を象った物だと言っていたが、ある博
士が、当時の時代では考えられない技術が施されているのを知り、
航空会社に調査を求め、その数ヶ月後、驚くべき真実が明らかにな

つたのだ。

この【黄金ジエット】は理論上、飛行可能だった。あの有名なライト兄弟よりも、遙か昔の人々は既にその様な【高度な技術】を持つていたのだ。中には、アマゾン川に住む魚【プレコ】を模した細工物だと言ふ人もいるが、それさえも含めて、この【黄金ジエット】は神秘的である。

「全では必然なんだ。偶然なんてこの世にない・・・この黄金ジエットも魚を模された物だとして、何故理論的に空を飛べるんだ？たかが魚ごときに、空を飛ぶ何かがあるのか？・・・無理に決まる。全では、逃れられない運命なんだ・・・」

「それが・・・クラインの信念とどんな関係があるのですか？」

その人は、僕に背中を見せ、隣りにある棚の最上段に黄金ジエットを置いた。

僕にはわからなかつた。その人が先程話したのは、簡単に言うと【黄金ジエットは必然的に作られた】と熱弁を述べただけ。それが【たとえ話】だとしても無理がありすぎると思ったからだ。

そして、その人は僕の方を振り向いた。

「奇跡さえも・・・そうなる運命なんだ。クラインがライザにやられたのも、人質もスタンド使いだったのも、クラインが生きている

のも・・・全て運命であり、必然なのだよ。そして、クライインは【復讐】を抱いている。プライド高い奴だからな・・・だが、そうなるのも必然であり、生きようとする【信念】・・・

「なら・・・クライインは恨みで生きてるんですか？」

「そりやうな。どちらにしろ、クライインにライザを捕まえる仕事はもつとせない。【殺してしまいました】では、済まさせられないからな・・・後任者はお前が決めてくれ」

「僕が・・・ですか？」

その人は首を縦に振った。薄く笑い、優しい瞳を僕に向けた。

「ミユグレー・・・お前にはまだやる事があるだろ？お前にしか出来ない仕事だ・・・期待してるぞ、ミユグレー。私は今から用事があるから・・・頼んだぞ」

「・・・わかりました」

その人は奥に通じる扉を開き、消えて行つた。一人となってしまい、僕は壁に体を委ねた。上を見上げると、ペンダントライトは眩しく、視野が狭まり目が細くなつたのがわかつた。

悔しさと不甲斐なさ。その二つの気持ちが込み上げて来る。あの人

には、まだ言つていらない事があるのだが、【人質はクライインが殺した】事にしたのだ。それは僕のせいでもあり、どうしても僕自身で解決したかつた。

僕のスタンドがこの場所に戻つて来た時に感じた不安が現実となり、頭の中にいやな想像が過ぎつた。まだ確信に至つてないが、確実に大きくなつて行くのがわかつた。だが、今はライザを捕まえるのを誰にするか。今はあの人と言つとおりにしなければならない。

僕は立ち上がり、部屋を出た。

二人分の幅しかなく、直管型蛍光灯が光を照していた。その人がいた部屋より新しく作られた通路で、まだそんなに汚れたり、ひびが走つたりとはしていない。その通路の右端の奥に、壁に寄り掛かり、腕組みをする男がいた。遠くにいたのでよくわからなかつたが、近付くにつれそれが誰なのか一目でわかつた。

僕は立ち止まり、男の名前を言つた。

「【アリシア】か・・・何してるんだ？」

「別に・・・」

アリシアは無感情に言葉を投げ掛けると、立ち去ろうと歩き出した。アリシアは表情を表に出さず、何を考えているかわからないので、皆から孤立した異色な人物だ。冬でも帽子を被らず、灰色の坊主頭。しかし、アリシアのスタンドならば捕まえる事が出来るかもしけない。特に深夜ならばあの男のスタンドは最大限に發揮する。

僕は大声を出した。

「クライインの仕事！やつてみないか？アリシア！」

すると、アリシアは立ち止まりこちらを振り返った。未だに腕組みをしたまま、アリシアも大きな声を発した。

「【タリスマン】が適任だ！」

意外な返事に、僕は驚いた。アリシアは向きを変えると、再び歩き奥の扉を開きいなくなつた。

「何なんだよ・・・あいつは・・・」

僕はアリシアに対し、不快な気持ちになりながらも【タリスマン】の事を考えた。あいつのスタンドもアリシアと並び、捕らえるのに適している。もしかしたら、ライザを捕まえずに【オーパーツ】を奪う事が出来るかもしれない。

アリシアは、それが出来るタリスマンを推薦したのだと僕は思った。

「しょうがない・・・タリスマンに頼むか

僕はタリスマンを探すため、奥に通じる扉に手をかけた。もしこの仕事が成功したら、今度は自分の番だ。この不安な気持ちを払うために、ドアノブを捻り扉を開けた。

中には四人の男が、丸いテーブルを囲み食事をしていたようだ。端には、目をつぶり壁に寄り掛かるアリシアの姿があり、四人の男は僕をチラリと見ると再び食事を始めた。

この空間に、僕とアリシアと四人の男。その他にクライインは入院し、もう一人は絶対僕達の前には姿を表さない奴だ。クライインと僕を外し、この六人の中に【裏切り者】がいる。

その考えを何とか振り払い、タリスマンを呼んだ。

アスペラードのー（前書き）

一ヵ月以上の無断停止、本当に申し訳御座いませんー。（――）

試験勉強や何やらで遅くなつてしまつましたが、これからは通常通り更新をしてこきます！最後まで突っ走るので、この愚かな作者を応援してやってくださいー。

デスペラードその1

扉を開け、階段を上ると先程とは違つ空気が漂い、窓は開け放たれていた。温かい太陽光は柔らかく、その部屋の中を照し、風が流れてくる。歩く度に床は軋み、外の景色は縁豊である。赤い絨毯が敷かれ、棚には高価な酒瓶が並び、部屋の隅には花瓶が置かれ一輪の花が添えられている。

そんな一室の中、小さなテーブルの上に、黒色の機材が置かれてあつた。

機材からは男女の【声】が聞え、罵声が飛び交い、平手打ちがほとばしり、聞くには耐えがたい内容だ。しかし、ミュグレーはジッと機材を見つめながらその声を聞いていた。両肘を付き、まだ幼さが残る顔立は皺が寄り、険しい。

そんな姿をアリシアは壁に寄り掛かり、ぼんやりと眺めていた。

ミュグレーは、機材の停止ボタンを押すと後ろを振り返った。睨み付けるように目を向け、アリシアは無表情に目線を送った。そして、ゆっくりと口を開けた。

「・・・予定通りタリストマンを向かわせた。万が一の失敗はないと思つが・・・」

「・・・成功するぞ、やつしてもうないと困るからね」

ミュグレーはそう言ひと、おもむろに立ち上がり窓に歩み寄つた。ポケットから煙草を取り出し、その内の一本を口に加えると火を付けた。白い煙が搖めき、フィルター越しから煙を吸いあげた。アリシアはその姿を黙つて見ていた。

満足そうに煙を吐いて、ミュグレーは振りかえり、窓越しに座つた。

「僕ならもつとうまくいける！それをタリスマンに託したんだ…僕の思いも兼ねてね」

先程とは打つて変わり、自身に満ちた表情が浮かんでいた。しかし、アリシアは只黙つてミュグレーを見ていた。何を思い、何を考へているのか、彼の表情から読取る事は出来なかつた。

「それにしても…アリシアも聞いていたと思うが、ライザつてかなり【男勝り】だよな。ジョナスつて言う人に“ぐだぐだ言つてんじやねえ！男だろうが！”だつて…人は見掛けによらないな？」

ミュグレーは再度、アリシアに背を向けると先程機材で聞いた声を、もう一度思い出しながら煙草を吹した。煙は風に靡き、溶けて消えて行く。

後ろでは、アリシアが一步づつ、音を發でずにゆっくりとミュグレーに近付き、右手を伸した。

何を言つても自分の事しか考えない。他人の事も考えずに、むやみやたらと動き出す人物は嫌いだ。そして、その人物はハンドルを握り、真直ぐ前を見据えている。数十分の沈黙は長く、先程、病室で殴られた頬は熱く、痺れている。触ると感覚がなく、【女性はこれ程までに強いのか】と痛感した。

「・・さつきは・・悪かつた・・」

その人物【ライザ】はバックミラーから俺を覗き、罰の悪そうな顔をした。

「別に・・気にしてない」

俺は一言だけ言つと、田を合わせまいと外に目を向けた。生まれ故郷とは違う風景、初めて通る道にほんの少しだけ関心が向けられる事が、俺は今【平常心】でいられる気持ちだった。

しかし、本当は気にしていない訳ではなかつた。

知らない間に起きた事に自分は何もできず、スタンンドが関連する事柄に全くと言つていいほど関与する事が出来ない体になつてしまつた。何故なつてしまつたのか、理由が全くなくわからなかつた。

【スタンドが発現出来なくなつた】なんて言えるはずなく、その間にもバステットは一生懸命に動いていた。それが、俺を焦らせいろんな事を試した。しかし、結果は見てのとおりだ。

そして、追い討ちをかけるかのようにバステットが消えた。そこで、俺は初めて不安以上の【何か】に気付いたのだ。言葉では言い表せない感情、生まれ初めて出来たのはバステットと叫ぶ【友】であり

【仲間】だったのだ。

「本当・・・俺は馬鹿だよな・・・」

自分の顔がどうなつているのか知らず、誰にも見せないよう手で自分の顔を隠した。

俺の体に何が起きたのか、どうすれば元どおりになるのか、重大だがそれはいつでも出来る問題だ。赤子のように何も出来ない俺でも、心配は出来る。

「着いたわ・・・此所よ」

窓から見える風景に視線を送り、俺は目を疑つた。ライザは既に降りていて、その建物を睨み付けていた。どうやら真面目に此所らしい。ドアを開けると、紙袋を幾つも抱える大人が行き交い、子供達の楽しそうな声も聞える。

「行くわよジヨナス・・」

「本当に此所なのか？だつて・・デパートだぜ？」

驚くのも無理はなかつた。病室で大体の事は聞かされていたが、まさかデパートの中に隠すだなんて考えもしなかつた。もし、そうだとしたら驚いた自分もそつだが、奪おうとしている奴等も分からなかつただろう。

「まさか・・デパートの中に隠すだなんて・・・」

そう言い、ライザを見ると彼女は笑っていた。その笑いはおかしいからではなく、騙せて成功したように相手を小馬鹿にした雰囲気だった。

「残念・・少し違うの。付いて来れば分かるわ」

「え・・

促されるまま、彼女の歩く後ろを付いて行つた。何を聞いても“付いて来れば分かる”とだけしか言わず、謎だらけの思考に阻まれたまま行き交う人々の間を縫つて行つた。

そして、徐々に見えてきたのはデパートからほんの少しだけ離れてある小さなトイレだつた。何処にでもある普通のトイレで、当たり前だが男と女は別れていた。

「トイレの中？」

「やべ、トイレの中に隠したの・・・しかも他人には解らはずにね」

トイレの前に立ち、左右にある扉を眺めた。左側には女性のマーク、右側には男性のマーク。

「で・・どの扉なんだ？」

俺は建物を眺め、嫌な予感を感じながらもライザに視線を送つた。しかし、予感は当たつてしまつた。左側の扉を開け、誰もいないか中を覗く彼女の姿は【口よりも体が動いてしまう】彼女の性格そのものだつた。

俺は女性トイレの中に入るのを拒み、外で見張りながら待つことにした。一体、どの様にして隠したのか気になるが、彼女が現れた時にでも聞こうと思いながらも、やはり一番気にしていたのはバストゥトの生死だった。

生きていて欲しい。手遅れだつたとしても、願わなければどんなに悲しいか、大切な人を無くし、自分は不幸だと知り、しかしそれよりももっと底辺がある事がわかり、俺は悔しかつた。わかっていた事なのに実際はわかつていなかつたのだ。

俺にとつての底辺よりも下は、【真の友を無くした時の圧倒的な不甲斐なさ】だつたのだ。それより下は経験したくはない。だから、俺はバステットが生きている事を信じなくてはならない。その第一歩として、ライザと一緒に居なければならなかつた。【オーパーツ】を狙う者を倒せば、必ず結果がわかる。

スタンド使い同士の引力から外れた俺でも、戦えるかは不安だが【絶対】ではないのだ。

「それにしても・・遅いな。何してんだ?」

ライザが入つた後、全く物音がしない事に俺は苛立つてゐた。扉に取り付けられている硝子はぼかすように作られ、当たり前だが中を確認する事は出来なかつた。

しかし、突然扉が開いたのだ。それでも中を確認するのは困難だつた。白い靄がかかり、蠢く人影が見えたと思うと一直線にライザが飛んできたのだ。一瞬の出来事だつた。俺の横を通り過ぎ、数回、

体を回転させ道端に倒れたライザは銃を持ち、ピクリとも動かない。

急いでライザに駆け寄り、肩に触れた。顔には擦り傷が出来ていたが、死んではない。

「新手のスタンド使い！」

俺は女性トイレを睨み付けた。白い靄しか見えず、扉が勝手に閉じられていった。

デスペラードその2

騒動にならないうちに、ライザを抱き抱え近くの茂みに彼女を寝かした。微かな吐息が聞え、頬は赤みを帯びている。無抵抗に横たわる彼女を見下ろし、俺は彼女が持っていた銃を握り締めた。

既に意志は固まっている。トイレからは物音一つせず、端から見れば普通のトイレである。駆け寄り、壁に背を向け、俺はトイレのドアノブを握り締めた。

曇り硝子で何も見えない。しかし、確実に中に敵がいる。銃の撃鉄を起し、手に力を込めながらいきよいよドアを開け放つと、最初に飛び込んできたのはその空間だった。

白い靄、所ではない。何も見えないのだ。たかが数メートルしかない奥の壁が全く見えない。白い【何か】は、外に漏れ溶けて消えた。「煙か？だが・・・何なんだこの濃さは・・・どんな能力なんだ？」

俺は、手に持つ銃を前に向けた。銃身が煙を縦断し、煙は渦を巻いた。

出来る限り煙を吸わないよう服で鼻と口を押さえ、俺はゆっくりと前へ進んだ。

「・・・やるしかないか

体が全て入ると、突然扉が閉まつた。急いで開けようとしたが、扉は開かない。

「くそ・・・仕方ない。敵を倒さないと戻れないと言つなら、そうしてやる!」

回りには白い煙しかなく、不思議な感覚だつた。手探りで見つけた壁を伝い、床の感触を確かめながら、この狭い空間の何処にいるのかわからない敵を探さなければならぬ。

そして、目に襲う刺激で涙が止まらず、視界は全くの皆無。それでも、いつ襲つてくるかわからない敵に対応するため、銃は構えたままだつた。鼻は押さえているので大丈夫だが、この状況はスタンドが使えない俺じゅなくとも、かなり不利な状況だつた。

「畜生・・・」う何も見えないんじや・・・」

俺は目の刺激に耐えながらも、一つ一つのトイレを調べた。扉を開ける度に緊張感が走り、怖かつた。だが、一つだけわかつた事がある。

煙の正体。それは【煙草】だった。

便座の上に一瞬だけだが、無数に小さな赤い光が見えたのだ。顔を近付けると、火が点けられた煙草が長さは所々違うが、置かれてあ

つた。それに気付いて、俺はその個室の床に目を凝らした。

まるでゴミの中こいつだつた。個室だけではなく全ての床、一面に煙草が積もり、俺はその道を歩いていたのだ。見ただけでも吐き気がしそうだった。便座の上に乗る煙草を払いのけ、足でおもいつきり踏み固めると、赤い光は消え、灰が舞い上がった。

俺は次の個室に向いながらも、その行動を忙しく行なつた。舞う灰に、俺は銃を構える暇がなかつた。襲われなかつたのは本当に運がよかつた。灰を払いのけ、別の個室に入つても誰もいなく、あるのは無数の煙草。

「一体・・・何がしたいんだ。こんな事して何になんだよ

俺は、ぼやきながらも一連の作業をした。個室から出ると少しだけ煙が晴れ、そこで俺は田の前の存在に気付いた。服をハンカチ代わりにし、瞳は赤く腫れ上がり泣いているようだつた。空中の煙を仰ぐと空氣と同化し、その姿は鮮明に【俺】を写していた。

鏡から目を放し、女性トイレ内を見渡しても誰もいない。

「まさか！・・・もつ奪われたのか！」

嫌な予感が過ぎり、俺は急いで扉に向かおうと振り向いた。しかし、そこである事に気付き、固まつた。田の前に写る俺の姿に俺自身も驚いていた。早く敵を追わなければいけない。立ち止まる暇なんてないのに、その【現象】に頭の中に様々な思考が巡つた。

「ソウカ・・ソウユウ事ナンダナ?」

背後から、突然声が聞えた。小さく聞き逃がしてしまいそうだつたが、俺は銃を向け振り替えた。だがそこには誰もいなく、その代わり、また煙が頭上から流れ充满しだした。

「動クナヨ・・・従エバ何モシナイ」

「上か!」

今度は頭上から、先程よりも鮮明に聞え、銃を天井に向けると俺はいきよよく引き金を引いた。爆発音と共に弾丸は煙を貫き、同時に腹部に重い激痛が走り、後ろの壁に激突した。苦しい痛みで体は動かず、顔をあげる事が出来なかつた。

「動クナト言ツタハズダ! 誰カニ聞コエタラドウスルツモリダ!」

俺は苦しみながらも、声のした方を向いた。そこには煙しかなかつたが、その煙は明らかに人の形をしていた。細身だが筋肉質で、肘と膝からは後方に向け刃のようなデザインが施されている。頭はとぐろを巻き、ゆらゆらと蜃気楼のように揺めき、俺に近付くとその右足を上げ、何度も振り落としてきた。

幾度も襲う打撃は重く、全身に食らつた。両腕からは不気味な音が響き、俺は叫ぶが打撃は尚も続いた。何度も続く攻撃に、防御も出来ず受けるまま。氣絶してしまえばどれだけ楽か。しかし、俺は最後まで耐えた。終わる頃には、動かすだけで体に激痛が走り、特に両腕は激しく脈打ち熱い。息をするのも思つように出来ず、銃もその場で壊されてしまった。

「スタンド使イト思ツタガ・・違ウヨウダナ。ダガ、ソンナ事ナド
ドウデモイイ」

敵のスタンドが笑つているようにも見え、心の底から怒りが膨らんできた。しかし、俺は何も出来なかつた。痛め付けられた体は、予想以上に悲鳴をあげコントロール出来ない。両腕は悲鳴ではなく、叫び声が聞え動く事が無理に等しい。そんな俺を、敵スタンドは見下ろし左耳に手を伸した。

どうやら気付かれたようだ。俺の体に起きた現象に、敵の興味が移つていた。

「ナンダコレハ? 只ノイヤリングナノニ・・何カラ指差シティタヨ
ウニモ見エタガ・・・貴様、何故コレヲ持ツテイル?」

「う・・ぐ、そ・・・」

「ナンダ? ナンダッテ?」

敵は俺の髪を鷲掴みにし、壁に押し付けた。敵の手と口ごこち、俺は笑つた。

「くそやろ・・スタンドがなけりや・・・何も出来ないくせに…」

スタンドの表情からは、どんなふうに感じたかはわからない。だが、不快に感じたのは確かだった。目の前に煙が集まり、それがスタンドの膝になると俺の顔面に激突した。血が飛び散り、おとなしくなった体の痛みが蘇つた。

「雑魚ガ！力 モ無イクセニ強ガリヤガツテ！」

鼻からは熱い血が流れているのがわかつた。

手で押さえようにも動かず、俺のイヤリングを奪い取る敵の姿をぼんやりと見ていた。

もう俺には何も出来ない。

敵スタンドは鏡に向い、イヤリングを掲げている。先端を鏡に向け、鏡の奥を指差しているようにも見えた。あのイヤリングは、今は亡き親父からもらつたものだ。そのイヤリングが一体何を指しているのか、もしや鏡の奥には【例の物】が隠されているのかもしない。だが、そうだとすれば俺のイヤリングがどうして反応したのかがわからなかつた。

「・・・此所力！」

敵スタンドが鏡に向い拳を叩き付けている。しかし、何度も拳を叩き付けながらも鏡は破れない。敵スタンドは驚き、怒り出し大声を発し何度も何度も拳を込めている。その姿は先程の威勢と違い、馬鹿らしい程、幼稚な行動に見えた。

「クソ！ナンデ破レナイ！マダ何カアルノカ！」

そして、敵スタンドは俺の胸倉を掴みに掛かった。ツンとした刺激臭が鼻を刺し、これ以上近付いて欲しくなかつた。

「才前知ツテルダロウ！知ツテルナ？答エロオ！」

「つるせえ・・知らねえよ！」

知らない物は知らないのに、敵スタンドの拳が顔の右側に当たり、吸い殻が溜まる床に激しく飛び込んだ。今の攻撃が、俺の脳を揺らし目の前がどんどん崩れて行く。

「ま・・だ・・駄目・・・」

徐々に暗闇が広がり、体の痛みは不思議となかった。耳鳴りが激しくこだまし、敵スタンドが何かを言っているのが分かつたが、聞き

取れず全てが幻聴にしか思えなかつた。

「ライザ・・バス・・・テット、『めん・・・

そこで、俺は深い闇の中に落ちた。

デスペラードその3

一体どれくらいの時間、気絶していたのだろうか。微かな刺激臭が鼻を通り、余りの苦しさに俺は目覚めた。ゆっくりと上半身を起すと体からは痛みはなく、折れていると思った腕は自由に動かす事が出来る。周りを埋めつくしていた煙は消えていた。

俺が気絶している間に一体何が起きたのかわからなかつた。勿論、敵スタンドの姿もなく静寂な空間が広がつている。

「終わったのか・・・オーパーツも奪われて・・・俺は用済み？」

悔しくて泣きたくなつた。これではライザに会せる顔もない。俺は溜め息を吐き目線を落とした。

「・・・これは」

下腹部の辺りに、俺のイヤリングが置かれていた。あの時敵スタンドに奪われたイヤリングともう一つ、同じ形のイヤリングが置かれ、二つのイヤリングを俺は手に取り手の平にのせた。照明に反射し鈍く光っている。

「確か……一つ何処かに落としたんだよな？何故その一つが……ここに？」

ジッヒとイヤリングを見つめると、不意に違和感を感じた。

それはイヤリングに対してではなく、その周辺に見える自分の腕に、丁度、服から黄色い三角形のシールが貼られているのが見えた。

貼った覚えなどないシールが気になり、腕を捲ると、驚き息をのんだ。心臓の鼓動が激しく動くのが感じる。それくらい、俺はありえない物を見てしまったのだ。しかしこれで【何故体の痛みがなく、腕の痛みが退いたのか】がわかつた気がした。イヤリングを握り締め、俺は立ち上がり鏡の前に立つと自分の顔にある物を撫でた。

鼻の頭に、両腕、胸、腹部、両足と皮膚の上にそれらは貼られていた。

「もしかして……来たのか？俺達の後を追つて来て……」

そうだとしたら、無くしたイヤリングを置いたのはあの人なのか。ずっと近くにいたのか。なら、どうして今頃なんだ。そして、何故ここにいない。もしかしたら敵を追つて行つたのか。様々な考えが浮び、俺は握り締めていたイヤリングを見つめ両耳に付けた。

耳たぶにずっしりとイヤリングの重さを感じる。

もう無くしてはいけない。親父が残した形見でもあり、あの人が届けてくれた大切な物。そして、あの時イヤリングに起きた不可解な

現象が俺の目の前で起きていた。イヤリングの尖んがつた部分が鏡の中を指差しているように見える。

反応するといつ事はまだ、奪われていなじょうだ。そんな気がした。親父はどうしてこれを持っていたのか、今では知ることもできない。

「親父・・・あんた何者なんだ・・・」

俺は鏡にうつる自分を睨み、手の平を伸し触れた。向こうの自分も全く同じ動作を行なう。お互いの手の平が重なった、まさにその瞬間だった。

俺の手に重なる別の手が現れたのだ。同時に触れた部分にはひびが入り、反射的に手を引込んだ。ピンと空気が張り、手が震え、汗ばんでいる。まさかと思つた。奇跡でも起こらない限り、この鏡にひびが入るはずないのに。俺の【スタンド】だつてもしかしたら幻覚かもしけない。しかし試す価値はある。俺は触れた手に意識を集中させた。

すると、手が一重にブレ、いつも見慣れていた色と形が現れた。体中が震え言葉では言い表せない安堵感と感動に、俺は目をつぶり感じた。そして、目を開け、俺は鏡にうつる自分の【隣りに立つ人】の腕を振り上げた。

「・・・もう手放さない。今も、これからも、ずっと俺の側にいろよ。【キング・ダイアモンド】」

俺の言葉に答えるかのよう、「【キング・ダイアモンド】の拳が鏡のひびに向かつて放たれた。

「・・・コレハナンダ?」

【敵スタンド】は不思議そつて血身の手に張付いている【物】を凝視していた。

それは黄色い色をしていて、中央には星の形をした模様が描かれている。指に辛うじて付いているそのシールは、気絶しているジョナスを殴った時に付着したものだった。

「タダノ【シール】カ・・・」

【敵スタンド】は【シール】を剥そつと、もう片方の手で【シール】に触れた。

すると【シール】から火花が放たれた。あまりの事に【敵スタンド】

は驚き、のけぞった。その衝撃にあと少しで剥れそうな【シール】は剥れ、宙を舞つた。

「ナンダコレハ！マサカ……『イツノ【スタンド】力！』

【敵スタンド】は【シール】から距離を取り両腕を構えた。周りの煙も、【敵スタンド】の周囲に集まり、凝縮し、野球ボールくらいの十個の玉が出来上がっていた。葉っぱのようにひらひらと舞う【シール】は、床一面に広がる吸い殻の上に落ちて行く。

「タダノ……【シール】デハナイン。【スタンド】ダ、アイツノ【スタンド】……コレカラガ本番力！」

確信したかのように【敵スタンド】は言うと、凝縮された煙の一つを【シール】に向けて放つた。音もなく、【シール】に煙の玉が当たり、その周囲の灰が散らかり、【シール】は再び宙を舞つた。

「……違ウノカ？」

【敵スタンド】の目線はジョナスに向かっていた。【シール】がジョナスの【スタンド】だと思っていたが、ジョナスはピクリとも動かない。【スタンド】のダメージは本体にも傷を追わせるのに、ジョナスの体には変化はなく【敵スタンド】は困惑していた。

「ナラ・・・コノ【シール】ハナンナンダ? 一体・・・・コレハ・・・」

【敵スタンド】はもう一度、煙の玉を放とうとした。しかし、【敵スタンド】はある事に気付いた。それは、彼の本体も感じ、手にとるようになかつた事だった。

【敵スタンド】が持つていたイヤリングが何処にもない。【敵スタンド】は自分の周りを見渡したが、何処にも落ちてはいない。

しかし、イヤリングは直ぐに見つける事が出来た。さつきまで【敵スタンド】が【シール】を剥そうとしていた場所に、吸い殻から尖んがつた先を覗かせた状態で見つけたのだ。そして、それは直ぐにその上を【シール】が落ち、覆いかぶさる。その瞬間だった。

【シール】が眩く光つたと思うと、イナズマがほとばしつた。何が起きたのかわからず【敵スタンド】は雄叫びをあげ、ただ一心不乱に煙の玉を【シール】に放つた。

吸い殻が舞い上り、煙の玉は【シール】に当たる度に部屋中を煙に満たし、濁らせる。しかし、【シール】はイナズマを発し【変化】を止めない。

「ナンナンダコレハアア!」

【敵スタンド】は嘆くように大声を荒げ天井を見上げた。最後の一つは野球ボールより数倍も大きくなり、【シール】にぶん投げられ

た。いきよによく吸い殻と灰が舞い、一瞬にして周りが白く濁んだ。その攻撃が聞いたのか、イナズマの光は消え、煙で何も見えない静寂な空間が広がった。

「・・モウ・・・何モ起キナイヨナ」

【敵スタンド】は自身の体を煙と同化させた。部屋中の煙は【敵スタンド】となり、【シール】を見下ろした。しかし、そこには【シール】はなかつた。イヤリングも消え、吸い殻と灰に埋もれたのかと【敵スタンド】は思った。

しかし、【敵スタンド】はある事に気付いた。イヤリングがあると思つた所に、足跡のような窪みがあつたのだ。

それは、断続的に続き、【敵スタンド】はその窪みの先を目で追つた。窪みは丁度ジョナスが倒れている所で止り、【敵スタンド】は自分の目を疑つた。

そこには、【誰か】がいた。ジョナスの傍らにしゃがみ、口と鼻を紫のハンカチで押えている。目からは涙がこぼれ開けるのも一苦労のように、顔を歪ませながらジョナスに【シール】を張付けていたのだ。

「大丈夫か・・・ジョナス・・・くそ・・・此所は何処なんだ」

周りがどうなつてゐるのか、男はまだわかつていなかつた。【敵ス

タンド】は何が起こったのか未だにわからないでいた。しかし、この男もまた【邪魔者】だと【敵スタンド】は判断した。

そして、【敵スタンド】はゆっくりと男の首へと手を伸した。

デスペラードその4

男は気付いてはいなかつた。

陥しく目頭を歪ませ、空中の一点を睨んでいる。

背後に迫る【敵スタンド】の手は、いよいよ男の首を締め上げようと力が入る。煙の流れは【敵スタンド】に流れ込み、すると【敵スタンド】は何を考えたのか再び煙の一部へと消えた。このままでいけば気付かれずに男を倒す事が出来たのにもかかわらず、まるで逃げるよひに【敵スタンド】は消えたのだ。

その瞬間、男は後ろを素早く振り返つた。

「今……誰かが、いた」

独り言のように呟いた男の周りを、煙と化した【敵スタンド】が漂い見下ろしていた。偶然にも気付かれずにすんだようにも見えた【敵スタンド】の行動は、次の男の動きで実はそうではなかつた事が判明した。

男は目線を上下左右に動かすと、動いているのかいないのかわからぬ速さで首を右へ動かしたのだ。何を追つているのか、それは煙だった。煙の対流を男は目で追つていた。【敵スタンド】が手を形成するのに使つた煙の流れを、男は見逃さなかつたのだ。

【敵スタンド】は男の動向を伺つていた。微妙な対流の動きに気付

いた男に、今から攻撃を加えようなら直ぐに避けられてしまいそうだと感じていた。しかし、このまま何もしないわけではなかつた。

煙の対流を最小限におさえ、ゆっくりと形を象つたのは鋭い矛先を持つ短い槍。矢のように細い棒を掴み、その先は男の頭部に向っていた。

今、この時でも男は漂う煙を追つてゐる。煙の中で【敵スタンド】は笑つた。頭部と槍までの距離は殆どなく、【敵スタンド】は短い槍をおもいつきり上空へとあげた。

煙の流れは槍に引張られ上昇し、男も頭上を見上げた。

「コレデモクラエエ！」

【敵スタンド】の叫びと共に急激に落下する槍が男の目の前に現れた。狙いは男の額、しかし槍は頭部を貫く事はなく、男の太股に突き刺さつた。

狙いは外れてしまつた。男は痛みを堪えながらも田の前にいる【敵スタンド】を睨み付けた。

姿を見られた【敵スタンド】。だが、見られている事よりももっと大変な事が起きていた。【敵スタンド】の胸が凹み、それは【槍の軌道が外れた】原因と繋がつた。

「あまりのことにビックリしたろ？・・今からお前を殴るからな」

「や、止めひおおー」

男の背後、床から通気口を伝い、【星様のシール】が貼られていた。通気口から流れてくる【男】の声が聞え、【敵スタンド】はよがりながら、歪んだ。体中に拳位の穴が開き、体が瞬く間に消えてなくなるのと同時に、隣りの男子トイレから、誰かが扉を蹴破るよう、音が聞え、周りに漂っていた煙が薄くなつた。

男から数メートル離れた位置に、女子トイレの扉が見え、男は走り出した。

扉を開け、男は蹲っている【男】を見つけた。激しく嗚咽を吐き、震えながら立ち上がつた。

「痛え・・・痛えよ・・・誰なんだよお前は・・邪魔しやがつて・・あと少しだったのに・・・」

【男】の顔は、子供の落書きのように不細工なものだつた。痛々しい程に顔は崩れ、その顔で、【男】は痛みと悔しさで泣いていた。

「なんて言つか・・・【残念だ】。だが、そんのはどうでもいい。お前に聞きたい事が山のようにあるからな?だから、抵抗なんてするな」

「ふざけんじやねえ！仕事の邪魔をしやがって！」この【タリスマン】
様がぶちのめしてやる！」

男は自分を【タリスマン】と言つと、右ポケットからサバイバルナイフを取り出した。鈍く先が光、タリスマンはナイフを構え、前へと踏み出した。

男は頬を人差し指で搔きながら溜め息を吐いた。

「お前・・・なんで【スタンド】を出さないんだ？」

男の言葉に、タリスマンは目を大きく見開いた。額から汗がにじみで、気付かれてはいけない事をいつも簡単にバレてしまつたかのよう、血の気がひいていた。

「【スタンド】でも出せない理由もあるのか？例えば・・・密室の空間とか・・・一定の濃度とか・・・媒体にする物がないとか？どちらにしろお前に勝目はない・・・」

「つむせえ・・・殺してやるー。」

それは、突然の事だつた。タリスマンは男にナイフを向け、突進したのだ。男は一步も動かず、タリスマンのナイフを受け止めた。

男の体とナイフの先はほんの数センチ、タリスマンの右手を黄色い手が掴んでいた。

「だから言つたんだ……抵抗するなつてな」

タリスマンは恐怖した。男の右手の甲に貼られてある【シール】から、もう一本の腕が伸び、これから何が起きるのか、ようじに想像がついてしまった。

タリスマンは悲鳴をあげることもなく、男の【スタンド】の拳を体中に受け、血を吐き、歯を折られ、幾多びの思い連打を受け、その場に膝ま付いた。【スタンド】がタリスマンの手を放すと、糸の切れた操り人形のように、前に倒れた。

タリスマンはピクリとも動かない。男はこめかみを押えた。

「やつちまつた……色々と聞き出したかったのに……」

男は辺りを見渡した。近くにはデパートと思われる建物があり、人が行き交っている。幸運にも誰も気付かれてはいない様子だった。

倒れているタリスマンを抱え込み、男は目に入つた茂みの中へと連れ込んだ。通行人に見られては、たまたまもんじやない。男はそう考えた。丁度、男を隠せるくらいに生え伸びている茂みの中なら、隠せると男は思ったのだ。

茂みの中に入ると、思惑どおり男は見えなくなつた。タリスマンを

その場に横倒し、男はタリスマンの服を調べた。一体このタリスマンは何者なのか、男は知りたかった。

それは、直ぐに見つかった。タリスマンのズボンのポケットから見つけた黒い財布。中を調べると、免許証が入っており、男はそれを引き抜いた。

引き抜いた瞬間、不意に一枚の紙切れが舞つた。どうやら免許証と免許証入れの間に挟まっていたようだ。しかし、それだけではなかった。

男とタリスマンの他に、誰かの影が男と重なったのだ。その瞬間、”カチリ”と男にとつて聞き覚えのある音が聞え、免許証を持った状態で両手を上げた。

「「」の茂みの中で、全部見させてもらつたわ。貴方は・・・一体誰？」

まだ若く、色氣のある声だと男は思った。

チラリと見えた紙切れには、小さく走り書きで、文字が書かれてあつた。見た限りでは、何処かの【住所】のようだつた。

「答えなさい・・貴方は誰なの？」

そこからは速かつた。手の甲に貼られた【シール】から、再び【スタンド】の両手が伸び、女性の持つ銃を掴み、破壊し、気をとられた女性を男ははがいじめにした。

思っていたとおり美しい女性だった。そして、気も強そうだった。
下から男を女性は睨み付けていた。

「何をするー」

「銃を突き付けたのは君だろ？君が悪いんだ……それに、俺は
敵じゃない」

「嘘つきー放しなさいー」

「放したらまた襲うだろ？それに、俺は知りたいだけだ！俺の名前
はスキッドー【スキッド・ロウ】！ジョナスの親友だ……別
に信じなくてもいい、嫌でも知るんだからな」

暴れる彼女を、押さえこむ【スキッド】。その耳に確かに聞えた音
があった。

トイレが設置されてある場所から、硝子の割れる微かな音が、貼つ
てきた【シール】から聞こえたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1828d/>

ジョジョの奇妙な冒険外伝～A New World The Story～
2010年10月11日01時10分発行